

GateKeeper ガイド

Borland VisiBroker[®] 7.0

Borland[®]
Excellence Endures™

Borland Software Corporation
20450 Stevens Creek Blvd., Suite 800
Cupertino, CA 95014 USA
www.borland.com

ライセンス規定および限定付き保証にしたがって配布が可能なファイルについては、deploy.html ファイルを参照してください。

Borland Software Corporation は、本書に記載されているアプリケーションに対する特許を取得または申請している場合があります。該当する特許のリストについては、製品 CD または [バージョン情報] ダイアログボックスをご覧ください。本書の提供は、これらの特許に関する権利を付与することを意味するものではありません。

Copyright 1992-2006 Borland Software Corporation. All rights reserved. すべての Borland のブランド名および製品名は、米国およびその他の国における Borland Software Corporation の商標または登録商標です。その他のブランドまたは製品名は、その著作権所有者の商標または登録商標です。

Microsoft, .NET ログおよび Visual Studio は、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

サードパーティの条項と免責事項については、製品 CD に収録されているリリースノートを参照してください。

2006 年 5 月 11 日初版発行
著者 : Borland Software Corporation
発行 : ボーランド株式会社
PDF

目次

第 1 章	
Borland VisiBroker の概要	1
VisiBroker の概要	1
VisiBroker の機能	2
VisiBroker のマニュアル	2
スタンドアロンヘルプビューアからの VisiBroker オンラインヘルプトピックへのアクセス	3
VisiBroker コンソールからの VisiBroker オンラインヘルプトピックへのアクセス	3
マニュアルの表記規則	4
プラットフォームの表記	4
Borland サポートへの連絡	4
オンラインリソース	5
Web サイト	5
Borland ニュースグループ	5
第 2 章	
Gatekeeper の概要	7
Gatekeeper の概要	7
ゲートウェイまたはプロキシとしての Gatekeeper	7
Gatekeeper の追加機能	8
Gatekeeper の主な用途	8
Gatekeeper のインストール	8
Gatekeeper の起動	9
Gatekeeper をコマンドラインから起動する	9
コマンドラインオプション	9
Gatekeeper を NT サービスとして実行する	10
Gatekeeper を NT サービスとして削除する	10
Gatekeeper を Web サーバーでサブレットとして実行する	10
Gatekeeper の管理	10
第 3 章	
GateKeeper とネットワーク間デバイスの設定	11
GateKeeper の配布場所	11
同じネットワーク上のクライアントとサーバー	11
隣接したネットワーク上のクライアントとサーバー	12
間に複数のネットワークが存在するクライアントとサーバー	15
マルチホームホストの設定	18
IP 転送の有効化	19
ルーティングテーブル	19
ファイアウォールの設定	20
ネットワークアドレス変換 (NAT) の使い方	21
GateKeeper の設定	21
リスナーポート	21
管理サービス	22
コールバックの有効化 (VisiBroker 3.x スタイル)	22
パススルー接続の有効化	22
ロケーションサービスの有効化	23
スマートエージェント (osagent) の指定	23
オブジェクトアクティベーションデーモン (OAD) の指定	23
GateKeeper サーバーエンジンの設定	23
セキュリティサービス	24
SSL トランスポート ID と信頼ポイント	24
ウォレットプロパティを使用した SSL ID のインストール	24
証明書ログインを使用して GateKeeper に SSL ID をインストール	24
peerAuthenticationMode の設定	25
アプレットと Java Webstart	25
標準のアプレットクライアントに関する VisiBroker の設定	26
Java Webstart として配布される VisiBroker アプリケーション	26
第 4 章	
ユーザープログラムの設定	27
ファイアウォール背後のオブジェクトの使い方	27
単一 POA のプログラミング	27
サーバーに関連付けられているすべての POA のファイアウォールポリシーを設定	28
実行時のファイアウォールパッケージのロード	28
クライアントプロパティの設定	29
クライアントに常にプロキシを指定	29
クライアントに HTTP トンネリングを指定	29
クライアントにセキュリティで保護された接続を指定	30
クライアントにパススルー接続を指定	30
パススルー接続の有効化	31
クライアントのビット順の指定	31
クライアントのコールバックリスナーポートの指定 (VisiBroker 3.x スタイル用)	31
サーバープロパティの設定	31
サーバーのリスナーポートの指定	31
ランダムリスナーポート	31
特定リスナーポート	32
ポート変換 (NAT)	32
IIOP ポートの無効化	32
サーバーまでの通信パスの指定	32
プロキシサーバーのコンポーネントの指定	33
NAT による TCP ファイアウォールコンポーネントの指定	33
第 5 章	
高度な機能	35
GateKeeper のチェイン化	35
GateKeeper の静的チェイン化	35
GateKeeper の動的チェイン化	36
コールバック	36
GateKeeper なしのコールバック	36
双方向 GIOP を使用する GateKeeper なしの接続	37
Gatekeeper の双方向サポートによるコールバック	38
双方向接続サンプル	38
セキュリティに関する注意	39
アクセスコントロール	40
GateKeeper におけるカスタムアクセスコントロール	40
負荷分散とフォールトトレランス	42
負荷分散	42
GateKeeper におけるカスタム負荷分散	43
フォールトトレランス	43

スケーラビリティとパフォーマンスに関するガイドライン	44
GateKeeper パフォーマンスの調整	44
ビッドメカニズム	44
キャッシュ管理	44
メッセージマーシャリング	45
スレッド管理	45
接続管理	45
GateKeeper の非同期呼び出しの影響	45
GateKeeper のパフォーマンスプロパティ	46
接続の設定	46
スレッド関連の設定	46
GateKeeper のモード	46
呼び出しの種類	47
GateKeeper ガイドと SSL	47
GateKeeper との SSL 接続	48
送信呼び出しと双方向呼び出し用の SSL	48
GateKeeper におけるセキュリティサービスの有効化	48
GateKeeper を介したネーミングサービスへのアクセスの有効化	51

第 6 章

GateKeeper のトラブルシューティング 53

トラブルシューティングの準備	53
デバッグ情報の取得	53
デバッグモードの GateKeeper の起動	55
環境設定	55
トラブルシューティングツール	56
コンピュータネットワークに関する情報の取得	57
基本的な確認項目	58
スマートエージェントのチェック	58
プロパティファイルのチェック	59
ルーティングテーブルのチェック	59
パススルー接続のチェック	59
Java ポリシーのチェック	59
SSL のチェック	60
IOR ファイルのチェック	60
ファイアウォール設定のチェック	60
一般的なエラーと FAQ	60
プロキシサーバーと GateKeeper	61

付録 A

GateKeeper プロパティ 63

一般プロパティ	63
外部サーバーエンジン	64
ex-hiop サーバー接続マネージャ (SCM) のプロパティ	64
ex-iiop サーバー接続マネージャ (SCM) のプロパティ	66
ex-hiops サーバー接続マネージャ (SCM) のプロパティ	67

ex-ssl サーバー接続マネージャ (SCM) のプロパティ	68
内部サーバーエンジン	69
in-iiop サーバー接続マネージャ (SCM) のプロパティ	69
in-ssl サーバー接続マネージャ (SCM) のプロパティ	70
管理のプロパティ	71
アクセスコントロール	72
VisiBroker 3.x スタイルのコールバック	73
パフォーマンスと負荷分散	74
双方向通信をサポートするプロパティ	75
パススルー接続をサポートするプロパティ	76
セキュリティサービス (SSL) のプロパティ	76
ロケーションサービス (スマートエージェント) のプロパティ	77
VisiBroker 4.x 以前と下位互換性があるプロパティ	78
サーバーのファイアウォール仕様に関するプロパティ	78
その他の ORB プロパティ	79

付録 B

GateKeeper の配布例 81

TCP ファイアウォール (Gatekeeper を使用しない)	81
Gatekeeper の配布	89
サーバー側にファイアウォールがある Gatekeeper	94
Gatekeeper 前面のファイアウォール	94
Gatekeeper の前後にファイアウォールが存在	97
Gatekeeper とクライアント側のファイアウォール	100
Gatekeeper の負荷分散とフォールトトレランス	102
Gatekeeper のチェイン化	105
複数のファイアウォール/サブネット環境での VisiBroker の使用	108
ファイアウォールとスマートエージェント構成	109
ファイアウォール構成でのスマートエージェントの使用	110
ファイアウォール構成でのスマートエージェントのエラー時の動作	111
スマートエージェントを使用するクライアントの動作	111
GateKeeper とほかの CORBA サービスの使用	112
HTTP プロキシサーバーを使用した GateKeeper の設定	112
GateKeeper へのサーバーエンジンの追加	113
GateKeeper へのリスナーまたはサーバー接続マネージャの追加	113
GateKeeper のストレス/負荷メトリック	113
サンプルとしての GateKeeper の配布	114
サンプルのビルド	114
サンプルの実行	115
web.xml	115
Client.properties	117

索引

119

第 1 章

Borland VisiBroker の概要

Borland は、CORBA 開発者に向けて、業界最先端の VisiBroker オブジェクトリクエストブローカー (ORB) を活用するために *VisiBroker for Java*, *VisiBroker for C++*, および *VisiBroker for .NET* を提供しています。この 3 つの VisiBroker は CORBA 2.6 仕様の実装です。

VisiBroker の概要

VisiBroker は、CORBA が Java オブジェクトと Java 以外のオブジェクトの間でやり取りする必要がある分散配布で使用されます。幅広いプラットフォーム (ハードウェア, オペレーティングシステム, コンパイラ, および JDK) で使用できます。VisiBroker は、異種環境の分散システムに関連して一般に発生するすべての問題を解決します。

VisiBroker は次のコンポーネントからなります。

- VisiBroker for Java, VisiBroker for C++, および VisiBroker for .NET (業界最先端のオブジェクトリクエストブローカーの 3 つの実装)。
- VisiNaming Service - Interoperable Naming Specification バージョン 1.3 の完全な実装。
- GateKeeper - ファイアウォールの背後の CORBA サーバーとの接続を管理するプロキシサーバー。
- VisiBroker Console - CORBA 環境を簡単に管理できる GUI ツール。
- コモンオブジェクトサービス - VisiNotify (通知サービス仕様の実装), VisiTransact (トランザクションサービス仕様の実装), VisiTelcoLog (Telecom ログサービス仕様の実装), VisiTime (タイムサービス仕様の実装), VisiSecure など。

VisiBroker の機能

VisiBroker には次の機能があります。

- セキュリティと Web 接続性を容易に装備できます。
- J2EE プラットフォームにシームレスに統合できます (CORBA クライアントが EJB に直接アクセスできる)。
- 堅牢なネーミングサービス (VisiNaming) とキャッシュ、永続的ストレージ、および複製によって高可用性を実現します。
- プライマリサーバーにアクセスできない場合に、クライアントをバックアップサーバーに自動的にフェイルオーバーします。
- CORBA サーバークラス内で負荷分散を行います。
- OMG CORBA 2.6 仕様に完全に準拠します。
- Borland JBuilder 統合開発環境と統合されます。
- Borland AppServer などの他の Borland 製品と最適に統合されます。

VisiBroker のマニュアル

VisiBroker のマニュアルセットは次のマニュアルで構成されています。

- *Borland VisiBroker インストールガイド*— VisiBroker をネットワークにインストールする方法について説明します。このマニュアルは、Windows または UNIX オペレーティングシステムに精通しているシステム管理者を対象としています。
- *Borland VisiBroker セキュリティガイド*— VisiSecure for VisiBroker for Java および VisiBroker for C++ など、VisiBroker のセキュリティを確保するための Borland のフレームワークについて説明しています。
- *Borland VisiBroker for Java 開発者ガイド*— Java による VisiBroker アプリケーションの開発方法について記載されています。Visibroker ORB の設定と管理、およびプログラミングツールの使用方法について説明します。また、IDL コンパイラ、スマートエージェント、ロケーションサービス、ネーミングサービス、イベントサービス、オブジェクトアクティベーションデーモン (OAD)、Quality of Service (QoS)、インターフェースリポジトリ、および Web サービスサポートについても説明します。
- *Borland VisiBroker for C++ 開発者ガイド*— C++ による VisiBroker アプリケーションの開発方法について記載されています。Visibroker ORB の設定と管理、およびプログラミングツールの使用方法について説明します。また、IDL コンパイラ、スマートエージェント、ロケーションサービス、ネーミングサービス、イベントサービス、OAD、QoS、プラグイン可能トランスポートインターフェース、RT CORBA 拡張機能、Web サービスサポート、およびインターフェースリポジトリについても説明します。
- *Borland VisiBroker for .NET 開発者ガイド*— .NET 環境による VisiBroker アプリケーションの開発方法について記載されています。
- *Borland VisiBroker for C++ API リファレンス*— VisiBroker for C++ に付属するクラスとインターフェースについて説明します。
- *Borland VisiBroker VisiTime ガイド*— Borland による OMG Time Service 仕様の実装について説明します。
- *Borland VisiBroker VisiNotify ガイド*— Borland による OMG 通知サービス仕様の実装について説明します。通知メッセージフレームワークの主な機能として、特に Quality of Service (QoS) のプロパティ、フィルタリング、および Publish/Subscribe Adapter (PSA) の使用方法が記載されています。

- *Borland VisiBroker VisiTransact ガイド* — Borland による OMG Object Transaction Service 仕様の実装および Borland Integrated Transaction Service コンポーネントについて説明します。
- *Borland VisiBroker VisiTelcoLog ガイド* — Borland による OMG Telecom Log Service 仕様の実装について説明します。
- *Borland VisiBroker GateKeeper ガイド* — Web ブラウザやファイアウォールによるセキュリティ制約の下で、VisiBroker GateKeeper を使用して、VisiBroker のクライアントがネットワークを介してサーバーとの通信を確立する方法について説明します。

通常、マニュアルにアクセスするには、VisiBroker とともにインストールされるヘルプビューアを使用します。ヘルプは、スタンドアロンのヘルプビューアからアクセスすることも、VisiBroker コンソールからアクセスすることもできます。どちらの場合も、ヘルプビューアを起動すると独立したウィンドウが表示されるため、このウィンドウからヘルプビューアのメインツールバーにアクセスしてナビゲーションや印刷を行ったり、ナビゲーションペインにアクセスすることができます。ヘルプビューアのナビゲーションペインには、すべての VisiBroker ブックとリファレンス文書の目次、完全なインデックス、および包括的な検索を実行できるページがあります。

重要 Web サイト <http://www.borland.com/techpubs> には、PDF 版のマニュアルと最新の製品マニュアルがあります。

スタンドアロンヘルプビューアからの VisiBroker オンラインヘルプトピックへのアクセス

製品がインストールされているコンピュータでスタンドアロンのヘルプビューアからオンラインヘルプにアクセスするには、次のいずれかの手順を実行します。

- | | |
|----------------|---|
| Windows | <ul style="list-style-type: none"> • [スタート プログラム Borland VisiBroker Help Topics] の順に選択します。 • または、コマンドプロンプトを開き、製品のインストールディレクトリの <code>%bin</code> ディレクトリに移動し、次のコマンドを入力します。
<code>help</code> |
| UNIX | <p>コマンドシェルを開き、製品のインストールディレクトリの <code>/bin</code> ディレクトリに移動し、次のコマンドを入力します。
<code>help</code></p> |
| ヒント | <p>UNIX システムにインストールするときの指定で、PATH エントリのデフォルトに <code>bin</code> を含まないようにします。カスタムインストールオプションを選択して PATH エントリのデフォルトを変更せず、PATH に現在のディレクトリのエントリがない場合は、<code>./help</code> を使用してヘルプビューアを起動できます。</p> |

VisiBroker コンソールからの VisiBroker オンラインヘルプトピックへのアクセス

VisiBroker コンソールから VisiBroker オンラインヘルプトピックにアクセスするには、[Help | Help Topics] を選択します。

[Help] メニューには、オンラインヘルプ内のいくつかの文書へのショートカットもあります。ショートカットの 1 つを選択すると、ヘルプトピックビューアが起動し、[Help] メニューで選択した項目が表示されます。

マニュアルの表記規則

VisiBroker のマニュアルでは、文中の特定の部分を表すために、次の表に示す書体と記号を使用します。

表 1.1 マニュアルの表記規則

表記規則	用途
<i>italic</i>	新規の用語およびマニュアル名に使用されます。
computer	ユーザーやアプリケーションが提供する情報、サンプルコマンドライン、およびコードです。
bold computer	本文では、ユーザーが入力する情報を示します。サンプルコードでは、重要なステートメントを強調表示します。
[]	省略可能な項目。
...	繰り返しが可能な直前の引数。
	二者択一の選択。

プラットフォームの表記

VisiBroker マニュアルでは、次の記号を使用してプラットフォーム固有の情報を示します。

表 1.2 プラットフォームの表記

記号	意味
Windows	サポートされているすべての Windows プラットフォーム
Win2003	Windows 2003 のみ
WinXP	Windows XP のみ
Win2000	Windows 2000 のみ
UNIX	すべての UNIX プラットフォーム
Solaris	Solaris のみ
Linux	Linux のみ

Borland サポートへの連絡

ボーランド社は各種のサポートオプションを用意しています。それらにはインターネット上の無償サービスが含まれており、大規模な情報ベースを検索したり、他の **Borland** 製品ユーザーからの情報を得ることができます。さらに **Borland** 製品のインストールに関するサポートから有償のコンサルタントレベルのサポートおよび高レベルなアシスタンスに至るまでの複数のカテゴリから、電話サポートの種類を選択できます。

Borland のサポートサービスの詳細や **Borland** テクニカルサポートへの問い合わせについては、Web サイト <http://support.borland.com> で地域を選択してください。

ボーランド社のサポートへの連絡にあたっては、次の情報を用意してください。

- 名前
- 会社名およびサイト ID
- 電話番号
- ユーザー ID 番号 (米国のみ)
- オペレーティングシステムおよびバージョン
- **Borland** 製品名およびバージョン
- 適用済みのパッチまたはサービスパック
- クライアントの言語とそのバージョン (使用している場合)
- データベースとそのバージョン (使用している場合)

- 発生した問題の詳細な内容と経緯
- 問題を示すログファイル
- 発生したエラーメッセージまたは例外の詳細な内容

オンラインリソース

ネットワーク上の次のサイトから情報を得ることができます。

Web サイト	http://www.borland.com/jp/
オンラインサポート	http://support.borland.com (ユーザー ID が必要)
リストサーバー	電子ニュースレター (英文) を購読する場合は、次のサイトに用意されているオンライン書式を使用してください。 http://www.borland.com/products/newsletters

Web サイト

定期的に <http://www.borland.com/jp/products/visibroker/index.html> をチェックしてください。**VisiBroker** 製品チームによるホワイトペーパー、競合製品の分析、FAQ の回答、サンプルアプリケーション、最新ソフトウェア、最新のマニュアル、および新旧製品に関する情報が掲載されます。

特に、次の URL をチェックすることをお勧めします。

- http://www.borland.com/products/downloads/download_visibroker.html (最新の **VisiBroker** ソフトウェアおよび他のファイル)
- <http://www.borland.com/techpubs> (マニュアルの更新および PDF)
- <http://info.borland.com/devsupport/bdp/faq/> (**VisiBroker** の FAQ)
- <http://community.borland.com> (英語、開発者向けの弊社 Web ベースニュースマガジン)

Borland ニュースグループ

Borland VisiBroker を対象とした数多くのニュースグループに参加できます。**VisiBroker** などの **Borland** 製品のユーザーによるニュースグループへの参加については、<http://www.borland.com/newsgroups> を参照してください。

メモ これらのニュースグループはユーザーによって管理されているものであり、ボーランド社の公式サイトではありません。

第 2 章

Gatekeeper の概要

ここでは、Gatekeeper の概要と Gatekeeper のさまざまな起動方法について説明します。

GateKeeper の概要

Gatekeeper は Borland Software Corporation が開発した OMG-CORBA 準拠の GIOP プロキシサーバーです。これは、インターネットブラウザ、ファイアウォール、Java サンドボックスセキュリティによるセキュリティ制約の下で、CORBA クライアントと CORBA サーバーがネットワークを介して通信するためのサーバーです。したがって、セキュリティ制約のために、クライアントがサーバーと直接通信できない場合は、Gatekeeper がクライアントからサーバーへのゲートウェイまたはプロキシを提供します。

サーバーを直接クライアントに開放したくない場合、あるいはクライアントによるサーバーへのアクセスが制約されている場合に、Gatekeeper を使用することになります。後者は、クライアントが署名のないアプレットであるか、間にファイアウォールがあるかのどちらかです。

ゲートウェイまたはプロキシとしての Gatekeeper

VisiBroker ORB に基づく分散システムをインターネットまたはイントラネットを介して配布する場合は、次のような多くのセキュリティ制約をシステムに適用できます。

- 一定のホストに対するクライアントからのアクセスを抑止するサーバー側ファイアウォール。
- 発信接続を抑止するクライアント側ファイアウォール。
- HTTP 以外のプロトコルを禁止するクライアント側ファイアウォール。

Gatekeeper は、VisiBroker ORB の下でクライアントおよびサーバー間のゲートウェイまたはプロキシとして動作します。これにより、OMG CORBA ファイアウォール仕様に基づいて上記の制限を機能させるメカニズムを提供します。特定の制約があるためにクライアントがサーバーに直接には接続できない場合、クライアントは Gatekeeper への接続を選択できます。クライアントは Gatekeeper にメッセージを送信し、Gatekeeper はサーバーにそのメッセージを転送します。

また、特定の制約があるためにサーバーがクライアントに接続してコールバックを戻すことができない場合、サーバーは Gatekeeper への接続を選択します。サーバーは

Gatekeeper にコールバックメッセージを送信し、Gatekeeper はクライアントにそのメッセージを転送します。

これをまとめると、Gatekeeper には次の機能があります。

- ファイアウォールを通過できるプロキシ
 - コールバック機能
 - ネットワーク上の位置透過性
- Java
- HTTP トンネリング

Gatekeeper の追加機能

GateKeeper のその他の機能について簡単に紹介します。

- Java
- Java クラスをロードする簡単な Web サーバーとして機能します。Java サンドボックスセキュリティは、署名のない Java アプレットに対して、そのアプレットがダウンロードされたホストマシン上で実行されているサーバー以外とは、通信できないようにします。この問題は、Gatekeeper を設定することで解決できます。
- Java
- ブートストラップ。Gatekeeper は、サーブレットをサポートする任意の Web サーバーの内部でサーブレットとして実行できます。この設定により、HTTP (HIOP) の IIOP が有効になり、Java クライアントで使用することができます。
 - 負荷分散とフォールトトレランス。マスター Gatekeeper と 1 つ以上のスレーブ Gatekeeper をまとめてクラスタリングし、クライアントに対して 1 つの Gatekeeper として見せることができます。この設定は、負荷分散に柔軟性を与え、一定レベルのフォールトトレランスを実現できます。
 - カスタマイズ可能な IP ベースのアクセスコントロール。オペレーション、署名などの条件に基づいて、アクセスを拒否または許可するように Gatekeeper を設定できます。
- メモ
- GateKeeper の設定については、第 5 章「高度な機能」を参照してください。

Gatekeeper の主な用途

Gatekeeper は主に、ファイアウォールや転送の制約に対処するためにプロキシとして利用します。また Gatekeeper は Web サーバーとして機能し、負荷分散やアクセスコントロールの機能も取り入れています。ただし、Gatekeeper を本格的な Web サーバー、本格的な負荷分散システム、本格的なアクセスコントロールシステムとしては使用しないでください。Gatekeeper はそれらのシステムをサポートするようにデザインされています。

Gatekeeper のインストール

Gatekeeper は、VisiBroker のコンポーネントとして提供されています。Gatekeeper の動作には、次のコンポーネントが必要です。

- VisiBroker スマートエージェント
 - VisiBroker ORB ライブラリ
 - VisiBroker Gatekeeper プロパティファイル
 - VisiBroker コンソール
- メモ
- Gatekeeper はスタンドアロンのプロセスです。CORBA IDL コンパイラは必要ありません。

Gatekeeper の起動

GateKeeper を起動するディレクトリは、GateKeeper の使用方法によって決まります。

- ファイアウォールに対する IIOP プロキシとして
- HIOP をサポートする Web サーバーとして
- VisiBroker for Java で HIOP をサポートする別の Web サーバーと組み合わせて

通常は、ファイアウォールの管理者がプロキシの責任者になるため、Gatekeeper を IIOP プロキシとして使用する場合は、ファイアウォールの管理者に問い合わせてください。

Gatekeeper を補足的な Web サーバーとして使用する場合は、Gatekeeper を Java アプリレットのコードベースと同じディレクトリで起動することをお勧めします。前述の最初の 2 つの機能では、Gatekeeper をコマンドラインで起動したり、Windows/NT サービスとして実行できます。

Gatekeeper を別の Web サーバーと組み合わせて使用する場合は、その Web サーバーでサブレットとして Gatekeeper を起動できます。

GateKeeper をコマンドラインから起動する

Gatekeeper を起動するには、次のコマンドを使用します。

```
prompt> gatekeeper
```

メモ GateKeeper をコマンドラインから起動するには、CLASSPATH 設定のパスに servlet.jar が含まれている必要があります。

servlet.jar は、VisiBroker に付属してインストールされる Tomcat の下にあります。次に例を示します。

```
<intalldir>/lib/tomcat/common
```

ここで、<intalldir> は、VisiBroker がインストールされているルートディレクトリの場所を表します。たとえば、Windows では C:¥visibroker です。

たとえば、Windows では、CLASSPATH を環境変数として指定し、検索パスに servlet.jar を入れます。

Gatekeeper を起動すると、起動メッセージに続いて、起動中のサービスを示す一連のメッセージが表示されます。このメッセージの例を次に示します。

```
Sun Feb 16 23:43:28 2003: Starting GateKeeper for VisiBroker ...
Sun Feb 16 23:43:31 2003: Request Forwarding Service is started.
Sun Feb 16 23:43:31 2003: Administrative Service is started.
Sun Feb 16 23:43:31 2003: IOR is stored in GateKeeper.ior.
Sun Feb 16 23:43:31 2003: GateKeeper for VisiBroker is started.
```

コマンドラインオプション

gatekeeper コマンドを使用する際は、次のコマンドラインオプションを利用できます。

表 2.1 Gatekeeper のコマンドラインオプション

Option	説明
-props file_name	Gatekeeper のプロパティファイルの名前を示します。ファイル名を指定する場合は、フルパスを入力できます。このファイルのデフォルトの場所は、Gatekeeper をインストールしたディレクトリです。このファイルのデフォルトの名前は GateKeeper.properties です。
-J-D<Property-name>=<value>	起動時に Gatekeeper のプロパティを指定します。
-h, -help, -usage, -?	コマンドの使用方法を表示します。
-quiet	GateKeeper が出力を生成しないように指定します。

Gatekeeper を NT サービスとして実行する

Gatekeeper は、NT サービスとしてインストールできます。ただし、その前に、目的の NT プラットフォームで DOS プロンプトから Gatekeeper を実行できることを確認してください。

Gatekeeper を NT サービスとしてインストールするには、コマンドラインで次のコマンドを入力します。ここで、servicename は、インストールする Gatekeeper の名前です。

```
gatekeeper -install "servicename"
```

-props オプションでプロパティファイルを指定する場合は、指定するプロパティファイルのフルパス名を入力してください。

Gatekeeper を NT サービスとしてインストールした後は、標準の [Services] コントロールパネルから Gatekeeper を起動できます。

Gatekeeper を NT サービスとして削除する

Gatekeeper NT サービスを削除するには、コマンドプロンプトで次の構文を使用します。

```
gatekeeper -remove "servicename"
```

Gatekeeper を Web サーバーでサーブレットとして実行する

Gatekeeper は、サーブレットをサポートする任意の Web サーバーの内部でサーブレットとして実行できます。Gatekeeper は、正しい HIOP コンポーネントを Gatekeeper の IOR に生成することを目的とした特別な HIOP リスナーとして起動します。HIOP コンポーネントには、Web サーバーのホスト、ポート、および Gatekeeper サーブレットへのパスを組み込みます。クライアントは、HIOP コンポーネント内で指定されている Gatekeeper に HIOP 要求を送信します。この機能の利点は、配布やパッケージングの際に、Web サーバーや Borland パーティションなどのシステムに組み込むほかのコンポーネントと密接に統合できるところです。

通常、Web サーバーでサーブレットとして Gatekeeper を実行しても、パフォーマンスの大幅な向上は期待できません。トンネリングされたすべての要求は、引き続き Gatekeeper がスタンドアロンで実行されている場合と同じように Gatekeeper を通過するからです。

メモ コマンドラインからではなく、サーブレットとして Gatekeeper を実行する場合は、管理機能の一部のほか、Gatekeeper の出力機能を利用できなくなります。

Gatekeeper の管理

VisiBroker コンソールから、ネットワークシステムの条件に応じた Gatekeeper のプロパティを設定できます。Gatekeeper のプロパティはプロパティファイルに保存され、Gatekeeper は起動時にこのファイルを参照します。

第 3 章

GateKeeper とネットワーク間 デバイスの設定

ここでは、Gatekeeper とネットワーク間デバイスを設定して、ネットワーク間でクライアントオブジェクトとサーバーオブジェクトの間の通信を可能にする方法について説明します。まず、Gatekeeper を配布する場所について説明します。

GateKeeper の配布場所

ここでは、Gatekeeper に適した配布場所を特定するための基本ポイントをいくつか説明します。

次の情報を用意します。

- クライアントの場所
- サーバーの場所とサーバーのリスナーポート
- クライアントとサーバーを接続するネットワーク
- 接続ネットワーク上のファイアウォール、ルーター、およびゲートウェイの設定

クライアントとサーバー間の接続パスを探します。パスは複数のネットワークにまたがる場合があります。クライアントがサーバーに接続できるようにするには、接続パスが必要です。接続パスがなければ、クライアントはサーバーと通信できません。

同じネットワーク上のクライアントとサーバー

クライアントとサーバーが同一ネットワーク上に存在する場合、クライアントは常にサーバーと直接通信できます。ただし、次に示すケース 1 と 2 の例のように、状況によっては、GateKeeper が必要な場合があります。GateKeeper が必要な場合は、同じネットワーク上の任意のホストに GateKeeper を配布します。

ケース 1: クライアントのトランスポートの種類に制限がある場合

クライアント側のプロパティを使用して、クライアントがサーバーとの接続に使用できるトランスポートを制限できます。次の場合は、Gatekeeper が必要です。

- クライアントが常にプロキシを介して接続する (vbroker.orb.alwaysProxy)
- クライアントが常に HTTP トンネリングモードを使用する (vbroker.orb.alwaysTunnel)

詳細は、29 ページの「クライアントプロパティの設定」を参照してください。

ケース 2: Java サンドボックスセキュリティ

Java サンドボックスセキュリティは、署名のない Java アプレットが、そのアプレットのダウンロード元のホストで実行されているサーバー以外のサーバー上にあるサーバーオブジェクトと通信できないようにします。この場合は、Java サンドボックスセキュリティ制限に対応するために、クライアントとサーバー間のゲートウェイとして Gatekeeper が必要です。

隣接したネットワーク上のクライアントとサーバー

クライアントとサーバーのネットワークどうしが互いに隣接している場合は、ゲートウェイやルーターなどのネットワーク間デバイスを使用して接続します。場合によっては、どちらかのネットワークまたは両方のネットワークにファイアウォールが存在します。説明をわかりやすくするため、ここではファイアウォールをネットワーク間デバイスの一部と仮定します。ネットワーク間デバイスは 2 つのネットワーク間のメッセージ転送とルーティングを管理します。また、特定のメッセージを別のネットワークに移動できないようにブロックすることもできます。これがファイアウォールの役割です。クライアントのプロパティを使用して、クライアントがサーバーとの接続に使用するトランスポートを制限できます。

次の場合は、Gatekeeper が必要です。

- クライアントが常にプロキシを介して接続する
- クライアントが常に HTTP トンネリングモードを使用する

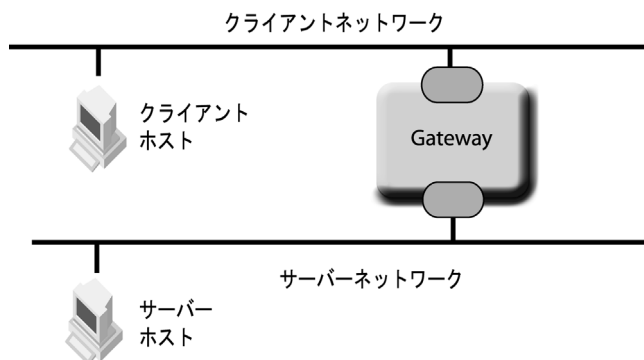
詳細は、29 ページの「クライアントプロパティの設定」を参照してください。

ケース 1: Java サンドボックスセキュリティ

Java サンドボックスセキュリティは、署名のない Java アプレットが、そのアプレットのダウンロード元のホストで実行されているサーバー以外のサーバー上にあるサーバーオブジェクトと通信できないようにします。この場合は、Java サンドボックスセキュリティ制限に対応するために、クライアントとサーバー間のゲートウェイとして Gatekeeper が必要です。

次の図は、隣接したネットワーク上のクライアントとサーバーです。

図 3.1 隣接したネットワーク上のクライアントとサーバー



ケース 1：クライアントのトランスポートの種類に制限がある場合

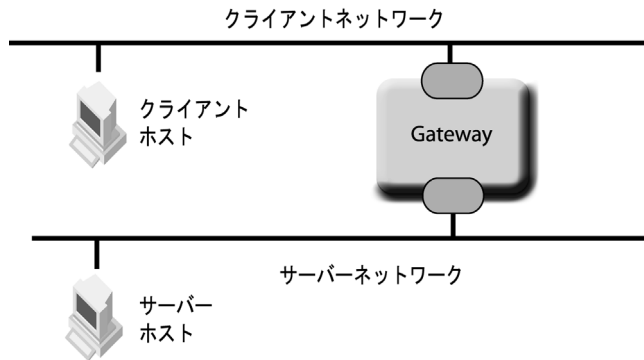
クライアントのメッセージをサーバーに届けるためには、ネットワーク間デバイスが、メッセージをクライアントネットワークからサーバーネットワークに転送する必要があります。Gatekeeper を配布するのに適切な場所を見つけるには、ネットワーク間デバイスがクライアントネットワークからサーバーネットワークに転送できるメッセージの種類を判別してください。

次のケースは、隣接するクライアントとサーバーネットワークの Gatekeeper を配布できる場所をすべて示しています。

ケース 1：Gatekeeper が不要な場合

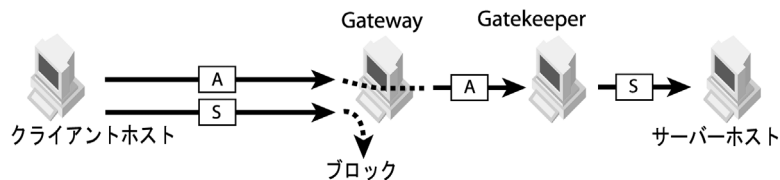
ゲートウェイが、すべてのクライアントメッセージをクライアントネットワークからサーバーネットワークに転送できる場合は、Gatekeeper は必要ありません。

次の図は、クライアントがタイプ A のメッセージをサーバーに送信し、サーバーはタイプ A のメッセージを監視します。ゲートウェイは、メッセージ（タイプ A）をサーバーネットワークに転送します。次に、サーバーがそのメッセージ（タイプ A）を受信します。タイプ A の一般的な例は、IIOP と IIOP / SSL です。



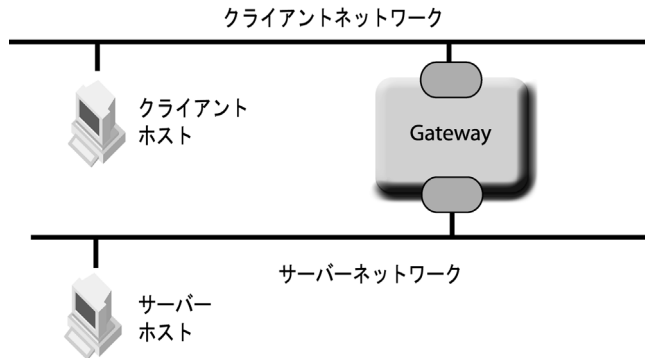
ケース 2：サーバーネットワークに GateKeeper がある場合

次の図では、サーバーがタイプ S のメッセージを監視します。ゲートウェイは、タイプ S のメッセージはブロックしますが、タイプ A のメッセージはクライアントネットワークからサーバーネットワークに転送できます。クライアントがタイプ S のメッセージをサーバーに送信しても、そのメッセージはゲートウェイによってブロックされてしまいます。ゲートウェイがメッセージをサーバーネットワークに転送できるように、クライアントはタイプ A のメッセージを送信する必要があります。サーバーネットワークで GateKeeper はプロキシとして必要です。クライアントがタイプ A のメッセージで Gatekeeper と通信するのに対して、Gatekeeper はタイプ S のメッセージでサーバーと通信します。HTTP と IIOP が、それぞれタイプ A とタイプ S の例です。この構成例は HTTP トンネリングモードで、ゲートウェイ/ファイアウォールは HTTP パケットは許可していますが、IIOP パケットは許可していません。



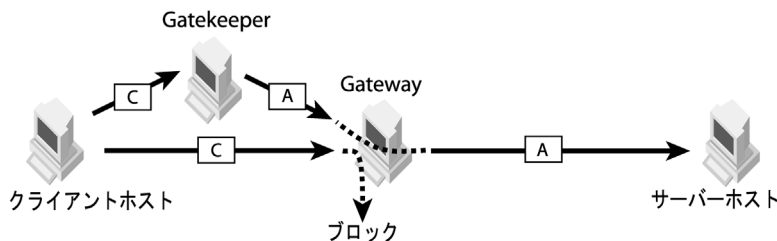
ケース 3 : クライアントネットワークに GateKeeper がある場合

サーバーはタイプ A のメッセージを監視しますが、クライアントがサーバーとの通信に使用できるのはトランスポートタイプ C だけです。ゲートウェイは、タイプ C のメッセージはブロックしますが、タイプ A のゲートウェイは転送します。クライアントネットワークには Gatekeeper が必要です。クライアントはトランスポートタイプ C で Gatekeeper と通信し、Gatekeeper はタイプ A のメッセージでサーバーと通信します。ゲートウェイは、タイプ A のメッセージを Gatekeeper からサーバーネットワークに転送します。トランスポートタイプ C とトランスポートタイプ A の例は、それぞれ HTTP と IIOP です。



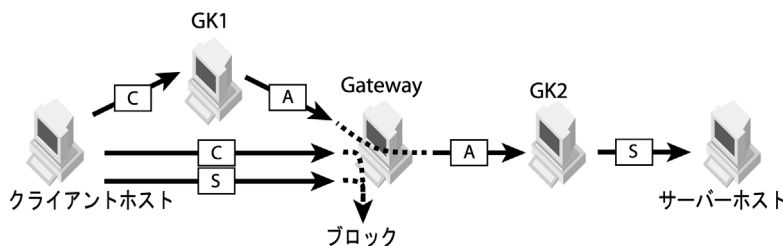
ケース 4 : 両方のネットワークに GateKeeper がある場合

ゲートウェイは、クライアントが送信したメッセージ (タイプ C) と、サーバーが監視できるメッセージ (タイプ S) の両方をブロックします。その他のタイプのメッセージ (タイプ A) は転送できます。したがって、クライアントネットワークとサーバーネットワークの両方に Gatekeeper が必要です。クライアントは、タイプ C のメッセージを使用して GK1 と通信します。GK1 は、タイプ A のメッセージを使用して GK2 と通信し、タイプ A のメッセージは、タイプ S のメッセージを使用してサーバーと通信する GK2 によって転送されます。タイプ C のメッセージの例は HTTP、タイプ A のメッセージの例は SSL、タイプ S のメッセージの例は IIOP です。



ケース 5 : ネットワーク間デバイスに GateKeeper (デュアルホーム) がある場合

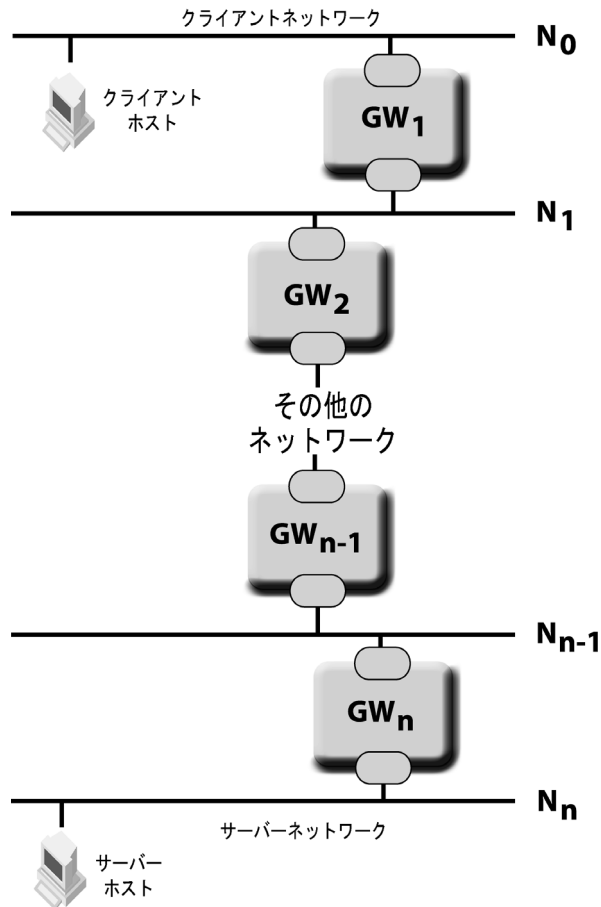
デュアルホームホストに Gatekeeper をインストールすると、サーバーネットワークに Gatekeeper を配布した場合 (ケース 2) と同じような働きをします。違いは、Gatekeeper が、外部ネットワークにクライアントメッセージがないか常に監視する点です。内部ネットワークに存在するクライアントが同じ Gatekeeper を使用してサーバーにバインドする必要がある場合、メッセージを Gatekeeper リスナーに届けるには、まず外部ネットワークに転送する必要があります。HTTP と IIOP が、それぞれタイプ A およびタイプ S のメッセージの例です。



間に複数のネットワークが存在するクライアントとサーバー

複雑な環境になると、クライアントネットワークとサーバーネットワークの間に複数のネットワークが存在します。隣接する各ネットワークは、ネットワーク間デバイスを使用して接続されています。

図 3.2 間に複数のネットワークが存在するクライアントとサーバー



説明のため、クライアントネットワークに N_0 と番号を付けます。クライアントネットワークの隣のネットワークの番号は N_1 、その次は N_2 、以下サーバーネットワークまで同様に番号を与えます。以下の説明で、サーバーネットワークの番号は N_n とします。ネットワークの設定に応じて、 n を実際の数字に置き換えてください。また、ネットワーク N_{n-1} と N_n の間のネットワーク間デバイスの番号は GW_n とします。

クライアントは、複数のトランスポートタイプを使用してサーバーと通信できます。トランスポートタイプの例としては、IIOP、IIOP / SSL、HTTP、HTTPS などがあります。有効なトランスポートタイプごとに、クライアントメッセージが到達できる範囲で最も遠いネットワークを見つけてみます。ネットワーク N_0 にあるクライアントは、ネットワーク N_0 にメッセージを送信します。 GW_1 は、ネットワーク N_1 にメッセージを送信する場合とそうでない場合があります。 GW_1 が N_0 から N_1 にメッセージを送信できる場合、メッセージはネットワーク N_1 に届きます。続いて、 GW_2 は、ネットワーク N_2 にメッセージを送信する場合とそうでない場合があります。クライアントネットワークからサーバーネットワークへと、ネットワークを通過していきます。メッセージが到達する最後のネットワークを N_c とします。つまり、 GW_{c+1} ではネットワーク N_{c+1} にメッセージを送信できません。

サーバーには、1 つまたは複数のリスナーポートがあります。各ポートごとに、クライアントから送信される種類のメッセージを監視します。たとえば、IIOP リスナーポートと

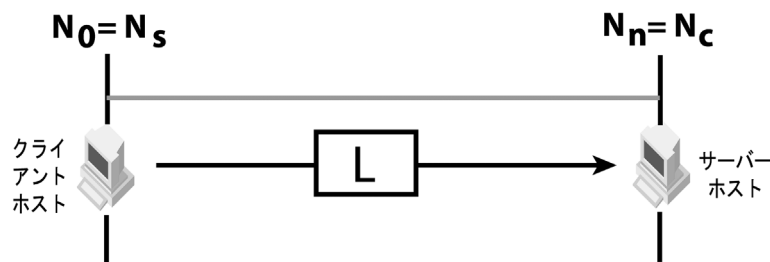
SSL リスナーポートがあるサーバーの場合、IIOP ポートを使用して IIOP メッセージを監視し、SSL ポートを使用して SSL 上の IIOP メッセージを監視します。各リスナーポートごとに、クライアントメッセージが到達できる範囲でサーバーから最も遠いネットワークを見つけてください。最遠のネットワークを N_s とします。つまり、ネットワーク N_s にあるクライアントはサーバーにメッセージを送信できます。

メモ VisiBroker 3.x スタイルのコールバックが必要な場合、 N_c と N_s にはさらに条件が必要です。サーバー（ネットワーク N_n ）からのコールバックメッセージは、ネットワーク N_s に届くものとします。GateKeeper を使用するとき、クライアント側でコールバック通信チャネルをネットワーク N_c に設定できるものとします。

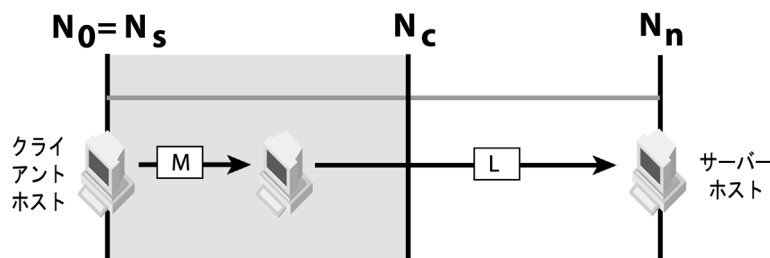
ケース 1：サーバーがクライアントネットワークからメッセージを受信できる場合 (s=0)

サーバーがトランスポートタイプ L を監視すると仮定します。クライアントネットワークから送信されたトランスポートタイプ L のメッセージは、サーバーネットワークに届き、その後サーバーに届きます。

クライアントがトランスポートタイプ L を使用してメッセージを送信できる場合は、タイプ L のクライアントメッセージをサーバーネットワークに転送できるため、Gatekeeper は必要ありません。たとえば、サーバーは IIOP を監視しているため、クライアントは IIOP メッセージを送信できます。クライアントの IIOP メッセージは、ファイアウォール、ゲートウェイまたはルーターによってブロックされることなくサーバーに転送できます。



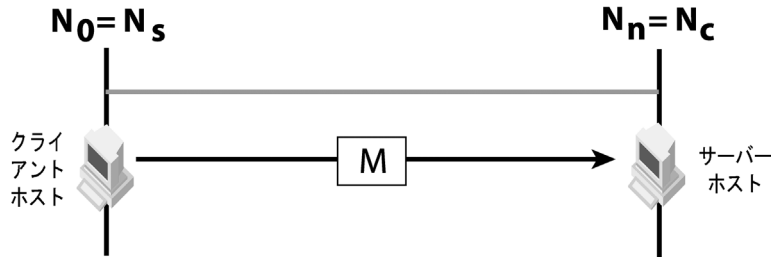
クライアントがトランスポートタイプ L でメッセージを送信できない場合、 N_0 から N_c までのネットワークに GateKeeper を配布して、他のトランスポートタイプ (M) のクライアントメッセージをトランスポートタイプ L にプロキシ処理してください。たとえば、サーバーは IIOP を監視しているため、クライアントは IIOP over HTTP だけを使用して通信できます。



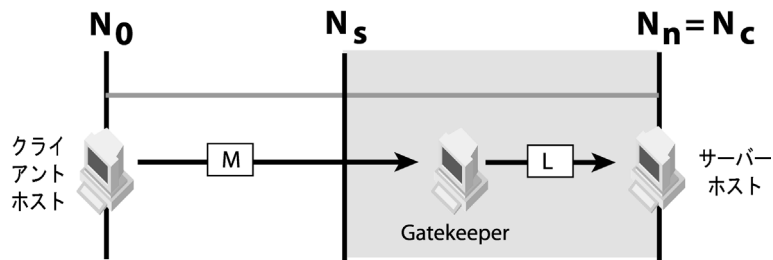
ケース 2：クライアントメッセージがサーバーネットワークに到達できる場合 (c = n)

特定のトランスポートタイプ (M) のクライアントメッセージは、サーバーネットワークに到達できます。クライアントのトランスポートタイプがサーバーが監視するトランス

ポートタイプである場合は、GateKeeper は必要ありません。たとえば、クライアントが IIOP メッセージを送信し、サーバーも IIOP を監視する場合です。

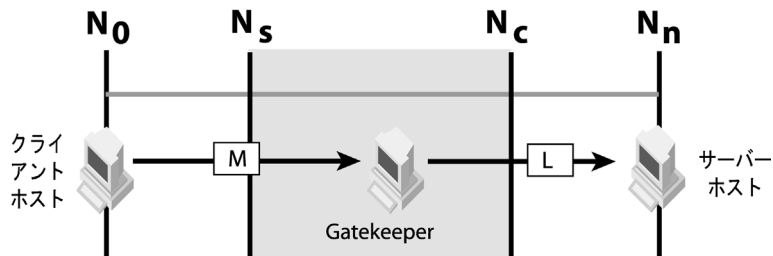


サーバーがクライアントのメッセージトランスポートタイプを監視しない場合、 N_s から N_n のすべてのネットワークに GateKeeper が必要です。Gatekeeper はプロキシの役割を果たし、タイプ M のクライアントメッセージをサーバーリスナータイプ (L) のポートに中継します。たとえば、M (クライアントメッセージのトランスポートタイプ) は HTTP 上の IIOP、L (サーバーリスナータイプ) は IIOP です。



ケース 3 : クライアントが到達可能なネットワークとサーバーまでネットワークが重複する場合 ($c \geq s$)

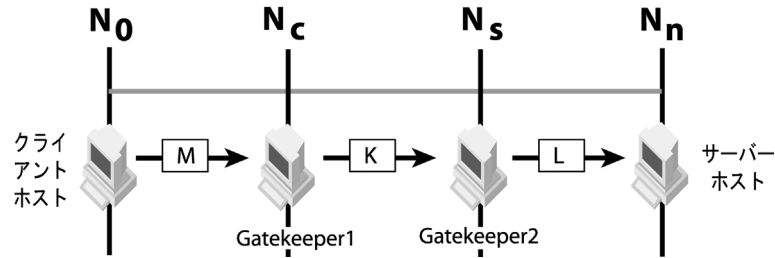
$c \geq s$ の場合、クライアントのトランスポートタイプ (M) とサーバーリスナータイプ (L) は異なるタイプを使用します。 N_s と N_c 間のすべてのネットワークに GateKeeper を配布してください。この場合、Gatekeeper はプロキシの役割を果たし、タイプ M のクライアントメッセージをタイプ (L) のサーバーリスナーポートに中継します。たとえば、HTTP メッセージ上のクライアントの IIOP は N_c までのネットワークに到達できます。 N_s から N_n までの間のいずれかのネットワークから送信された IIOP メッセージはサーバーに到達します。 N_s と N_c 間に GateKeeper を配布すると、HTTP メッセージ上のクライアントの IIOP をサーバーの IIOP リスナーポートにバインドできます。



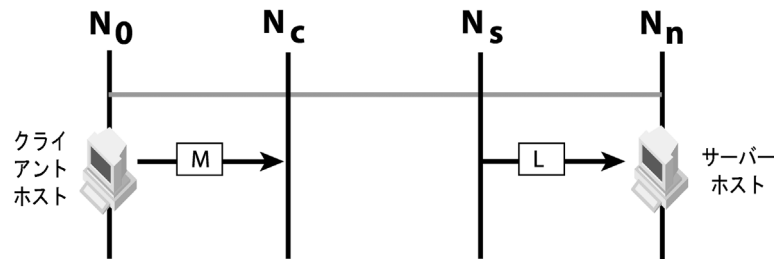
ケース 4 : クライアントが到達可能なネットワークとサーバーまでネットワークが重複しない場合 ($c < s$)

Gatekeeper チェインが可能かどうかを確認してください。Gatekeeper チェインの詳細は、35 ページの「GateKeeper のチェーン化」を参照してください。2 つの GateKeeper で別のトランスポートタイプ (K) を使用でき、それで N_c から N_s に通信できる場合にのみ GateKeeper チェインが可能です。ネットワーク (N_c) に GateKeeper を 1 つ配布し、別のネットワーク N_s にさらに別の GateKeeper を配布します。各 GateKeeper を連結します。たとえば、クライアントが IIOP over HTTP メッセージを送信し、サーバーが IIOP メッセージを監視する場合、2 つの Gatekeepers インスタンスは SSL を使用して相互に通信できます。クライアントは HTTP を使用して Gatekeeper 1 に接続し、Gatekeeper

1 は SSL を使用して Gatekeeper 2 と通信し, Gatekeeper 2 は IIOP を使用してサーバーと通信します。



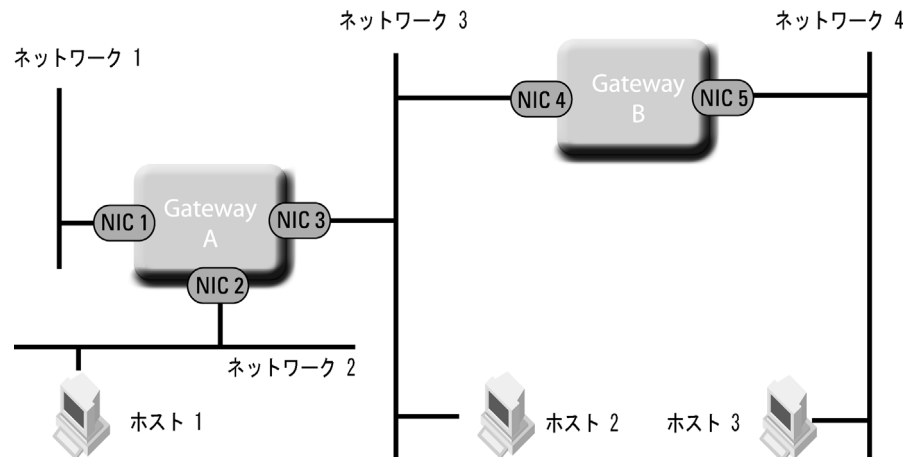
チェーンが不可能な場合は, Gatekeeper の配布に適したネットワークが存在しないこととなります。ネットワーク N_c とネットワーク N_s を接続するネットワーク間デバイスは, N_c から N_s に正しい種類のメッセージを送信できる設定とします。その後, 新しい N_c と N_s を探して, 先の事例を参照してください。



マルチホームホストの設定

マルチホームホストまたはルーターは, 2 つ以上の物理ネットワークを接続します。これには複数のインターフェースがあり, ネットワークインターフェースカード (NIC) とも呼ばれます。各 NIC が 1 つのネットワークを接続します。マルチホームホストにより, 接続されたネットワーク間の通信が可能になります。次の図は, 2 つのマルチホームホスト (ゲートウェイ A とゲートウェイ B) を使用したネットワーク設定です。

図 3.3 マルチホームマシンネットワーク設定



マルチホームホストがデータパケットをあるネットワークから別のネットワークに正しくルーティングできるようにするには, IP 転送を有効にし, ルーティングテーブルを正しく設定する必要があります。同様に, ホストのルーティングテーブルも正しく設定する必要があります。

ホスト 1 にあるクライアントがホスト 3 にあるサーバーとの通信を試みる場合、ホスト 1 のクライアントは、ホスト 3 向けのメッセージをまずネットワーク 2 上で送信します。ゲートウェイ A は NIC 2 上でメッセージを受信し、そのメッセージを、NIC 3 を使用してネットワーク 3 にルーティングします。ゲートウェイ B は NIC 4 上でメッセージを受信し、そのメッセージを、NIC 5 を使用してネットワーク 4 にルーティングします。メッセージは、ホスト 3 のサーバーオブジェクトに届きます。この通信は、IP 転送が有効になっており、すべてのルーティングテーブルが正しく設定されている場合にのみ実行されます。

IP 転送の有効化

データパケットをあるネットワークから別のネットワークに転送するには、マルチホームホストが IP 転送が有効にする必要があります。IP 転送が無効になっている場合は、マルチホームホストがデータパケットを転送またはルーティングできません。

ルーティングテーブル

ルーティングテーブルのエントリの 1 つは、送信先ホストまたはネットワークに使用されます。各エントリに次の情報が含まれている必要があります。

- 送信先ホストまたはネットワーク
- 通信を行うゲートウェイ
- データパケットの送信に使用するインターフェース

上の図のネットワーク設定例に対するルーティングテーブルの例を次の表に示します。

表 3.1 ゲートウェイ A のルーティングテーブル

送信先	ゲートウェイ	インターフェース
ネットワーク 1	ゲートウェイ A	NIC 1
ネットワーク 2	ゲートウェイ A	NIC 2
ネットワーク 3	ゲートウェイ A	NIC 3
ネットワーク 4	ゲートウェイ B	NIC 3

表 3.2 ホスト 1 のルーティングテーブル

送信先	ゲートウェイ	インターフェース
ネットワーク 1	ゲートウェイ A	ホスト 1
ネットワーク 2	ホスト 1	ホスト 1
ネットワーク 3	ゲートウェイ A	ホスト 1
ネットワーク 4	ゲートウェイ A	ホスト 1

表 3.3 ホスト 2 のルーティングテーブル

送信先	ゲートウェイ	インターフェース
ネットワーク 1	ゲートウェイ A	ホスト 2
ネットワーク 2	ゲートウェイ A	ホスト 2
ネットワーク 3	ホスト 2	ホスト 2
ネットワーク 4	ゲートウェイ B	ホスト 2

マルチホームホストのルーティングテーブルは、データパケットの転送先 NIC に関する情報を格納します。ゲートウェイ情報は、ルート内の次のゲートウェイとの通信に使用します。上の例のゲートウェイ A のルーティングテーブルを参照してください。NIC 3 を使用する場合は、ゲートウェイ A がゲートウェイ B と通信してネットワーク 4 にパケットをルーティングする必要があります。

ホストにも、固有のルーティングテーブルがあります。ホストが正しいゲートウェイと通信するには、ゲートウェイ情報が不可欠です。正しいゲートウェイと通信すれば、パケットは正しくルーティングされます（ホスト 2 のルーティングテーブルを参照）。ホスト 2 は、ネットワー

ク1とネットワーク2に到達するには、ゲートウェイAと通信する必要があります。しかし、ネットワーク2がネットワーク4に到達するには、ゲートウェイBと通信する必要があります。次の方法を使用して、ルーティングテーブルが正しく設定されているかどうかを確認してください。

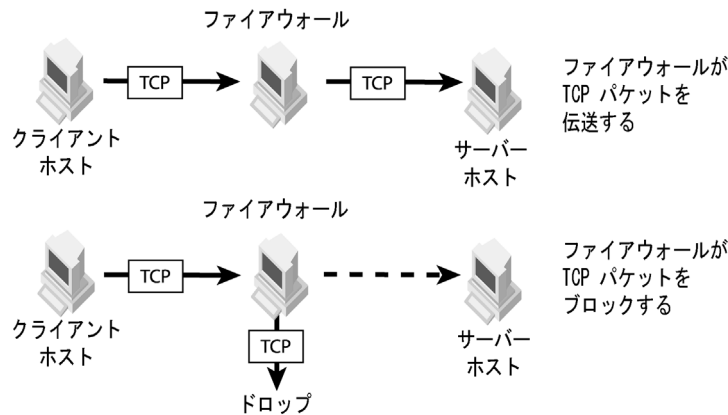
- ルーティングテーブルを印刷する
- 関連ホストを ping する
- 関連ホストまでのルートをトレースする

ファイアウォールの設定

ファイアウォールは、データパケットのフィルタリングを行うネットワークデバイスです。ファイアウォールは、受信したすべてのデータパケットを検査し、ファイアウォールのセキュリティポリシーに基づいて、パケットを転送またはドロップします。

ケース1：クライアントのトランスポートの種類に制限がある場合

ファイアウォールのパケットフィルタリングの例を次の図に示します。



通常、ファイアウォールのセキュリティポリシーは、メッセージの種類、メッセージソースおよびメッセージの送信先を検査してフィルタリングを行います。ファイアウォールは、サービスのタイプ（ストリーム指向、データグラムパケットなど）や基底のプロトコルの種類（IP、ICMP、TCP、UDPなど）に基づいてパケットフィルタ規則を適用できます。ファイアウォールで通信パスがTCPパケットストリームであると識別されると、そのファイアウォールは、セキュリティポリシーで定義されたパケットフィルタリング規則を適用して、そのパケットを許可するかドロップするかを判断します。TCPパケットストリームは、複数の種類のデータまたはペイロード（HTTP、IIOP、FTP、SSLなど）を伝送できます。一般に、各ストリームには固有のポート番号が割り当てられ、1クラスまたは1種類のメッセージのみ伝送できます。たとえば、IIOPメッセージは、TCPポート683のパケットストリームで伝送できます。同様に、HTTPメッセージは、TCPポート80で伝送できます。ファイアウォールは、パケットフィルタリング規則に基づいて、TCPポート80は許可しますが、TCPポート683は許可しない場合があります。特別な技術を使用すれば、TCPパケットストリームが複数の種類のメッセージを伝えることができます。Gatekeeperは、HTTPトンネリングと呼ばれる特別な技術を使用してIIOPメッセージをHTTPメッセージの中に埋め込み、TCPパケットストリームを通じて伝送します。

ファイアウォールがクライアントとサーバー間の通信パスに存在する場合は、そのファイアウォールが、クライアントからサーバーに送信されるデータパケットを転送またはドロップします。クライアントとサーバー間で正しく通信を行うには、ファイアウォールがクライアントのメッセージをサーバーに転送する必要があります。サーバーとなるのは、ユーザーアプリケーション、GateKeeper、またはスマートエージェントやネーミングサービスなど、他のVisiBrokerサービスプロバイダです。サーバーのリッスンポートに送信されるクライアントのメッセージを転送するようにファイアウォールを設定してください。

ネットワークアドレス変換 (NAT) の使い方

マルチホームホスト、ルーターおよびファイアウォールは、固有の機能に加えて、NAT も実行できます。NAT により、すべてのネットワークパケット内に存在するソースホストアドレス、ソースポート番号、送信先ホストアドレスおよび送信先ポート番号を変換できます。

クライアント側では、通常、ファイアウォールはソースホストアドレスを変換します。この手法は、限られた数のインターネット IP アドレスを共有する場合によく使用されます。

サーバー側では、ファイアウォールは、送信先ホストアドレスと送信先ポート番号の両方またはどちらかを変換します。これにより、実際の送信先ホストアドレスが、部外者からは見えなくなります。そのため、サーバーにアクセスする必要があるすべての部外者に通知せずに送信先ホストアドレスを変更できます。この柔軟性は、ポート番号にも適用されます。

Gatekeeper は、静的 NAT のみサポートしており、動的 NAT はサポートしていません。静的 NAT では、すべてのアドレスとポートが常に固定値に変換される事前定義のマッピングテーブルに基づいて変換が行われます。動的 NAT では、アドレスとポートを一定の範囲の値に変換するための規則を設定できます。この場合、ネットワークパケットの変換後のアドレスは、指定された範囲内の任意のアドレスでよいいため、変換後のアドレスを事前に定義することはできません。

TCP ファイアウォールと NAT を使用するためのサーバーオブジェクトの設定方法については、第 4 章「ユーザープログラムの設定」を参照してください。クライアントとサーバーオブジェクト間の通信を正しく行うため、必ず NAT 変換マッピングを NAT デバイスに追加してください。

NAT を実行する場合は、関連するすべてのゲートウェイのルーティングテーブルが、使用するすべての偽ネットワークアドレスを処理するように設定する必要があります。この設定を怠ると、偽送信先アドレスを持つデータパケットを正しくルーティングできません。また、ファイアウォールが、NAT 実行時に使用するすべての偽送信先ホストアドレスおよび偽ポートにメッセージを転送するように設定しておくことも必要です。ファイアウォールが偽アドレスまたは偽ポートをブロックしてしまうと、そのパケットは、目的地に届きません。

GateKeeper の設定

ここでは、GateKeeper のポートとサービスの設定方法について説明します。リスナーポートは、設定の必要がある代表的なパラメータです。通常は、異なるファイアウォールが同じ範囲のポートを開いて通信を行うことはありません。Gatekeeper には多数のサービスがあり、事前に有効にしておかないと使用できないサービスもあります。

リスナーポート

次のプロパティは、GateKeeper の外部 IIOP および HTTP リスナーポートの番号を指定します。これらは、GateKeeper がクライアントの要求を監視するポートです。

```
vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.listener.port=683
vbroker.se.exterior.scm.ex-hiop.listener.port=8088
```

GateKeeper がファイアウォールの背後に配布されている場合、外部クライアントは、ファイアウォールが IIOP または IIOP over HTTP メッセージの転送を、それぞれポート 683 と 8088 を介して実行することを許可している場合にのみ GateKeeper と通信できます。セキュリティの制約により、ファイアウォールが他のポート番号だけを許可する場合は、ファイアウォールで承認されたポートを使用するように Gatekeeper のリスナーポートを設定する必要があります。

管理サービス

GateKeeper の管理サービスを使用すると、VisiBroker Console を使用して GateKeeper を管理および設定できます。管理サービスでは、Gatekeeper がアクティブなときに Gatekeeper を動的に設定できます。次のプロパティは、管理サービスポートの番号を指定します。0 と 9091 が、それぞれ IIOP ポートと HTTP ポートのデフォルト値です。値 0 は、GateKeeper が起動時にポートをランダムに選択することを示します。

```
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port=0
vbroker.se.iiop_tp.scm.hiop_ts.listener.port=9091
```

コールバックの有効化 (VisiBroker 3.x スタイル)

コールバック機能 (VisiBroker 3.x スタイル) は、VisiBroker 4.x 以降のバージョンでは、双方向通信に置き換えられました。GateKeeper が VisiBroker 3.x コールバックを使用するクライアントをサポートするには、次のプロパティ設定が必要です。

```
vbroker.gatekeeper.callbackEnabled=true
vbroker.gatekeeper.backcompat.callback=true
```

上のプロパティを設定すると、Gatekeeper はその内部サーバーエンジンを起動して、サーバーからのコールバックメッセージを受信します。リスナーは、in-iiop SCM と in-ssl SCM を使用して設定できます。また、コールバックリスナーが起動されて、クライアントがコールバックメッセージ用の追加通信チャネルを確立できるようになります。リスナーポートの指定方法と関連情報については、73 ページの「[VisiBroker 3.x スタイルのコールバック](#)」を参照してください。選択したポートがクライアントとサーバーから到達可能であること、つまりポートがどのファイアウォールにもブロックされていないことを確認してください。

パススルー接続の有効化

次のプロパティは、Gatekeeper のパススルー接続を有効にします。

```
vbroker.gatekeeper.enablePassthru=true
```

クライアントがパススルー接続を要求すると、Gatekeeper は、サーバーとクライアントの間を通過するメッセージをまったく検査しません。上のプロパティを **false** に設定すると、Gatekeeper は、クライアントがパススルー接続を要求しても通常の (非パススルー) 接続を使用して、クライアントをサーバーにバインドします。この場合は、Gatekeeper がルートおよびバインドするために交換メッセージを検査します。

Gatekeeper におけるパススルー接続の設定に利用できる次のようなプロパティが用意されています。

```
vbroker.gatekeeper.passthru.blockSize=16384
vbroker.gatekeeper.passthru.connectionTimeout=0
vbroker.gatekeeper.passthru.logLevel=0
vbroker.gatekeeper.passthru.streamTimeout=2000
vbroker.gatekeeper.passthru.inPortMin=1024
vbroker.gatekeeper.passthru.inPortMax=165535
vbroker.gatekeeper.passthru.outPortMin=0
vbroker.gatekeeper.passthru.outPortMax=65535
```

上のプロパティの詳細は、76 ページの「[パススルー接続をサポートするプロパティ](#)」を参照してください。

注意 パススルー機能は、Gatekeeper のリソースに大きな負担をかけます。この機能を使用する場合は、メモリーを十分に用意し、ソケットの数を増やしてください。

ロケーションサービスの有効化

Gatekeeper は、アプレットなど、Java サンドボックスセキュリティや既存のファイアウォールにより、スマートエージェント (osagent) と直接通信できないクライアントにロケーションサービスを提供します。ロケーションサービスを使用すると、クライアントは、GateKeeper を介してサーバーに「バインド」できます。

```
vbroker.gatekeeper.locationService=true
```

スマートエージェント (osagent) の指定

Gatekeeper は、スマートエージェントでサーバーオブジェクトを探します。同じネットワーク上にスマートエージェントが存在すれば、Gatekeeper は、それを自動的に検出します。Gatekeeper が稼働しているネットワーク上で稼働しているスマートエージェントがない場合は、スマートエージェントの場所を明示的に指定する必要があります。他のネットワークで稼働しているスマートエージェントを追加指定することもできます。

```
vbroker.agent.addr=< ホスト >
vbroker.agent.addrfile=< ファイル名 >
vbroker.agent.port=< ポート >
```

最初のプロパティはスマートエージェントのホスト IP アドレスを指定します。2 番目のプロパティは、スマートエージェントが実行されているホストのリストを定義するファイルを指定します。3 番目のプロパティは、OSAGENT_PORT を指定します。最初の 2 つのプロパティのデフォルト値は null で、この場合、Gatekeeper は同一ネットワークで稼働しているスマートエージェントと通信します。

スマートエージェントの設定とスマートエージェントパラメータの設定方法の詳細は、『*VisiBroker for C++ 開発者ガイド*』の「スマートエージェントの使い方」または『*VisiBroker for Java 開発者ガイド*』の「スマートエージェントの使い方」を参照してください。

オブジェクトアクティベーションデーモン (OAD) の指定

OAD サービスを使用して、GateKeeper は、バインドする必要があるサーバーを自動的に起動できます。この場合、サーバーは OAD サービスに登録されますが、アプレットがサーバーを呼び出した場合などは、GateKeeper を介してのみアクセスできます。OAD サービスを使用するために、GateKeeper は OAD IOR をロードする必要があります。次のプロパティは、GateKeeper に OAD IOR の場所を通知します。

```
vbroker.oad.iorFile=<OAD IOR>
```

OAD の詳細は、『*VisiBroker for C++ 開発者ガイド*』の「オブジェクトアクティベーションデーモンの使い方」または『*VisiBroker for Java 開発者ガイド*』の「オブジェクトアクティベーションデーモンの使い方」を参照してください。

GateKeeper サーバーエンジンの設定

Gatekeeper には、いくつかのデフォルトサーバーエンジンがあります。各サーバーエンジンには、少なくとも 1 つのサーバー接続マネージャ (SCM) があります。

- 外部サーバーエンジンは、GateKeeper がクライアントオブジェクトをサーバーオブジェクトにバインドできるようにします。外部サーバーエンジンには、ex-hiop と ex-iiop の 2 つのデフォルト SCM があります。
- 内部サーバーエンジンはコールバックサービスを提供し、コールバックが有効になっている場合にのみ使用できます。外部サーバーエンジンには、in-iiop と in-ssl の 2 つのデフォルト SCM があります。
- iiop_tp サーバーエンジンは、管理サービスを提供します。外部サーバーエンジンには、hiop_ts と iiop_tp の 2 つのデフォルト SCM があります。

上の SCM のすべてのプロパティのリストについては、64 ページの「外部サーバーエンジン」、69 ページの「内部サーバーエンジン」、および 71 ページの「管理のプロパティ」を参照してください。

セキュリティサービス

VisiSecure for Java をインストールして、セキュリティサービスを有効にします。次のプロパティで IIOP / SSL と HTTPS 上の IIOP を有効にして、GateKeeper を起動します。

```
vbroker.security.disable=false
vbroker.orb.dynamicLibs=com.borland.security.hiops.Init
vbroker.se.exterior.scms=ex-iiop,ex-hiop,ex-ssl,ex-hiops
```

- `vbroker.security.disable=false` プロパティは、必要なセキュリティパッケージを GateKeeper の VisiBroker ORB にロードします。
- `vbroker.orb.dynamicLibs=com.borland.security.hiops.Init` プロパティは、追加の HIOPS パッケージをロードします。これにより、HTTPS 経由の IIOP メッセージを使用できます。これは別にロードされます。
- `vbroker.se.exterior.scms=ex-iiop,ex-hiop,ex-ssl,ex-hiops` プロパティは、SCM の `ex-ssl` と `ex-hiops` を外部サーバーエンジンに追加します。

未使用の SCM を SCM リストから削除して、必要な SCM だけを起動できます。ただし、最初から指定されている `scm ex-iiop` と `in-iiop` は、リストから削除できません。

次のように、IIOP や HTTP などのセキュリティで保護されていないリスナーポートを無効にして、すべての通信を確実に暗号化することができます。

```
vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.listener.type=Disabled-IIOP
vbroker.se.exterior.scm.ex-hiop.listener.type=Disabled-IIOP
```

IIOP/SSL リスナーと HTTPS リスナーは、前に `vbroker.se.exterior.scm.ex-hiops` と `vbroker.se.exterior.scm.ex-ssl` を付けた SCM プロパティを使用して設定できます。この SCM プロパティの包括的なリストについては、付録 A 「GateKeeper プロパティ」を参照してください。

SSL トランスポート ID と信頼ポイント

SSL の場合は、SSL ネゴシエーションが公開キーなしで Diffie Hellman 鍵共有アルゴリズムを使用できるため、トランスポート ID はオプションです。

ただし、トランスポート ID なしでは、`peerAuthenticationMode` を `require` および `require_and_trust` として設定されたクライアントが接続されません。さらに、SSL サーバーとしての GateKeeper 自身がクライアントトランスポート ID を持たない場合は、クライアントトランスポート ID を必要としないこともあります。

ウォレットプロパティを使用した SSL ID のインストール

GateKeeper に証明書をインストールする最も簡単な方法は、次のウォレットプロパティを使用することです。

```
vbroker.security.wallet.type=Directory:<path_to_identities>
vbroker.security.wallet.identity=<ユーザー名>
vbroker.security.wallet.password=<パスワード>
vbroker.security.trustpointsRepository=Directory:<path_to_trustpoints>
```

証明書ログインを使用して GateKeeper に SSL ID をインストール

ウォレットと信頼ポイントのプロパティを設定する簡単な方法のほかに、起動時に認証情報を取得 (ログイン) することで、GateKeeper に SSL ID をインストールできます。認証情報の取得時に、ユーザーは、ファイルとディレクトリに関する質問、つまり証明書、秘密キー、および信頼されるルート証明書がどこに保存されているかに回答する必要があります。秘密キーの暗号を解除するためのパスワードは必ず質問されます。

ログイン時に質問されるファイルとディレクトリは、証明書ストレージのタイプによって異なります。デフォルトのストレージは、次のファイル内の **JDK セキュリティ設定** によって決定されます。

```
{JAVA_HOME}/jre/lib/security/java.security
```

JDK の標準では、**Java キーストア (jks)** として jks が設定されます。

```
#
# デフォルトのキーストアタイプ
#
keystore.type=jks
```

PKCS#12 ストレージの場合は、上の文字列を pkcs12 に変更できます。このストレージ形式は、証明書、信頼される証明書、および秘密キーが 1 つのファイルに格納される場合にのみ使用されます。JDK **keytool** のマニュアルを参照してください。

証明書ログインでは、次のプロパティを **GateKeeper** に明示的に設定する必要があります。

```
vbroker.security.login=true
vbroker.security.login.realms=<領域リスト>
```

領域リストでは、特に **Certificate#CLIENT**, **Certificate#SERVER**, **Certificate#ALL** が必要です。

- **Certificate#CLIENT** は、発信 SSL 接続に使用される SSL ID です。
- **Certificate#SERVER** は、着信 SSL 接続に使用されます。
- **Certificate#ALL** は、両方に使用できます。

極端な例として、<領域リスト> に 3 つの領域がすべてある場合を考えます。この場合は、**GateKeeper** の起動時に SSL ID の 3 つの異なる設定がユーザーから取得されます。

発信 SSL 接続を開く場合は、次のように動作します。

- 1 まず、**Certificate#CLIENT** を使用します。
- 2 **Certificate#CLIENT** に何も設定されていない場合は、**Certificate#ALL** を使用します。
- 3 **Certificate#ALL** にも何も設定されていない場合、発信 SSL 接続は ID を持たなくなります。

メモ 受信（サーバー）SSL 接続にも同様の優先順位が適用されます。

簡単なウォレットプロパティ設定を使用して設定される ID は、常に **Certificate#ALL** に格納されます。

peerAuthenticationMode の設定

peerAuthenticationMode ポリシーを通常どおりに使用します。次のようにプロパティを設定します。

```
vbroker.security.peerAuthenticationMode=none
```

アプレットと Java Webstart

Java プログラミング言語は、1 つの場所から即座に配布および実行されるプログラムを開発できる強力なツールです。この言語は、CORBA、特に **VisiBroker for Java** と組み合わせると、より機能が強化されます。

クライアントコードは、Java アプレットか、JNLP (**Java Network Launching Protocol**) を利用する **Java Webstart** アプリケーションのどちらかとして、Web サイトから即座にダウンロードしてインストールできます。

標準のアプレットクライアントに関する VisiBroker の設定

クライアントがアプレットの場合は、さらに次のプロパティ設定が必要です。

```
<applet archive=vbjorb.jar,vbsec.jar,lm.jar,sanct4.jar,
sanctuary.jar,code="ClientApplet.class" width="200"
height="80">
  <param name="vbroker.security.disabled" value="false">
  <param name="vbroker.orb.dynamicLibs"
value="com.borland.security.hiops.Init">
  ...
</applet>
```

- メモ**
- 1 すべての VisiBroker jar が GateKeeper HTTP ルートディレクトリ (GateKeeper を起動する現在のディレクトリ) に格納されている必要はありません。
 - 2 ライセンス jar `lm.jar`, `sanct4.jar`, `sanctuary.jar` は、アプレットが永続的 POA を作成する場合にのみ必要です。
 - 3 VisiSecure 機能が呼び出される場合は、アプレットのアーカイブリストに `vbsec.jar` が必要です。また、それを有効にするアプレットパラメータも必要です。オプションで、HIOPS 機能が呼び出される場合は、上のように、`dynamicLibs` を使用して個別にロードする必要があります。

Java Webstart として配布される VisiBroker アプリケーション

Java Webstart アプリケーションは、独自の起動プログラムを持つため、Web ブラウザなしで実行できます。UNIX ではコマンドシェルから直接起動され、Windows ではダブルクリックして起動されます。この起動プログラムは、`application/x-java-jnlp-file` のデフォルトの MIME ハンドラです。これは、Windows では JDK/JRE のインストール時に、UNIX ではその他の方法で自動的に関連付けられます。したがって、Web ページでリンクをクリックすると、その MIME タイプの HTTP 応答が発生し、インストールされている Java Webstart 起動プログラムが起動されて、その応答の内容が処理されます。実際の内容は、必要な jar が配置されている場所に関する情報と、アプリケーションの実行に関連する他の情報を含む XML です。たとえば、必要な Java セキュリティ権限が含まれます。

Java Webstart として配布される標準の VisiBroker アプリケーションについては、`gatekeeper bank_jws` の例を参照してください。

第 4 章

ユーザープログラムの設定

この章では、ファイアウォールと Gatekeeper を使用するための、ユーザープログラム (クライアントとサーバー) を設定する方法について説明します。設定は、クライアントおよびサーバーのプロパティで行います。プロパティの設定方法については、[付録 A 「GateKeeper プロパティ」](#) を参照してください。

ファイアウォール背後のオブジェクトの使い方

オブジェクトがファイアウォールの背後で機能するには、通常、プログラミング環境と実行時環境の両方で設定を行う必要があります。特定のポータブルオブジェクトアダプタ (POA) のファイアウォールポリシーは、プログラムから設定する必要があります。ただし、すべての POA に対して同じファイアウォールポリシーをグローバルに設定する場合は、1 つのプロパティ設定を使用するだけで、ソースコードの変更は必要ありません。

単一 POA のプログラミング

サーバーがファイアウォールを通過できるように特定の POA のファイアウォールポリシーを設定するには、サーバーがアクティブ化される POA のファイアウォールポリシーを指定する必要があります。特に、次のコードをサーバーに追加する必要があります。次の例では、Bank サンプルをベースとして使用します。

単一の POA をプログラムで設定するには

1 ファイアウォールポリシーを作成します。

```
Java      org.omg.CORBA.Any fw_policy_value = orb.create_any();
          com.inprise.vbroker.firewall.FirewallPolicyValueHelper.insert(
            fw_policy_value, com.inprise.vbroker.firewall.EXPORT.value);
          org.omg.CORBA.Policy firewall_policy = orb.create_policy(
            com.inprise.vbroker.firewall.FIREWALL_POLICY_TYPE.value,
            fw_policy_value);
          org.omg.CORBA.Policy[] policies = {
            firewall_policy,
            rootPOA.create_lifespan_policy(LifespanPolicyValue.PERSISTENT)
          };

C++      CORBA::PolicyList policies;
          policies.length(2);
```

```

policies[(CORBA::ULong)0] = rootPOA->create_lifespan_policy
    (PortableServer::PERSISTENT);
CORBA::Any policy_value;
policy_value <= Firewall::EXPORT;
CORBA::Policy_ptr fpolicy= orb->create_policy
    (Firewall::FIREWALL_POLICY_TYPE, policy_value);
policies[(CORBA::ULong)1] = fpolicy;

```

2 サーバーをアクティブ化する POA にこのポリシーを適用します。

```

Java POA bankPOA = rootPOA.create_POA("bank_agent_poa", rootPOA.the_POAManager(),
    policies);

```

```

C++ PortableServer::POA_var bankPOA = rootPOA->create_POA("bank_agent_poa",
    poa_manager, policies);

```

ルート POA だけがデフォルトのポリシーを使用するため、ファイアウォールの後ろでアクセスする必要があるすべてのサーバーをアクティブ化するために、ルート POA を使用できます。また、Account サーバーをアクティブ化するために、別の POA を作成する必要があります。Account サーバーはクライアントから直接バインドしない方がよいため、POA を一時 POA として作成します。

```

Java policies = new org.omg.CORBA.Policy[] {
    firewall_policy,
    rootPOA.create_lifespan_policy(LifespanPolicyValue.TRANSIENT)
};

```

```

POA accountPOA = rootPOA.create_POA(
    "account_agent_poa", rootPOA.the_POAManager(), policies);

```

```

C++ policies.length(2);
policies[(CORBA::ULong)0] = rootPOA->create_lifespan_policy
    (PortableServer::TRANSIENT);
policies[(CORBA::ULong)1] = fpolicy;
PortableServer::POA_var accountPOA = rootPOA->create_POA("account_agent_poa",
    poa_manager, policies);

```

サーバーに関連付けられているすべての POA のファイアウォールポリシーを設定

次のプロパティを使用すると、サーバーに関連付けられているすべての POA のファイアウォールポリシーを設定できます。

```
-Dvbroker.orb.exportFirewallPath=true
```

exportFirewallPath プロパティを指定すると、POA の作成時にファイアウォールポリシーを追加する必要がないため、ソースコードに変更を加える必要がありません。

実行時のファイアウォールパッケージのロード

Gatekeeper を使用するクライアントとサーバーでは、ORB を最初に初期化するとき、つまり次のメソッドを呼び出すときに、ファイアウォールパッケージとそのプロパティをロードする必要があります。

```

Java org.omg.CORBA.ORB.init(String[] args,java.util.Properties property);

```

```

C++ CORBA::ORB_ptr CORBA::ORB_init(int& argc, char *const *argv);

```

次のプロパティを使用すると、ファイアウォールパッケージが VisiBroker for Java ORB にロードされます。Java クライアントと Java サーバーのいずれにも、ファイアウォールと Gatekeeper の使用時にこのプロパティが必要です。

```
vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init
```


C++ VisiBroker for C++ ORB には Gatekeeper とファイアウォールのサポート機能が組み込まれているので、新たなライブラリを追加しなくても Gatekeeper とファイアウォールを使用できます。

クライアントプロパティの設定

クライアントとサーバー間の通信方法には、制限を加えることができます。特に、ポリシーとプロパティを使用することにより、次の指定を有効または無効にできます。

- クライアントが実サーバーのプロキシとして Gatekeeper を使用する。
- Java** • クライアントが HTTP トンネルチャネルでサーバーと通信する。
- クライアントが IIOP/SSL でサーバーと通信する。
- Java** • クライアントが HTTP トンネルチャネルでサーバーと通信する。
- クライアントとサーバー間の接続で、Gatekeeper によるチェックなしでメッセージが Gatekeeper を通過する (パススルーモード)。
- クライアントが使用できる送信方法から適切な方法を選択する。

以下では、クライアントのさまざまなポリシーとそのプロパティ設定を示します。これらのポリシーの組み合わせを変えて、クライアントからサーバーまでの通信方法を決定することもできます。

クライアントに常にプロキシを指定

次のプロパティを設定すると、クライアントは、常に GateKeeper を使ってサーバーに要求を送信します。

クライアントのプロパティ：

```
vbroker.orb.alwaysProxy=true
```

このプロパティはオプションです。このプロパティを設定しなければ、オブジェクトの所在がサーバー側ファイアウォールの背後かどうかをクライアントはサーバーの IOR で判断し、それに基づいてファイアウォールを通過します。上記のプロパティを設定しない方がよい場合もあります。たとえば、信頼できるネットワーク内にあるローカルオブジェクトとファイアウォール背後のリモートオブジェクトの両方をクライアントで起動する場合はそうです。プロパティを設定しなければ、クライアントは、Gatekeeper を通過せずに直接ローカルオブジェクトを起動できるので効率的です。

クライアントのプロパティ：

```
vbroker.orb.gatekeeper.ior=<IOR>
```

クライアントは、上記のプロパティで GateKeeper IOR を指定することもできます。このメソッドは、クライアントがスマートエージェントで Gatekeeper を検出できない場合に役立ちます。

クライアントに HTTP トンネリングを指定

次のプロパティを設定すると、クライアントは、HTTP トンネルチャネルでサーバーと通信します。

クライアントのプロパティ：

```
vbroker.orb.alwaysTunnel=true
```

この設定により、クライアントのアプレットまたはアプリケーションは、HTTP の IIOP を介して Gatekeeper と通信し、Gatekeeper は IIOP で要求を実サーバーオブジェクトに中継します。サーバーオブジェクトから Gatekeeper への応答は、IIOP を介して送信されます。Gatekeeper は、HTTP の IIOP を介して応答をクライアントに転送します。

- Java** クライアントが HTTP トンネリングを実行する場合、アプレットでは `vbroker.orb.alwaysTunnel` を設定します。アプレットクライアントは、URL ネーミングまたは文字列化された IOR でプロパティ `vbroker.orb.gatekeeper.ior` を設定して **Gatekeeper** の IOR を取得する必要があります。また、アプレットクライアントでは、`vbroker.locator.ior` プロパティは設定できません。
- メモ** HTTP トンネリングでコールバックは使用できません。
- 注意** HTTP プロキシサーバーの実装方法はさまざまなので、プロキシサーバーの種類によっては、HTTP トンネリングが一貫して機能しない場合があります。詳細については、**Borland Web** サイトにある「**VisiBroker Gatekeeper FAQs**」を参照してください。

クライアントにセキュリティで保護された接続を指定

クライアントのプロパティ：

```
vbroker.orb.alwaysSecure=true
```

クライアントは、IIOP/SSL または HTTP 上の HTTPS を介してサーバーと通信します。

クライアントのプロパティ：

```
vbroker.orb.alwaysSecure=true  
vbroker.orb.alwaysTunnel=true
```

クライアントは、HTTPS 上の IIOP を使用するサーバーだけと通信します。

クライアントにパススルー接続を指定

この種類の接続では、接続の終了やメッセージの解釈が **Gatekeeper** では行われません。この種類の接続は、**Gatekeeper** にクライアントとの信頼関係を確立するための SSL 機能や関連する証明書がない場合に役に立ちます。このような場合、クライアントとサーバーは、**Gatekeeper** を介さずに SSL 接続をネゴシエートします。したがって、**Gatekeeper** は、クライアントとサーバーの間で渡されるメッセージを解釈しません。

クライアントのプロパティ：

```
vbroker.orb.proxyPassthru=true
```

Gatekeeper のプロパティ：

```
vbroker.gatekeeper.enablePassthru=true
```

- `vbroker.orb.proxyPassthru` プロパティでは、ORB レベル `PROXY_MODE_POLICY` プロパティの値を設定します。`true` に設定すると、クライアント側でプロキシを使用するすべてのオブジェクトがパススルー接続を要求します。または、特定のオブジェクトだけにパススルー接続を要求させるには `PROXY_MODE_POLICY` を設定します。
- `vbroker.gatekeeper.enablePassthru` プロパティを指定すると、**Gatekeeper** はパススルー接続を受け入れます。このプロパティは **Gatekeeper** 全体に対して有効で、**Gatekeeper** の動作だけに影響します。

`vbroker.orb.proxyPassthru` プロパティを設定すると、クライアントは **Gatekeeper** からパススルー接続の取得を試みます。ただし、**Gatekeeper** がパススルー接続を許可するのは、`vbroker.gatekeeper.enablePassthru` プロパティが `true` に設定されている場合だけです。ほかの **Gatekeeper** のパススループロパティについては、[22 ページの「パススルー接続の有効化」](#)を参照してください。

パススルー接続の有効化

`vbroker.gatekeeper.enablePassthru` を **false** に設定すると、**GateKeeper** はパススルー接続の確立を許可せず、クライアントはサーバーとの通常の（非パススルー）接続だけを取得できます。**Gatekeeper** は、この場合、クライアントとサーバーの間で交換されるメッセージをルーティングおよびバインディングの目的で検査します。**Gatekeeper** が SSL メッセージに SSL 認証を与えられない場合、接続は失敗します。

クライアントのビッド順の指定

クライアントのプロパティ：

クライアントのビッド順は、サーバーとの接続に使用するさまざまなトランスポートの相対的な重要度を指定します。上位のトランスポートほど優先順位が高くなります。次のプロパティを設定すると、クライアントは、サーバーの IOR で利用できるトランスポートのうち優先順位が高いものから先に試します。1 つのトランスポートが失敗すると、クライアントは、次に利用できるトランスポートを試します。

```
vbroker.orb.bidOrder=inprocess:liop:ssl:iiop:proxy:hiop:locator
```

上記の例で、IOR に LIOP と IIOP の両方のプロファイルがある場合、クライアントはまず LIOP を試します。LIOP が失敗した場合にだけ、IIOP を試します。

クライアントのプロパティ：

```
vbroker.orb.bidCritical=inprocess
```

クリティカルビッドには、ビッド順における指定位置に関係なく、最高の優先順位が適用されます。複数のクリティカルビッドがある場合、ビッド間の相対的な重要度はビッド順で決まります。

クライアントのコールバックリスナーポートの指定 (VisiBroker 3.x スタイル用)

次のプロパティは、サーバーが VisiBroker 3.x スタイルのコールバック接続を確立するときのクライアントのリスナーポートを指定します。リスナーの種類は、Callback-IIOP に設定して、標準 IIOP リスナーと区別します。

クライアントのプロパティ：

```
vbroker.se.iiop_ts.scm.iiop_tp.listener.port=<port>
vbroker.se.iiop_ts.scm.iiop_tp.listener.type=Callback-IIOP
```

サーバープロパティの設定

サーバープロパティを使用して、サーバーの IOR を構築します。クライアントは、この IOR を使ってサーバーまでの通信パスを確立します。

サーバーのリスナーポートの指定

以下では、サーバーのリスナーポートを指定するために使用されるプロパティ設定について説明します。

ランダムリスナーポート

次のプロパティのデフォルト値は 0 で、その場合、システムはサーバーの起動時にランダムにポート番号を選択します。

サーバーのプロパティ：

```
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port=0
```

特定リスナーポート

次のサーバープロパティは、サーバーがクライアントからの IIOP メッセージを監視するポートを割り当てます。

サーバーのプロパティ：

```
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port=<port number>
```

- メモ** 上の例のように指定すると、同じネットワーク上にあるすべてのクライアントが、指定したポートを使ってサーバーとの通信を直接確立できます。別のネットワーク上にあるクライアントから送信されたメッセージは、ゲートウェイまたはルーターから転送する必要があります。サーバーがサブネットの外にあるクライアントからの接続を許可する場合は、ルーターまたはファイアウォールも、指定されたポートのメッセージを許可するように設定されている必要があります。逆に、サーバーが同じサブネット上にあるクライアントからの接続だけを許可する場合、ルーターまたはファイアウォールは、指定したポートのメッセージをブロックして、外部クライアントオブジェクトによる無許可のアクセスを防ぐように設定する必要があります。

ポート変換 (NAT)

ネットワークアドレス変換 (NAT) を使用して、偽ポート (プロキシポート) からサーバーの実際の IIOP リスナーポートにポート変換する場合、次のプロパティ設定を使ってサーバーの IOR に偽ポートを公開します。

サーバーのプロパティ：

```
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port=<real_port>
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.proxyPort=<fake_port>
```

上の設定では、サーバーが実ポートを監視し、クライアントが偽ポートにメッセージを送信します。proxyPort プロパティのデフォルト値は 0 で、その場合、プロキシポートは使用しません。

- メモ** NAT を指定する方法としては、TCP ファイアウォールのプロパティを使用の方が適切です。これについては、後で説明します。

IIOP ポートの無効化

次のプロパティを設定すると、サーバーの IIOP リスナーポートが無効になり、サーバーは、IIOP/SSL などのセキュリティで保護された特定のポートでのクライアントの要求を許可します。サーバーは、公開された IIOP ポートでの IIOP メッセージを許可しません。

サーバーのプロパティ：

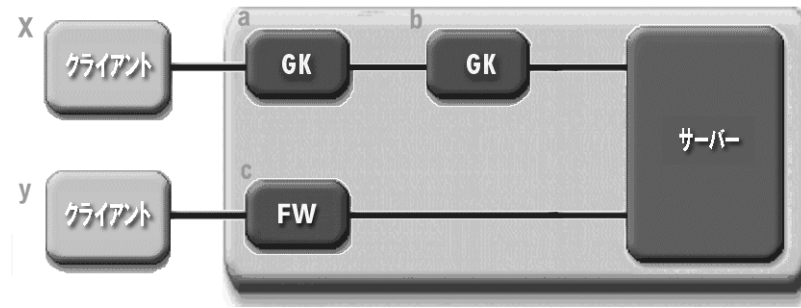
```
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.type=Disabled-IIOP
```

サーバーまでの通信パスの指定

パスのパターンとしては、1本のクライアントメッセージに対してサーバーまでのパスが複数ある場合と、さまざまなクライアントからのメッセージがさまざまなパスを通じて同じサーバーに到達する場合があります。これらのパスはすべてサーバーのプロパティで設定します。これにより、クライアントがサーバーにメッセージを送信するために必要な情報が、生成された IOR に追加されます。

次の図は、パスが 2 つあるファイアウォール構成の例で、サーバーまでの通信パスを示します。構成 X には、2 つの Gatekeepers のチェーンがあります。構成 Y には、1 つの TCP ファイアウォールがあります。

図 4.1 サーバーまでの通信パス



上の図のような構成でサーバーを設定するには、次の情報をサーバーのプロパティファイルに入力します。

- 1 すべてのファイアウォールパスを宣言します。

```
vbroker.se.iioptp.firewallPaths=x,y
```

- 2 各パスのコンポーネントを指定します。

```
vbroker.firewall-path.x=a,b
vbroker.firewall-path.y=c
```

以下では、ファイアウォールのコンポーネントを指定する方法について説明します。

プロキシサーバーのコンポーネントの指定

ファイアウォールを通過する IIOP プロキシの例を次に示します。

サーバーのプロパティ：

```
vbroker.firewall-path.x=a,b
vbroker.firewall.a.type=PROXY
vbroker.firewall.a.iior=http://www.inprise.com/GK/GateKeeper.iior
vbroker.firewall.b.type=PROXY
vbroker.firewall.b.iior=IOR:<GateKeeper's stringified iior>
```

最初のプロパティは、パス x にあるファイアウォールコンポーネントを定義します。2 番めと 4 番めのプロパティは、それぞれコンポーネント a と b の種類を指定します。どちらの種類コンポーネントも、PROXY として定義します。これは、GateKeeper がすべての IIOP 要求を送信する IIOP プロキシサーバーであることを表します。3 番めのプロパティは、URL ネーミングを使って Gatekeeper a の IOR を定義します。5 番めのプロパティは、文字列化された IOR を使って Gatekeeper b の IOR を定義します。

NAT による TCP ファイアウォールコンポーネントの指定

クライアントのメッセージがサーバーに到達するまでに、1 つまたは複数の TCP ファイアウォールを通過します。TCP ファイアウォールで NAT を実行する場合、TCP ファイアウォールのコンポーネントを定義します。TCP ファイアウォールのコンポーネントが NAT を実行しない場合は、コンポーネントを無視できます。

ルーターまたはファイアウォールを使って TCP レベルの IIOP メッセージを転送する方法を次に示します。

サーバーのプロパティ：

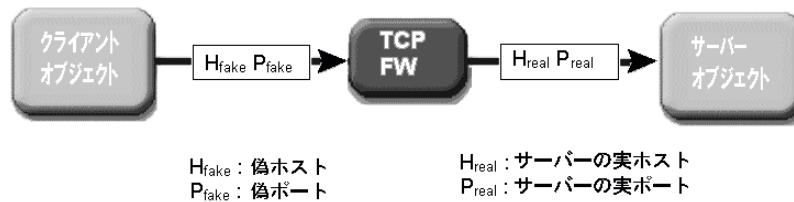
```
vbroker.firewall-path.y=c
vbroker.firewall.c.type=TCP
vbroker.firewall.c.host=<fake_host>
vbroker.firewall.c.iioport=<IIOP fake port>
vbroker.firewall.c.ssl_port=<SSL fake port>
vbroker.firewall.c.hiop_port=<HTTP fake port>
```

最初のプロパティは、パス y にあるファイアウォールコンポーネントを定義します。2 番めのプロパティは、コンポーネント c の種類が TCP であることを定義します。これは、ルー

ターやほかのネットワークデバイスで送信する HTTP 上のすべての IIOP, SSL, IIOP 用に定義済みのポートを提供します。3 番めのプロパティは、サーバーの偽ホストを定義します。最後の残り 3 つのプロパティは、IIOP, SSL, および HTTP メッセージタイプ用の偽ポートを定義します。

上の例では、コンポーネント「c」に指定した TCP ファイアウォールがホストになりポート変換 (NAT) を行います。TCP ファイアウォールは、偽ホストをサーバーの実ホストに変換し、すべての偽ポートをサーバーの実リスナーポートに変換する設定にします。

図 4.2 NAT 使用の TCP ファイアウォール



第 5 章

高度な機能

ここでは、Gatekeeper のチェイン化、コールバック、アクセスコントロール、負荷分散、フォールトトレランス、SSL などの高度な機能について説明します。また、Gatekeeper のパフォーマンスを向上させるポイントについても説明します。

GateKeeper のチェイン化

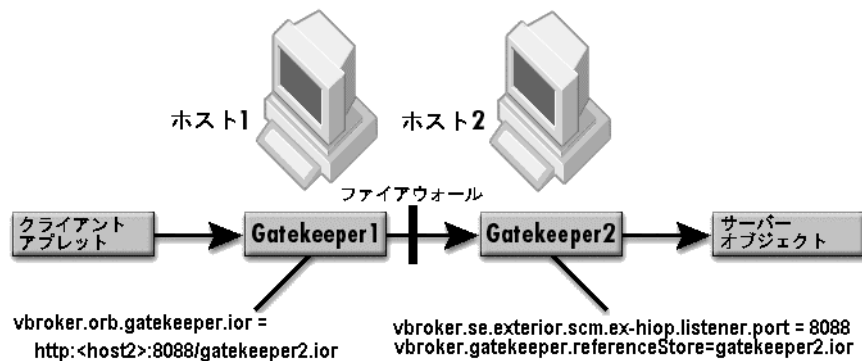
ファイアウォールを介してパスを提供するために、Gatekeeper をチェイン化できます。チェイン化には、次の 2 種類があります。

- 静的チェイン化
- 動的チェイン化

GateKeeper の静的チェイン化

静的なチェイン化では、1 つ前の Gatekeeper が次の Gatekeeper にメッセージを転送するように設定します。通信パスは固定されているため、静的なチェインと呼ばれます。

図 5.1 GateKeeper の静的チェイン化



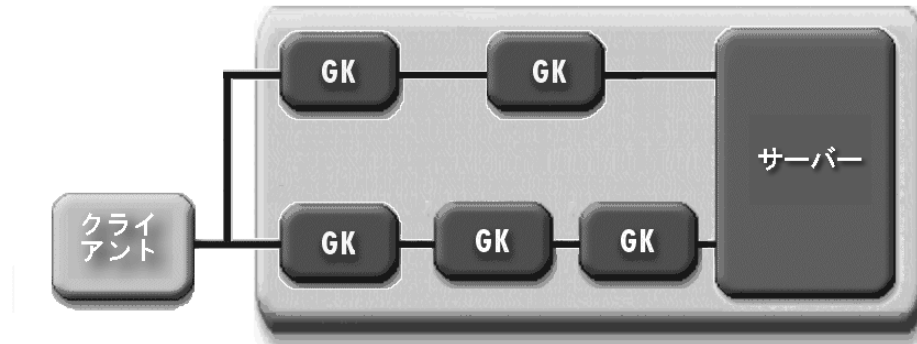
上の図では、ファイアウォール越しに通信するために 2 つのチェイン化された Gatekeeper が必要です。クライアントアプレットは Gatekeeper1 にメッセージを送信し、Gatekeeper1 はファイアウォール越しに Gatekeeper2 へメッセージを転送します。Gatekeeper1 は Gatekeeper2 にメッセージを転送できませんが、これは Gatekeeper1 に Gatekeeper2 の

IORがあるからです。Gatekeeper2のIORは、Gatekeeper1からGatekeeper2へメッセージを送信する方法、つまりファイアウォールを越える方法を指示します。

GateKeeperの動的チェイン化

静的チェイン化では通信パスをGatekeeperのIORに指定しますが、動的チェイン化の場合は通信パスをサーバーのIORファイルに指定します。サーバーのIORファイルがある場合、クライアントはサーバーのIOR情報を使ってパスを選択します。クライアントは、最初のパスを使って接続に失敗すると、次のパスを試し、以下同様に続きます。

図 5.2 GateKeeperの動的チェイン化



上の図では、クライアントからサーバーへのパスが2つあります。どちらのパスでも、GateKeeperのチェイン化が必要です。サーバーのIORにはこの2つのパスが指定されており、クライアントはこれを読み取って最初のパスを試し、接続に失敗すると第2のパスを試します。パスは実行時に動的に選択されます。

サーバーまでのパスを指定する方法については、[32ページの「サーバーまでの通信パスの指定」](#)を参照してください。

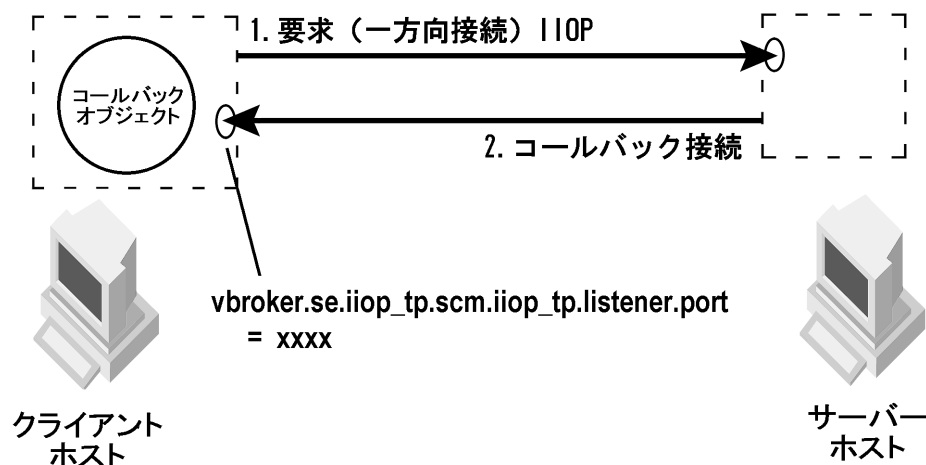
コールバック

ほとんどのインプリメンテーションでは、クライアントによって要求が開始され、それにサーバーが応答を戻します。また、クライアントが要求していない情報がクライアントに送られるインプリメンテーションもあります。これは、コールバックオブジェクトを作成して実装できます。コールバックオブジェクトのインプリメンテーションには、次の3つの方法があります。

GateKeeperなしのコールバック

次の図に示したインプリメンテーションは、クライアントとサーバーが双方向通信できる場合に適用されます。この場合は、間に入るファイアウォールが存在しないか、ファイアウォールが存在してもクライアントとサーバーの通信を妨げることはありません。

図 5.3 GateKeeper なしのコールバックの使用

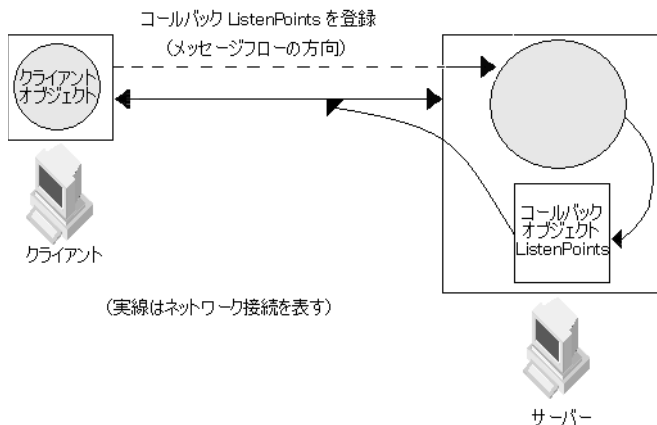


上の例で、クライアントはオブジェクトの作成、リスナーの起動、IOR の生成、サーバーへの要求と IOR の送信を行います。サーバーはクライアントのリスナーを呼び出し、コールバック接続を確立します。したがって、コールバックオブジェクトに送信されるメッセージはすべて、コールバック接続を介して配信されます。

双方向 GIOP を使用する GateKeeper なしの接続

双方向 IIOp がある場合、サーバーはクライアントが開始した接続で、クライアントに非同期情報を送信します。サーバーはクライアントとの接続を開始する必要がありません。

図 5.4 双方向 GIOP をサポートする GateKeeper なしのコールバックの使用



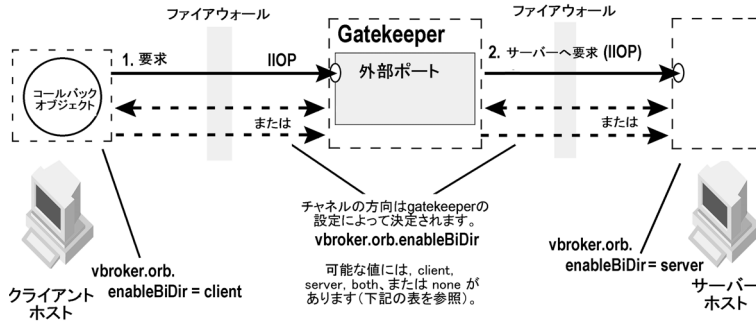
上の図で、クライアントは、サーバーとの接続を直接確立できますが、サーバーは、間にファイアウォールがあるため別個のコールバック接続を確立できません。そのため、クライアントとサーバーは双方向 GIOP 接続をネゴシエートし、クライアントが IIOp トラフィック用に最初に確立した接続を双方向で共有します。

CORBA 仕様でも、この機能を簡単に制御できる新しいポリシーを追加しています。GateKeeper 以外の双方向通信については、Borland Enterprise Server の『開発者ガイド』を参照してください。

Gatekeeper の双方向サポートによるコールバック

双方向 IIOP がある場合、サーバーはクライアントが開始した接続で、クライアントに非同期情報を送信します。サーバーはクライアントとの接続を開始する必要がありません。CORBA 仕様でも、この機能を簡単に制御できる新しいポリシーを追加しています。GateKeeper 以外の双方向通信については、『開発者ガイド』を参照してください。

図 5.5 Gatekeeper の双方向サポートによるコールバック



上の図で、Gatekeeper はクライアントとサーバーの間に置かれ、クライアントに対してはサーバーとして、サーバーに対してはクライアントとして機能します。クライアントと Gatekeeper の間、および Gatekeeper とサーバーの間の通信チャンネルは、一方向接続と双方向接続のどちらにも設定できます。

チャンネル設定は、一方向と双方向から選択できます。次の表は、クライアントで vbroker.ORB.enableBiDir=client と定義し、サーバーで vbroker.ORB.enableBiDir=server と定義している場合に、GateKeeper の vbroker.ORB.enableBiDir の値を変えたときのチャンネルの種類をまとめたものです。

表 5.1 一方向または双方向の通信

vbroker.ORB.enableBiDir=	クライアントと GateKeeper の間	GateKeeper とサーバーの間
client	一方向	双方向
server	双方向	一方向
both	双方向	双方向
none	一方向	一方向

双方向接続サンプル

GateKeeper の双方向接続のサポートのサンプルは、GateKeeper for Java インストールの examples/vbroker/bank_bidir サブディレクトリにあります。

Bank BiDir サンプルは、Bank Callback サンプルに似ていますが、BiDir サンプルでは、クライアント、Gatekeeper、およびサーバーの間で双方向接続が確立される点が異なります。つまり、双方向インプリメンテーションでは送信呼び出しとコールバックの両方に同じ接続を使用します。

このサンプルでは、次の作業を行います。

- プロパティファイルで、クライアントにおける双方向接続を有効に設定します。
- サーバーオブジェクトに対する呼び出しに引数として渡すことができるコールバックオブジェクトを作成するように、クライアントをプログラミングします。
- プロパティファイルを使用して、サーバーの着信側ファイアウォールを含むファイアウォールパスを設定します。また、双方向接続を受け付けることができるようにサーバーを設定します。

- サーバーオブジェクト IOR 内でファイアウォールパスをエクスポートするように、サーバーをプログラミングします。
- 双方向接続をサポートするように、Gatekeeper を設定します。

クライアント

このサンプルでは、クライアント Client.java は次の処理を行います。

- 1 callback_poa という名前の POA にコールバックオブジェクトを作成します。このコールバックオブジェクトは、Gatekeeper を介してサーバーから呼び出されます。
- 2 AccountManager オブジェクトへのバインド
- 3 open() を呼び出し、コールバックオブジェクトを引数として渡して銀行口座を開くことで、このコールバックオブジェクトのオブジェクトリファレンスをサーバーに送信します。
- 4 取得した Account オブジェクトリファレンスに口座残高を照会します。このとき、再びコールバックオブジェクトを（今度は balance メソッドに）渡します。

サーバー

このサンプルで、サーバー Server.java は次の処理を行います。

- 1 ファイアウォールポリシー値 EXPORT で、bank_poa という名前の永続的 POA と account_poa という名前の一時的 POA を作成します。
- 2 AccountManager サーバントのインスタンスを作成します。
- 3 bank_poa でサーバントを起動します。
- 4 クライアント要求の待機を開始します。
- 5 クライアントが Gatekeeper を介して開始したコールバックオブジェクトのメソッドを呼び出して要求に応答します。

表 5.2 双方向接続を利用するために設定するファイル

ファイル名	説明
server.properties	bank サーバーを設定するためのプロパティファイル。このサンプルでは、Gatekeeper とサーバー間に双方向接続を確立するために、監視ポイントを受け付けるようにサーバーを設定します。接続を一方にするには、vbroker.orb.enableBiDir プロパティを削除するか、値を none に設定します。このファイル内のほかのプロパティは、ファイアウォールパッケージをロードし、ファイアウォールパスを設定して、クライアントがサーバー側のオブジェクトにバインドして呼び出すことができるようにします。
client.properties	bank クライアントを設定するためのプロパティファイル。このサンプルでは、クライアントと Gatekeeper の間に双方向の接続を確立するために、クライアントが監視ポイントを公開するように設定します。接続を一方にするには、vbroker.orb.enableBiDir プロパティを削除するか、値を none に設定します。サーバーの場合と同様に、クライアントが Gatekeeper を通過するために必要なファイアウォールライブラリをロードする vbroker.orb.dynamicLibs プロパティを設定します。
GateKeeper.properties	Gatekeeper を設定するためのプロパティファイル。このサンプルでは、Gatekeeper は、監視ポイントの公開と受け付けの両方を行うように設定します。したがって、クライアントと Gatekeeper 間の接続と Gatekeeper とサーバー間の接続はいずれも双方向になります。これらの接続を一方に変更するには、vbroker.orb.enableBiDir プロパティを削除するか、値を none に設定します。

セキュリティに関する注意

注意 双方向 IIOP を使用すると、セキュリティに関する重大な問題が発生する可能性があります。特にセキュリティメカニズムが設定されていない場合は、悪意のあるクライアントがホストとポートを任意に選択して、双方向接続を要求する可能性があります。また、自分のホストにはない、セキュリティ上重要なオブジェクトのホストとポートをクライアントが指定する場合があります。さらにセキュリティメカニズムが設定されていないと、着信接続を受け付けたサーバーは、接続要求元のクライアントの ID を識別したり、クライアン

トの完全性を検査できません。また、サーバーが双方向接続を介してほかのオブジェクトにアクセスできる可能性があります。以上のことから、コールバックオブジェクトごとに独立した双方向 SCM を使用してください。クライアントの完全性に疑問がある場合は、双方向 IIOP を使用しないでください。

Java セキュリティ上の理由から、VisiBroker for Java を実行するサーバーは、双方向 IIOP を使用するよう明示的に設定されていない限り、双方向 IIOP を使用しません。プロパティ `vbroker.se.<sename>.scm.<scmname>.manager.importBiDir` を使用すると、SCM 単位で双方向性を制御できます。たとえば、SSL を使ってクライアントを認証するサーバーエンジンだけで双方向 IIOP を有効にし、その他の通常の IIOP 接続は双方向で使用できないように選択することもできます。詳細については、「Gatekeeper のプロパティ」を参照してください。さらに、クライアントファイアウォール外でコールバックを行うサーバーとの双方向接続だけをクライアント側で有効にすることもできます。クライアントとサーバー間に高度なセキュリティを確立するには、相互認証(クライアントとサーバーの両方で `vbroker.security.peerAuthenticationMode` を `REQUIRE_AND_TRUST` に設定)の SSL を使用します。

アクセスコントロール

GateKeeper には、ルールベースのアクセスコントローラが組み込まれています。このコントローラは、次の条件に基づいてアクセスを許可または拒否します。

- 操作
- 署名
- サーバーのホスト/ポート
- サーバーのサブネット
- クライアントのホスト/ポート
- クライアントのサブネット

すべてのルールは指定した順序で評価され、最初に一致したルールで処理が実行されます。一致する規則がない場合はユーザーが指定したデフォルトの動作が実行されます。規則の構文については、付録 A 「GateKeeper プロパティ」を参照してください。

GateKeeper におけるカスタムアクセスコントロール

GateKeeper を使用すると、カスタマイズしたアクセスコントロールメカニズムを組み込むことができます。Access Control Manager は、GateKeeper プロパティを使って指定されているすべてのアクセスコントローラを呼び出します。Access Control Manager は、次のインターフェースを使ってアクセスコントローラを実装します。

```
package com.inprise.vbroker.gatekeeper.security;
public interface AccessController {
    public void init(org.omg.CORBA.ORB orb, String prefix);
}
```

アクセスコントローラは、TcpConnectionInfo インターフェースを使用して、クライアントに関する詳細な情報を取得します。

```
package com.inprise.vbroker.orb;
public interface TcpConnectionInfo {
    public String getLocalHostName();
    public int    getLocalPortNumber();
    public String getHostName();
    public int    getPortNumber();
    public long   getTotalBytesRead();
    public long   getTotalBytesWrote();
    public String name();
    public java.io.InputStream getInputStream();
    public java.io.OutputStream getOutputStream();
}
```

Access Control Manager は、init メソッドを呼び出してアクセスコントローラを初期化します。GateKeeper は、次の種類のアクセスコントローラインターフェースをサポートします。

- **ObjectAccessController:** クライアントが GateKeeper にサーバーオブジェクトへのプロキシチャンネル（通信パス）を設定するように要求すると、isObjectAccessible() メソッドが呼び出されます。このメソッドは、オブジェクトにアクセスできる場合に true を返します。

```
package com.inprise.vbroker.gatekeeper.security;
import com.inprise.vbroker.orb.TcpConnectionInfo;
import com.inprise.vbroker.IOP.ServiceContext;
public interface ObjectAccessController extends AccessController {
    public boolean isObjectAccessible(
        TcpConnectionInfo    clientInfo,
        org.omg.CORBA.Object  server,
        ServiceContext[]      contexts,
        byte[]                 principal);
}
```

- **OperationAccessController:** クライアントが GateKeeper を介して要求を送信すると、isOperationAccessible() メソッドが呼び出されます。このメソッドは、指定されたオペレーションにアクセスできる場合に true を返します。

```
package com.inprise.vbroker.gatekeeper.security;
import com.inprise.vbroker.orb.TcpConnectionInfo;
import com.inprise.vbroker.IOP.ServiceContext;
public interface OperationAccessController extends AccessController{
    public boolean isOperationAccessible(
        TcpConnectionInfo    clientInfo,
        TcpConnectionInfo    serverInfo,
        org.omg.CORBA.Object  server,
        String                 operation,
        ServiceContext[]      services);}
}
```

アクセスコントローラ（たとえば、myAC）をプログラミングし、次のプロパティを使って GateKeeper にインストールできます。

```
vbroker.gatekeeper.security.accessControllers=myAC
```

```
vbroker.gatekeeper.security.acl.myAC.type=com.inprise.vbroker.gatekeeper.securi
ty.myACImpl
vbroker.gatekeeper.security.acl.myAC.rules=
vbroker.gatekeeper.security.acl.myAC.default=grant
```

アクセスコントローラは、次のように実装できます。

```
package com.inprise.vbroker.gatekeeper.security;
import java.util.*;
import java.io.*;
import com.inprise.vbroker.orb.TcpConnectionInfo;
import com.inprise.vbroker.orb.ORB;
import com.inprise.vbroker.IOP.ServiceContext;
public class myACImpl implements
ObjectAccessController, OperationAccessController {
    public void init(org.omg.CORBA.ORB orb, String prefix) {
    }
    public boolean isObjectAccessible(
    TcpConnectionInfo clt, org.omg.CORBA.Object svr,
    ServiceContext[] contexts, byte[] principal) {
        return true;
    }
    public boolean isOperationAccessible(
    TcpConnectionInfo clt, TcpConnectionInfo svr,
    org.omg.CORBA.Object server, String operation,
    ServiceContext[] services) {
        return true;
    }
}
```

アクセスコントロールのメソッドや規則は、インプリメンテーションによって定義できます。

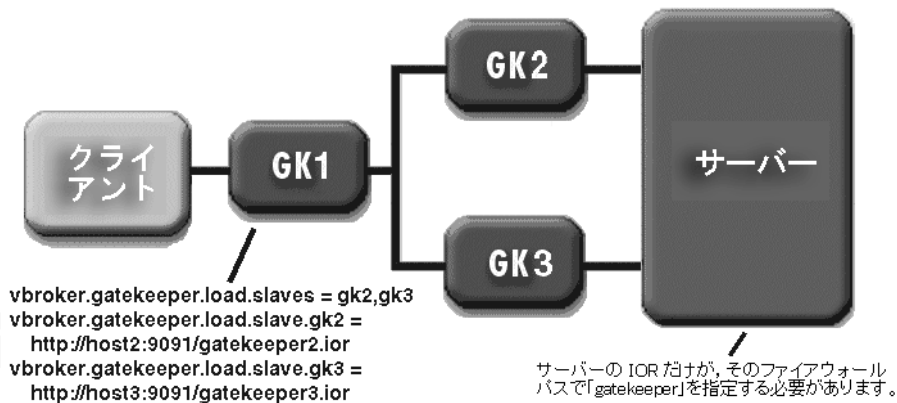
負荷分散とフォールトトレランス

GateKeeper は、内部ネットワークへの単一のアクセスポイントを提供するために使用されることがほとんどなので、非常に混雑したり、エラーの元になる可能性があります。Gatekeeper クラスタリングを利用して、ある程度のスケーラビリティとフォールトトレランスを実現すれば、これらの問題は解決できます。

負荷分散

マスター GateKeeper と 1 つ以上のスレーブ GateKeeper を組み合わせてクラスタを構成できます。マスター GateKeeper はスレーブ GateKeeper 間の負荷分散を担当します。サーバーがエクスポートするのは、マスター GateKeeper オブジェクトリファレンスだけです。

図 5.6 GateKeeper を使用した負荷分散



上の図は、GateKeeper1 とサーバーのプロパティ設定を示したものです。マスター GateKeeper は、スレーブ GateKeeper 間の負荷を、オブジェクトレベル単位で分散できます。オブジェクトレベルで、各クライアントは、負荷分散ポリシーに基づいてスレーブ

GateKeeper のいずれかにリダイレクトされます。一般には、この方法で負荷の分散状態は公平になりますが、リソースの使用量が増えて速度が低下するおそれがあります。

デフォルトの負荷分散方式は、ラウンドロビン（総当たり）方式です。ただし、このポリシーをカスタマイズして標準パッケージとして利用することもできます。詳細については、**Borland** までお問い合わせください。

さらに GK2 と GK3 にも、独自のスレーブ Gatekeeper を設定できます。この設定では、マスターとスレーブの階層は相互にスタックできます。

GateKeeper におけるカスタム負荷分散

ORB のデフォルトの負荷分散インプリメンテーションでは、ラウンドロビンアルゴリズムを使用します。このアルゴリズムでは、クライアントの要求をサーバーと GateKeeper が順番に共有します。次のサンプルコードは、分散クラスのインプリメンテーションの例です。

```
package com.inprise.vbroker.gatekeeper.ext;
import java.util.Enumeration;
import org.omg.Firewall.GIOPProxy;
import com.inprise.vbroker.orb.*;
import com.inprise.vbroker.util.*;

public class MyDistributor implements Distributor {
    private Enumeration _enum;
    private UnGuardedVector _servers;
    public void init(ORB orb, UnGuardedVector v) {
        _servers = v;
        _enum = servers.elements();
    }
    public synchronized GIOPProxy next() {
        if (!_enum.hasMoreElements()) {
            _enum = _servers.elements();
        }
        return (GIOPProxy)_enum.nextElement();
    }
}
```

サーバーマネージャは、マスター／スレーブ設定内のほかの GateKeeper インスタンスの現在の負荷関連情報を収集できます。リアルタイムで利用できるサーバーマネージャからの情報に基づいて、マスター GateKeeper は、クライアントの要求をほかの GateKeeper に割り当て直すことができます。また、GateKeeper のフェデレーションは、負荷を分散するための負荷統計情報を交換できます。

フォールトトレランス

マスター GateKeeper と 1 つ以上のバックアップ GateKeeper でクラスタを構成して、見かけ上は 1 つの GateKeeper としてクライアントに提供することができます。GateKeeper をクラスタに構成する方法を次に紹介します。

- サーバーまでのさまざまなファイアウォールパスとして GateKeeper をクラスタに構成します。

この構成は、Gatekeeper の動的チェイン化と同様の方法で設定できます。GateKeeper の設定を変更する必要はなく、サーバーリスナーにすべてのバックアップ GateKeeper をファイアウォールパスとして組み込むようにサーバーを設定するだけで済みます。ただし、この方法では、サーバー設定が複雑になります。

- すべてのバックアップ GateKeeper のオブジェクトリファレンス（プロファイル）をマスター GateKeeper のオブジェクトリファレンスに折りたたみます。マスター GateKeeper が失敗すると、クライアントはほかのバックアップ GateKeeper のいずれかに自動的にリバインドされます。この方法では、GateKeeper のオブジェクトリファレンスが非常に大きくなる可能性があります。Gatekeeper の負荷分散機能はこの方法を使用しています。

スケーラビリティとパフォーマンスに関するガイドライン

GateKeeper のパフォーマンスの評価では、GateKeeper 通信方式（クライアント - GateKeeper - サーバー）と直接通信方式（クライアント - サーバー）の比較が有効です。

メモ この場合、パフォーマンスは応答時間で示され、スケーラビリティはスループットで表されています。

GateKeeper 通信方式では、接続が 2 本必要なため、呼び出しも 2 か所必要です。そのため、次のような影響が出ます。

- **スループットが小さい。** 直接通信と比較して、50% ほど減少する可能性があります。
- **応答時間が遅い。** 直接通信と比較して、応答時間は長くなります。場合によっては、200% まで長くなる可能性があります。

GateKeeper パフォーマンスの調整

GateKeeper では、パフォーマンスやスループットに関する新しいしきい値は発生しません。GateKeeper のパフォーマンスとスループットの特徴は VisiBroker ORB と同じです。GateKeeper は CORBA アプリケーションなので、ORB の基本機能を継承します。したがって、ORB 固有のパフォーマンスチューニングパラメータは、すべて GateKeeper にも適用されます。ただし、次の各項で説明する機能は、GateKeeper のパフォーマンスに影響を与えます。

ビッドメカニズム

ユーザーによって設定された制約に基づいて特定のビッドを選択するようにクライアント側 ORB をプログラムできます。ビッド選択の順序を指定することで、接続の確立処理を高速化できます。

- **ビッドポートフォリオの制約。** GateKeeper を静的にチェーン化する際に排他的ビッドを設定する場合は、次のプロパティが有効です。

```
vbroker.orb.alwaysProxy
vbroker.orb.alwaysTunnel
vbroker.orb.alwaysSecured
```

たとえば、特定の GateKeeper が別の GateKeeper に静的にチェーン化されている場合は、`vbroker.orb.alwaysProxy` が有効です。GateKeeper をチェーン化する際に HTTP トンネリングだけを使用することが確実である場合は、`vbroker.orb.alwaysTunnel` プロパティを設定すると、不要なビッドを避けることができます。`vbroker.orb.alwaysSecured` プロパティが設定されている場合、GateKeeper は、チェーン化の際にだけセキュリティで保護された通信バスを使用します。これらのプロパティは外部 GateKeeper に設定されることに注意してください。

- **ビッド選択の順序。** ビッドの順序は、特定のビッドが選択される速さに影響します。たとえば、特定の GateKeeper で許可される接続のほとんどがセキュリティで保護されていることが確実な場合は、次に示すように、文字列の最初のエントリに SSL を入れることができます。

```
vbroker.orb.bidOrder=inprocess:liop:ssl:iop:proxy:hiop:locator
```

- **優先順位が高いビッドの指定。** 最高の優先順位を持つビッドには、次のプロパティを設定できます。デフォルトでは、ORB の `inprocess` に設定されます。

```
vbroker.orb.bids.critical=inprocess
```

キャッシュ管理

次のプロパティは、GateKeeper のキャッシュサイズを設定します。

```
vbroker.gatekeeper.cache.size=100
```


メッセージマーシャリング

ストリームのチャンクサイズを設定することで、**GateKeeper** とクライアント/サーバーアプリケーションの間で交換されるメッセージのサイズを大きくすることができます。チャンクサイズは、特に、HTTP トンネリングを使用するアプリケーションのパフォーマンスに大きく影響する場合があります。

```
vbroker.orb.streamChunkSize=4096
```

4096, 8192, 16384 などの値を使用してみてください。アプリケーションのパフォーマンスは、ネットワーク上のパケットの最大サイズに応じて変化します。

スレッド管理

GateKeeper の応答の必要性に応じて、スレッドプーリング、セッションごとのスレッドなど、さまざまなスレッド管理手法を適用できます。デフォルトでは、要求転送 IIOP サービスは **ThreadPool** を使用し、**HIOP** サービスは **ThreadSession** を使用します。

```
vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.dispatcher.type=ThreadPool
vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.dispatcher.threadMax=100
vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.dispatcher.threadMin=0
vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.dispatcher.threadMaxIdle=300
```

```
vbroker.se.interior.scm.in-iiop.dispatcher.type=ThreadPool
vbroker.se.interior.scm.in-iiop.dispatcher.threadMax=100
vbroker.se.interior.scm.in-iiop.dispatcher.threadMin=0
vbroker.se.interior.scm.in-iiop.dispatcher.threadMaxIdle=300
```

```
vbroker.se.exterior.scm.ex-hiop.dispatcher.type=ThreadSession
```

接続管理

双方向 **GIOP** では、前後両方向の通信で同じ通信パスを使用できます。したがって、コールバックを使用する場合は、`vbroker.orb.enableBiDir` プロパティ設定を使用することをお勧めします。次のプロパティを使用すると、接続リソースの使用を最適化できます（詳細については、付録 A を参照）。

```
vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.manager.connectionMax
vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.manager.connectionMaxIdle
```

```
vbroker.se.interior.scm.in-iiop.manager.connectionMax
vbroker.se.interior.scm.in-iiop.manager.connectionMaxIdle
```

GateKeeper は、潜在的に多数のクライアントに対する中間サービスであり、必要な数だけのサーバーに接続できる必要があるため、**GateKeeper** のコンテキスト内では `vbroker.ce.iiop.ccm.connectionMax` を使用しないでください。**GateKeeper** は、開くことができる発信接続の数が制限されていても、すでに接続されているクライアントがサーバーと接続できないようにすることはできません。そのかわり、**GateKeeper** は、次のプロパティを使用して、サービスを提供するクライアントの数を制限できます。

```
vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.manager.connectionMax
```

ただし、`vbroker.ce.iiop.ccm.connectionMaxIdle` を使用して、アイドル状態のサーバー接続を削除することができます。これは、**GateKeeper** が接続するサーバー数が多いと考えられる場合、接続するクライアントの数が少ない場合、およびクライアントが主に少数のサーバーだけをターゲットにする場合に特に有効です。

GateKeeper の非同期呼び出しの影響

GateKeeper の非同期呼び出しは、パフォーマンスやスケーラビリティに対してそれほど大きな影響はありません。

GateKeeper のパフォーマンスプロパティ

GateKeeper のパフォーマンスに関係がある多くのプロパティがあります。ここでは、接続、スレッドの種類、オペレーションモード、呼び出しの種類に関連するプロパティについて説明します。

調整によってパフォーマンスを向上させることができるその他のプロパティについては、[74 ページの「パフォーマンスと負荷分散」](#)を参照してください。

接続の設定

GateKeeper の接続関連のプロパティを次に示します。

```
vbroker.se.<xxx>.scm.<yyy>.manager.connectionMax
vbroker.se.<xxx>.scm.<yyy>.manager.connectionMaxIdle
```

ここで、<xxx> と <yyy> は、「exterior, ex-iiop」, 「exterior, ex-iiop」, 「exterior, ex-iiops」, 「exterior, ex-ssl」, 「interior, in-iiop」, または「interior, in-ssl」です。

最初のプロパティは、アクティブな接続の最大許容数を指定します。接続を制限すると、GateKeeper のリソースを節約できますが、クライアントのパフォーマンスが低下する場合があります。デフォルトは、制限なしです。

2 番目のプロパティでは、非アクティブな接続を切断するまでに、どれだけの時間待機するかを指定します。デフォルトの 0 は、非アクティブな接続を切断しないことを表します。

スレッド関連の設定

ディスパッチャタイプが ThreadPool の場合、次の GateKeeper のプロパティを調整できます。

```
vbroker.se.<xxx>.scm.<yyy>.dispatcher.threadMin
vbroker.se.<xxx>.scm.<yyy>.dispatcher.threadMax
vbroker.se.<xxx>.scm.<yyy>.dispatcher.threadMaxIdle
```

<xxx> と <yyy> の組み合わせの値としては、「exterior, ex-iiop」, 「exterior, ex-ssl」, 「interior, in-iiop」, または「interior, in-ssl」があります。

最初のプロパティ「threadMin」には、要求にすみやかに応答するための、事前に作成しておくスレッド数を指定します。デフォルトは 0 です。

2 番目のプロパティ「threadMax」では、過剰なスレッド数でシステムに負担がかかるのを避けるため、作成するスレッドの最大数を指定します。デフォルトは 100 です。スレッド数の不足で処理できなかった要求は、利用可能な次のスレッドを待機します。

3 番目のプロパティ「threadMaxIdle」では、スレッドを破棄するまでの待機時間を指定します（秒単位）デフォルトは 300 秒です。

GateKeeper のモード

GateKeeper は通常モードでも、パススルーモードでも実行できます。パススルーモードではパフォーマンスが低下します。パケットのコンテンツはチェックされなくても GateKeeper のリソースを消費するからです。実際、各パススルー接続には接続が続く限り排他的なポートが必要とされます。クライアントプロセスは、プログラムのポリシーを使って排他的な接続を要求できます。

通常モードのオペレーションの方が、GateKeeper のパフォーマンスが高くなります。

プロパティ `vbroker.GateKeeper.enablePassthru=true` を設定してパススルーを有効にしない限り、通常モードが使用されます。

呼び出しの種類

呼び出しには、次の 3 種類があります。

- 通常の一方呼び出し
- 双方向コールバック
- VisiBroker 3.x スタイルのコールバック

双方向コールバックは、一方の呼び出しとコールバックの両方で 1 つの接続を使用します。これは VisiBroker 3.x スタイルのコールバックより効率的です。

双方向コールバックの効率性は、通常の一方呼び出しと同程度です。

GateKeeper ガイドと SSL

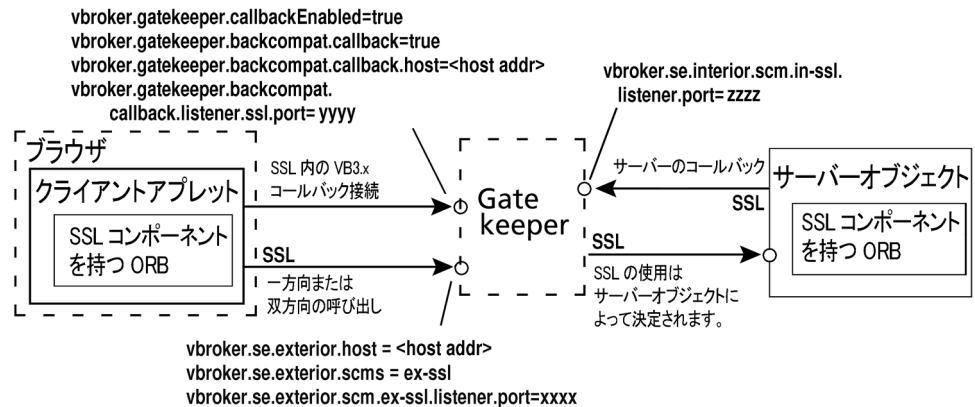
メモ SSL はオプションパッケージで使用できる独立したプロダクトです。そのため、アプレットやサーバーオブジェクトを SSL モードで実行する場合は ORB ランタイムに SSL コンポーネントを組み込む必要があります。

SSL で実行する GateKeeper ガイドには、次のようなセキュリティ機能があります。

- クライアントとサーバー間で IIOP/SSL 接続を中継する。
- HTTPS トンネリングをサポートする。
- IIOP/SSL コールバックを有効にする (VisiBroker 3.x スタイルおよび双方向)。
- サーバーのかわりに認証を実行する。
- 認証情報を転送する。

SSL を設定するためのその他のプロパティについては、[付録 A 「GateKeeper プロパティ」](#) を参照してください。

図 5.7 Gatekeeper との SSL 接続



Gatekeeper との SSL 接続

サーバーは、SSL 接続または通常の IIOP 接続のどちらを使用するかを決定します。SSL モードで実行されているクライアントでは、任意で SSL に接続するように要求できます。ただし、SSL モードで実行されているサーバーには、SSL モードでクライアントを接続する必要があります。

クライアントのプロパティファイルで `vbroker.orb.alwaysSecure=true` と設定されている場合、クライアントは常に SSL モードでサーバーや GateKeeper に接続され、ほかの種類の接続は行われません（ただし、サーバーや GateKeeper がほかの種類の接続を受け入れない場合はエラーになることがあります）。これで接続時間が短縮されます。

同様にこのプロパティを設定すると、Gatekeeper がサーバーに接続するときにも役立ちます。

送信呼び出しと双方向呼び出し用の SSL

次の GateKeeper プロパティを設定すると、クライアント（アプレット）からサーバーオブジェクトへの呼び出しで（Gatekeeper を介して）SSL を有効にできます。

```
vbroker.se.exterior.host = <host address>
vbroker.se.exterior.scms = ex-iiop, ex-hiops, ex-ssl
vbroker.se.exterior.scm.ex-ssl.listener.port = <port address>
```

アプレットクライアントは Gatekeeper への SSL 接続を開きます。クライアントと Gatekeeper 間の通信チャネルは SSL モードです。ただし、Gatekeeper とサーバー間の通信チャネルのモードはサーバーによって決まります。サーバーの scm を SSL モードに設定すると Gatekeeper とサーバー間の通信チャネルは SSL モードになります。

双方向の呼び出しでは、同じ方向の通信パスを使用します。ただし、双方向のコールバックには、さらに設定の必要なプロパティがあります。

GateKeeper におけるセキュリティサービスの有効化

セキュリティはデフォルトでオンになりますが、この機能は、セキュリティサービスのライセンスにだけ適用されます。ただし、セキュリティサービスをオンにするためのライセンスチェックはありません。

Borland VisiBroker では、次のプロパティで指定されように、セキュリティはデフォルトでオフになります。

```
vbroker.security.disable=true
```

VisiBroker で次のプロパティを設定すると、アプリケーションは、認証のためのユーザー名とパスワードの入力を求めます。

```
vbroker.security.login=true
```

*.config ファイル（サンプルは下記参照）を作成し、認証および領域関連のパラメータを指定する必要があります。

次に示すプロパティでは、セキュリティが有効の GateKeeper の一般的な例として、IIOP, IIOP/SSL, HIOP, および HIOPS のリスナーが有効にされています。

gatekeeper.config

```

System
  com.borland.security.provider.authn.HostLoginModule required REALM=myrealm
  PRIMARYIDENTITY=true;

  com.borland.security.provider.authn.ClientSideDataCollection required
  REALM=testrealm;

};
myrealm
  com.borland.security.provider.authn.HostLoginModule required;

};

anotherrealm {
  com.borland.security.provider.authn.HostLoginModule required;
};

```

gatekeeper.properties

```

vbroker.security.disable=false

vbroker.security.peerAuthenticationMode=none

vbroker.security.secureTransport=false

vbroker.security.trustpointsRepository=Directory:./trustpoints

vbroker.gatekeeper.referenceStore=./gkclnt.ior
vbroker.orb.enableBiDir=both

vbroker.orb.dynamicLibs=com.borland.security.hiops.Init

vbroker.se.exterior.scms=ex-iiop,ex-hiop,ex-ssl,ex-hiops
vbroker.se.exterior.host=143.186.142.21
vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.listener.port=25000
vbroker.se.exterior.scm.ex-hiop.listener.port=25001
vbroker.se.iiop_tp.scm.hiop_ts.listener.port=25002
vbroker.se.exterior.scm.ex-ssl.listener.port=25003
vbroker.se.exterior.scm.ex-hiops.listener.port=25004

vbroker.se.interior.scms=in-iiop,in-hiop,in-ssl
vbroker.se.interior.host=143.186.139.226
vbroker.se.interior.scm.in-iiop.listener.port=15001

vbroker.se.interior.scm.in-hiop.listener.port=15002

vbroker.se.interior.scm.in-ssl.listener.port=15003

# この GateKeeper を使ってコールバックを有効にします。

vbroker.gatekeeper.callbackEnabled=true

# VBJ3.x (古いスタイル) コールバックも有効にします。
vbroker.gatekeeper.backcompat.callback=true
vbroker.gatekeeper.backcompat.callback.host=143.186.142.21
vbroker.gatekeeper.backcompat.callback.listeners=iiop,ssl
vbroker.gatekeeper.backcompat.callback.listener.iiop.port=16001
vbroker.gatekeeper.backcompat.callback.listener.iiop.type=IIOPCallback
vbroker.gatekeeper.backcompat.callback.listener.ssl.port=16002
vbroker.gatekeeper.backcompat.callback.listener.ssl.proxyPort=0
vbroker.gatekeeper.backcompat.callback.listener.ssl.type=SSLCallback

# オプション : GateKeeper 固有のアクセスコントロールプロパティを有効にします。
vbroker.gatekeeper.security.accessControllers=myAC

```

```
vbroker.gatekeeper.security.acl.myAC.default=grant
vbroker.gatekeeper.security.acl.myAC.rules=rule1
vbroker.gatekeeper.security.acl.myAC.rule1=grant [operation="**"]
```

```
# オプション: GateKeeper の ID
```

```
vbroker.security.wallet.identity=<username>
vbroker.security.wallet.password=<password>
vbroker.security.wallet.type=Directory:<path-to-identities>
```

次のサンプルのプロパティ設定では、クライアントが **GateKeeper** を使ってセキュリティで保護された転送を特別に要求しています。クライアントアプリケーションは、ユーザー名とパスワードを収集し、それを **GateKeeper** を介してサーバーに送信します。

client.config

```
System {
  com.borland.security.provider.authn.ClientSideDataCollection required
  REALM=myrealm;
};

Client {
  com.borland.security.provider.authn.ClientSideDataCollection required;
};
```

client.properties

```
vbroker.security.disable=false
vbroker.security.login=true

vbroker.security.authentication.callbackHandler=com.borland.security.provider.a
uthn.HostCallbackHandler
vbroker.security.authentication.config=client.config

vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init
vbroker.se.iiop_tp.scms=iiop_tp,ssl
vbroker.orb.alwaysProxy=true
vbroker.orb.alwaysSecure=true
```

次のサンプルのプロパティ設定は、**IIOP** リスナーを無効にし、サーバーは、**SSL** トランスポートだけを使用するセキュリティで保護されたアプリケーションであるとみなされます。

server.config

```
System {
  com.borland.security.provider.authn.HostLoginModule required REALM=myrealm
  PRIMARYIDEHostITY=true;
  com.borland.security.provider.authn.ClientSideDataCollection required
  REALM=testrealm;
};

myrealm {
  com.borland.security.provider.authn.HostLoginModule required;
};

anotherrealm {
  com.borland.security.provider.authn.HostLoginModule required;
};
```

server.properties

```

vbroker.security.disable=false
vbroker.security.login=true

vbroker.security.authentication.callbackHandler=com.borland.security.provider.athn.HostCallbackHandler
vbroker.security.authentication.config=server.config

vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init
vbroker.orb.exportFirewallPath=true

vbroker.se.iiop_tp.host=143.186.142.21

vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.type=Disabled-IIOP
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port=25000
vbroker.se.iiop_tp.scm.ssl.listener.port=25005

vbroker.se.iiop_tp.firewallPaths=intranet
vbroker.firewall-path.intranet=first,second

vbroker.firewall-path.internet=first
vbroker.firewall.first.type=PROXY
vbroker.firewall.first.ior=http://localhost:16085/gatekeeper.ior

vbroker.firewall.second.type=TCP
vbroker.firewall.second.host=192.75.11.14
vbroker.firewall.second.iiop_port=32000
vbroker.firewall.second.hiop_port=32001
vbroker.firewall.second.ssl_port=32005

```

GateKeeper を介したネーミングサービスへのアクセスの有効化

固定された IP アドレスとポートでネーミングサービスを開始するには、次のプロパティを設定する必要があります。次のサンプルのネーミングサービスは、IP ホストアドレス 143.186.142.21 とリスナーポート 32101 で実行されています。32101:

namingservice.properties

```

vbroker.agent.addr=143.186.142.21
vbroker.agent.port=25873
vbroker.orb.logger.output=ns_debug.log

vbroker.naming.logLevel=7
vbroker.naming.iorFile=ns.ior

vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init
vbroker.se.iiop_tp.host=143.186.142.21
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port=32010

```

gatekeeper.properties

```

vbroker.agent.addr=143.186.142.21
vbroker.agent.port=25873
vbroker.agent.enableLocator=false

vbroker.orb.initRef=NameService=corbaloc::143.186.142.21:32010/NameService
vbroker.gatekeeper.referenceStore=gkclnt.ior
vbroker.se.exterior.host=143.186.142.21
vbroker.se.interior.host=143.186.139.226
vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.listener.port=25000
vbroker.se.exterior.scm.ex-hiop.listener.port=25001
vbroker.se.iiop_tp.scm.hiop_ts.listener.port=25002

```


第 6 章

GateKeeper のトラブルシューティング

ここでは、Gatekeeper とそのクライアントおよびサーバーから、デバッグ用の情報を取得する方法について説明します。また、不正な環境とレジストリの設定などで起こりうる問題と、Gatekeeper のトラブルシューティングによく使用されるツールについて説明します。

トラブルシューティングの準備

ここでは、GateKeeper のトラブルシューティングの前に実行または確認する必要がある事項について説明します。

デバッグ情報の取得

クライアント、サーバー、および Gatekeeper のプロパティを設定することで、包括的なデバッグ情報を取得できます。下の表に、関連する設定と、それらがクライアント、サーバー、および Gatekeeper のどれに適用されるかを示します。プロパティは、それぞれのプロパティファイルで設定します。

ログレベルには、数値とそれに対応するテキスト値があり、どちらかを使って状況が説明されます。レベル 4 以上は、デバッグの対象になります。次の表に、ログレベルの値を示します。

表 6.1 ログレベル

ログレベル値	説明
0 もしくは EMER	システムを使用できません。異常な状態です。
1 もしくは ALERT	すぐに修復が必要な状態です。たとえば、システムのデータベースが損傷した場合です。
2 もしくは CRIT	重大な状態です。たとえば、ハードデバイスにエラーが発生した場合です。
3 もしくは ERR	エラーが発生しています。
4 もしくは WARNING	認証の問題による接続障害などの警告状態です。たとえば、不正なパスワードを入力したり、承認が失敗した場合です。これはデフォルトです。
5 もしくは NOTICE	重大な状態ではありませんが、環境設定の変更が必要になる場合があります。

表 6.1 ログレベル（続き）

ログレベル値	説明
6 or INFO	サーバーに対して要求された特定のメソッドに対するすべてのユーザーアクセスなどの情報です。
7 or DEBUG	開発者だけが理解していればよいデバッグ情報です。これらのメッセージは国際化されません。

次の表に、GateKeeper のデバッグに役立つプロパティ設定を示します。

表 6.2 デバッグのプロパティ

プロパティ	説明	プロパティファイルでの設定対象
vbroker.orb.logger.output=<filename>	ログファイル ログが記録されるファイル名を指定します。 指定しない場合、デフォルトは gkdebugfile.log になります。 ログ情報を stdout に送ることもできます。	サーバー、クライアント、Gatekeeper
vbroker.orb.bufferDebug=true	ORB ORB が使用するバッファを表示するように内部バッファマネージャに指示します。	サーバー、クライアント、Gatekeeper
vbroker.orb.debug=true	ORB ORB のデバッグ情報を表示します。	サーバー、クライアント、Gatekeeper
vbroker.orb.warn=<warning level>	ORB ORB が表示する警告の特定のレベルを指定します。0, 1, 2 のいずれかを指定できます。レベル 2 では、すべてのレベルの警告が表示されます。	サーバー、クライアント、Gatekeeper
vbroker.orb.logLevel=<loglevel>	ORB ログレベルは、上記のいずれかの値になります。	サーバー、クライアント、Gatekeeper
vbroker.orb.logger.appName=<Application Name>	ORB ログに表示されるアプリケーション名を指定します。	サーバー、クライアント、Gatekeeper
vbroker.events.debug=true	イベントサービス イベントサービスの診断メッセージを表示します。	イベントサービス
vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.gatekeeper.trace.Inityvbroker.gatekeeper.trace.demo=true	GateKeeper GateKeeper の組み込みのトレース機能によるトレース情報を表示します。	GateKeeper
vbroker.agent.debug=true	GateKeeper とスマートエージェント GateKeeper とスマートエージェントとの間の対話のデバッグ情報を表示します。	GateKeeper
vbroker.locationservice.debug=true	ロケーションサービス ロケーションサービスのデバッグ情報を表示します。	サーバー、クライアント、Gatekeeper
vbroker.URLNaming.debug=true	URLNaming ORB ランタイムにロードされた URLNaming サービスのデバッグ情報を表示します。この設定は、正しい IOR が取得されたかどうかを検出するときに使用されます。	サーバー、クライアント、Gatekeeper
vbroker.poa.logLevel=emerg	POA POA のデバッグ情報を表示します。GateKeeper には、外部、内部、および iiop_tp の POA があります。	サーバーおよび Gatekeeper のサーバー側

表 6.2 デバッグのプロパティ (続き)

プロパティ	説明	プロパティファイルでの設定対象
<code>vbroker.gatekeeper.passthru.logLevel=<emerg></code>	パススルー Gatekeeper のパススルーモードのデバッグ情報を表示します。	GateKeeper
<code>vbroker.security.logLevel=<logLevel></code>	セキュリティサービス Gatekeeper の SSL などのセキュリティサービスのログ情報を表示します。	GateKeeper

デバッグモードの GateKeeper の起動

上記のプロパティに加えて、`gatekeeper` や `vbj` のコマンドラインユーティリティを使用し、起動時にほかの環境設定情報やパラメータ設定情報を出力できます。`-VBJdebug` オプションを使用すると、この情報が出力されます。次の表に、デバッグコマンドの例を示します。

表 6.3 デバッグモードでの起動

コンポーネント	コマンドラインオプションの例
サーバー	<code>vbj -VBJdebug -DORBpropStorage=server.prop Server</code>
GateKeeper	<code>gatekeeper -VBJdebug -J-Dvbroker.orb.debug=true -J-Dvbroker.orb.logLevel=7 -props gk.prop</code>
クライアント	<code>vbj -VBJdebug -DORBpropStorage=client.prop Client</code>

メモ `-VBJdebug` オプションは、`gatekeeper`、`vbj` の各コマンドにだけ作用します。このオプションは、上記の診断プロパティの設定とは関係ありません。`-VBJdebug` オプションを使用するかどうかに関係なく、診断プロパティを使用すると同じ内容が出力されます。

環境設定

Gatekeeper は、起動時に環境変数を読み取ります。Windows では、レジストリの設定も読み取られます。UNIX および Windows での設定の優先順位は、次のとおりです。

- 1 コマンドライン
- 2 プロパティファイル
- 3 環境設定
- 4 レジストリ設定 (Windows のみ)
- 5 システムデフォルト設定 (Windows のみ)

次の表は、Gatekeeper でよく使用される環境変数の一覧です。

表 6.4 よく使用される GateKeeper の環境変数

環境変数	説明
CLASSPATH	<p>CLASSPATH には、Java 開発者キットと Java サブレット開発者キットのディレクトリを指定してください。具体的には、CLASSPATH に <code>javax.servlet.jar</code> を追加します。たとえば、Windows NT の DOS プロンプトで、次のように入力します。</p> <pre>set CLASSPATH=C:\visibroker\lib\tomcat\common\javax.servlet.jar;c:\bes\jdk\jdk1.4.1\lib</pre> <p>クラスパスに複数のバージョンの JDK が含まれている場合は、互換性の問題が発生する可能性があります。</p>
JAVA_HOME	<p>Java のホームディレクトリを指定します。CLASSPATH 環境変数に Java ディレクトリが定義されていない場合、システムはこのディレクトリから Java ライブラリを検索します。</p> <p>メモ: UNIX システムでは、この変数を設定する必要があります。Windows システムでは、レジストリに事前に設定されます。</p>
JDK_HOME	<p>JDK のホームディレクトリを指定します。CLASSPATH 環境変数に Java ディレクトリが定義されていない場合、システムはこのディレクトリから Java ライブラリを検索します。</p> <p>メモ: UNIX システムでは、この変数を設定する必要があります。Windows システムでは、レジストリに事前に設定されます。</p>
PATH	<p>PATH 環境変数は VisiBroker のインストール時に自動的に設定されます。この変数に、Gatekeeper が存在するディレクトリを追加する必要があります。たとえば、Windows のコマンドプロンプトで、次のように入力します。</p> <pre>set PATH = c:\bes\vbroker\bin</pre>
VBROKERDIR	<p>Gatekeeper 配布のホームディレクトリを指定します。VBROKERDIR は、VisiBroker の bin ディレクトリではなく、VisiBroker ディレクトリを指すことに注意してください。PATH 環境変数に <code>%VBROKERDIR%\bin</code> が含まれていることを確認します。</p>
BES_HOME	<p>使用されていません。BES_HOME に変更されました。</p>
OSAGENT_PORT	<p>スマートエージェントとの通信に使用するポートを指定します。適切なスマートエージェントがこのポートを監視し、Gatekeeper がこのポートとホストに接続できるように設定してください。</p>
BES_LIC_DIR	<p>ライセンスデータファイルが存在するディレクトリのパスを指定します。</p>

トラブルシューティングツール

次の表で、Gatekeeper のトラブルシューティングに役立つツールについて説明します。

表 6.5 GateKeeper のトラブルシューティングツール

名前	説明
osfind (Windows および UNIX)	<p>VisiBroker に付属します。指定されたスマートエージェントドメインに登録されているすべてのオブジェクトを検索し、エージェントに通知されている情報を表示します。通常、スマートエージェントはサブネットに制限されます。</p>
printior (Windows および UNIX)	<p>VisiBroker に付属します。IOR にエンコードされているすべての情報を人が読み取ることができる形式で出力します。</p>
ping (Windows および UNIX)	<p>TCP/IP ネットワークツールセットの一部として、通常はオペレーティングシステムに付属しています。パケットがリモートホストから現在のホストに戻される場所の判定に使用します。また、ファイアウォール構成を検証する際にも使用できます。</p>
tracert (Windows) traceroute (UNIX)	<p>TCP/IP ネットワークツールセットの一部として、一部のオペレーティングシステムと一緒に配布されます。データパケットが送信先ホストに到達するまでのルートまたはパスを出力します。これは、ルーターによるパケットの転送中にエラーが発生した場所を示すため、ファイアウォールに関する問題の特定に有効です。</p>

表 6.5 GateKeeper のトラブルシューティングツール

名前	説明
route (Windows および UNIX)	TCP/IP ネットワークツールセットの一部として、一部のオペレーティングシステムと一緒に配布されます。ルーティングテーブルを出力します。ファイアウォールを構成する際に便利です。
netstat (Windows および UNIX)	TCP/IP ネットワークツールセットの一部として、一部のオペレーティングシステムと一緒に配布されます。これは、プロトコルの統計情報と TCP/IP ネットワークの接続状況を表示します。接続の状態とポートの有効性を確認する際に便利です。
nslookup (Windows および UNIX)	TCP/IP ネットワークツールセットの一部として、一部のオペレーティングシステムと一緒に配布されます。これは、インターネットドメインのネーミングサーバーにホスト名マッピングを照会します。
vregedit (Windows)	Borland から提供されています。これは、Borland 製品に関連する Windows レジストリのエントリを編集します。
regedit (Windows)	Microsoft Windows オペレーティングシステムに付属していません。Windows レジストリを編集できます。

コンピュータネットワークに関する情報の取得

Gatekeeper を正しく設定するには、コンピュータネットワークについての知識が必要です。Gatekeeper やファイアウォールまたはネットワーク自体の誤った設定によって発生する問題を特定するには、ネットワーク管理者との協力が必要です。ルーターやファイアウォールの設定が正しくないために問題が発生することはよくあります。

最初に、ネットワーク図、ファイアウォールポリシー、ルーティングテーブル、パケットフィルタ、および基本 TCP/IP スタックサーバーの場所と設定について理解する必要があります。通常、ネットワーク内の物理的な配線とコンポーネントが記載された論理ネットワーク図は、ネットワーク管理者が保管しています。GateKeeper の配布プランを作成する際は、このネットワーク図を分析および理解することから始めることをお勧めします。

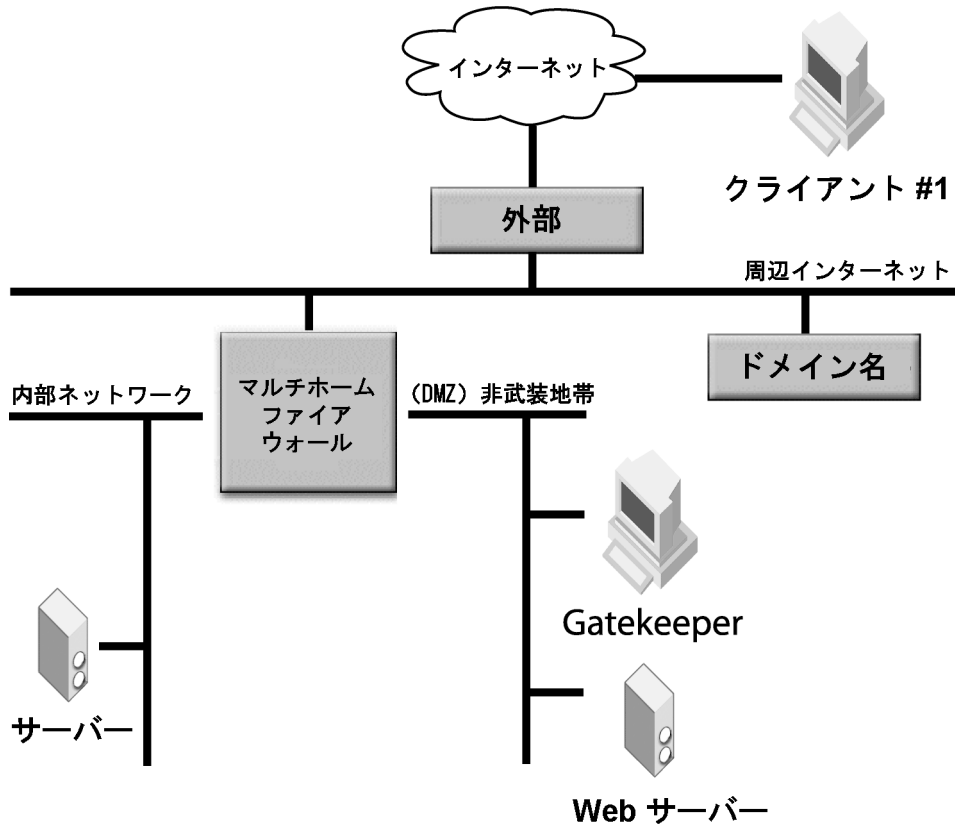
次に、設定されているファイアウォールポリシーを理解する必要があります。ファイアウォールポリシーと物理ネットワーク図を理解することで、クライアントアプリケーションからサーバーに、またはその逆方向にメッセージがさまざまなネットワークを通過して到達できるかどうかを判断できます。また、この情報から、GateKeeper を配布する必要がある場所を特定できます。これにより、GateKeeper の設定に関するトラブルシューティングに必要な時間が大幅に短縮されます。

外部ルーターは、インターネットと周辺ネットワークの間でパケットを転送します。また、外部ルーターのプログラミングにより、インターネットから周辺ネットワークに入るプロトコルを制限することもできます。この追加情報は、ファイアウォールポリシーにだけあります。ルートが正しく設定されていない場合、パケットは、間違った送信先に転送されるか無視されます。ルーティングテーブルやファイアウォールポリシーに変更があった場合は、ネットワーク管理者が開発者に通知する必要があります。

マルチホームファイアウォールは、パケットをフィルタリングし、周辺ネットワークから内部ネットワークや DMZ にパケットを転送します。また、内部ネットワーク内の真の IP アドレスを偽の IP アドレスに変換/逆変換する、ネットワークアドレス変換も行います。

次の図は、3 つのサブネット（周辺インターネット、DMZ、内部ネットワーク）の物理的な配線を示すネットワーク図の例です。

図 6.1 典型的なネットワーク図の例



- 外部ルーターは、インターネットと周辺インターネットとの間でパケットを転送します。また、外部ルーターのプログラミングにより、インターネットから周辺インターネットに入るプロトコルを少数に制限することもできます。この追加情報は、ファイアウォールポリシー（ルーティングテーブル）にだけあります。
- マルチホームファイアウォールは、パケットをフィルタリングし、周辺インターネットから 2 つのサブネット（内部ネットワークと DMZ）にパケットを転送します。また、内部ネットワーク内の真の IP アドレスを偽の IP アドレスに変換／逆変換する、ネットワークアドレス変換も行います。

メモ 上の図は、ネットワーク設定の 1 つの例にすぎません。そのため、GateKeeper を配布する前に、このような情報をどこから入手できるかを調べるのが重要です。

基本的な確認項目

Gatekeeper はプロキシのように動作し、問題はクライアント、Gatekeeper、またはサーバーで発生します。Gatekeeper が適切に動作しない場合の基本的な確認項目を次に示します。以下の確認項目は包括的なものではなく、重要度や実用度の順には並んでいません。これらは、基本的なトラブルシューティングのガイドラインとして提供されています。

スマートエージェントのチェック

Gatekeeper は、スマートエージェントを使ってサーバーオブジェクトを検索します。また、ネットワーク上のスマートエージェントを自動的に検索できます。スマートエージェントがサーバーオブジェクトを検出できなかったり、GateKeeper がスマートエージェン

トを自動的に検索できなかった場合は、次のいずれかの方法でスマートエージェントのトラブルシューティングを実行します。

- 前述の環境変数設定を確認します。
- 次のように、デバッグモードでスマートエージェントを起動します。
osagent -v
- GateKeeper がインストールされている場所から到達できるすべてのスマートエージェントを探します。osfind コマンドを使用できます。
- IP アドレスとポートがクライアント、Gatekeeper, およびサーバーで正しく設定されているかどうかを確認します。

プロパティファイルのチェック

クライアント、サーバー、および Gatekeeper のプロパティファイルの中の設定を確認します。よくある失敗は、ポートアドレスとホストアドレスの設定の誤りです。

ルーティングテーブルのチェック

マルチホームホストにより、接続されたネットワーク間で通信を行うことができます。マルチホームホストがデータパケットをあるネットワークから別のネットワークにルーティングするには、ホストでルーティングテーブルを正しく設定する必要があります。ルーティングテーブルがデータを正しく送信できない場合は、次の方法でこのプログラムのトラブルシューティングを実行できます。

- route print と traceroute を使用して、ルーティングテーブルを確認します。通信障害の場所を特定し、ルーティングテーブルを正しく設定します。
- ping や tracert などのツールを使用して、通信パスを調査および確認します。

パススルー接続のチェック

次のいずれかの方法で、パススルー接続が正しく設定されているかどうかを確認できます。

- Gatekeeper をパススルーモードで使用している場合は、Gatekeeper に対して次のプロパティを正しく設定する必要があります。

```
vbroker.gatekeeper.passthru.inPortMin
vbroker.gatekeeper.passthru.inPortMax
vbroker.gatekeeper.passthru.outPortMin
vbroker.gatekeeper.passthru.outPortMax
```

inPortMin プロパティと *inPortMax* プロパティを使用して、クライアントが GateKeeper との接続に使用するポートの範囲を指定します。したがって、クライアントは、ファイアウォールを通過してこれらのポートに接続する必要があります。

同様に、*outPortMin* プロパティと *outPortMax* プロパティを使用して、GateKeeper がサーバー側ネットワークとの接続に使用するポートの範囲を指定します。したがって、Gatekeeper は、ファイアウォールを通過してサーバー上のこれらのポートに接続する必要があります。

- 着信先に接続できるかどうかを確認するには、ping, tracert, traceroute, route などのツールを使用します。

Java ポリシーのチェック

クライアントが Java プラグインを使用するアプレットの場合は、次のプロパティを java.policy ファイルに追加してください。これらの設定を JRE の java.policy ファイルに指定しないと、セキュリティ例外が発生することがあります。これらのプロパティはク

クライアントの設定であり、「111.222.333.444:25001」は、GateKeeper のホストと HIOP ポートの IP アドレスとポートです。

```
grant codeBase "http://192.73.8.25:25001/*" {
    permission java.lang.reflect.ReflectPermission "suppressAccessChecks";
    permission java.io.SerializablePermission "enableSubclassImplementation";
    permission java.lang.RuntimePermission "accessDeclaredMembers";
};
```

SSL のチェック

SSL を使用する場合は、クライアント (Web ブラウザ)、サーバー、および Gatekeeper に証明書が正しくインストールされているかどうかを確認します。セキュリティの詳細と Borland Security Service の使用方法については、Borland Enterprise Server の『開発者ガイド』を参照してください。

IOR ファイルのチェック

IOR ファイルの内容を確認するには、次の操作を実行します。

- クライアント、GateKeeper、またはサーバーで `vbroker.URLNaming.debug` プロパティを設定して、どの IOR ファイルが取得されるかをトレースします。
- `printior` コマンドで IOR ファイルの内容を出力します。

ファイアウォール設定のチェック

ファイアウォール設定は、問題が最も発生しやすい設定です。

- [20 ページの「ファイアウォールの設定」](#) および [第 6 章「GateKeeper のトラブルシューティング」](#) を参照してください。
- ファイアウォールの制約について理解するために、ネットワーク管理者と緊密に協力して作業してください。
- NAT (ネットワークアドレス変換) の設定を確認します。

一般的なエラーと FAQ

- 1 よく寄せられる質問 (FAQ) は、Borland Web サイトで「VisiBroker Gatekeeper FAQs」として包括的に管理されています。詳細については、このリストを参照してください。
- 2 プロパティの設定時のエラーは、プロパティ名のスペルミスが原因でよく発生します。たとえば、「vbroker」を「vroker」と入力してしまうなどです。また、Windows の一部のワードプロセッサは、行の最初の文字を自動的に大文字に変更してしまいます。そのため、vbroker が Vbroker になり、無効になることがあります。
- 3 IP アドレスやポートが不正またはすでに使用されている場合は、Socket Binding エラーが発生することがあります。次の表に、一般的なエラーを示します。

表 6.6 一般的な Socket Binding エラー

エラーメッセージ	エラーの種類	ソリューション
"Bind Exception: Cannot assign requested address"	Wrong IP Address	IP アドレスまたはポートを修正します。
"Bind Exception: Address in use"	IP port already in use	IP アドレスまたはポートを修正します。
"Invalid GIOP Proxy ior: Communication Problem"	Wrong IP Address	IP アドレスまたはポートを修正します。

表 6.6 一般的な Socket Binding エラー

エラーメッセージ	エラーの種類	ソリューション
"Invalid GIOP Proxy ior: Connect Exception"	Wrong Port Address	IOR ファイル (プロパティファイル) 内の IP アドレスを修正します。
"Invalid GIOP Proxy ior: Invalid Object Ref, File Not Found Exception"	Wrong IOR Name	間違っているリファレンス IOR ファイル名を修正します。

プロキシサーバーと GateKeeper

GateKeeper を HTTP プロキシサーバーと組み合わせて使用できます。これらのプロキシサーバーは、GateKeeper に HTTP トンネリング機能を提供するために HIOP プロトコルによって使用されます。

通常、最新のファイアウォール製品には、HTTP 通信を処理する機能が組み込まれています。一部のファイアウォールには HTTP プロキシサーバーが組み込まれています (Microsoft の ISA Server など)。ほかのファイアウォールは、HTTP メッセージを HTTP プロキシサーバーに転送します。これらのプロキシサーバーは、専用のメカニズムで負荷分散を実行できます。また、キャッシュ技術を使ってパフォーマンスを向上させている HTTP プロキシサーバーもあります。GateKeeper は、そのメッセージに対して HTTP プロキシサーバーのキャッシュ機能を無効にするように要求します。

HTTP プロキシサーバーを GateKeeper と組み合わせて使用する場合、HTTP プロキシサーバーはパケットを転送するため、GateKeeper に対して NAT デバイスのように動作します。GateKeeper は HTTP プロキシサーバーの背後に隠されます。そのため、プロキシホストのプロパティまたは TCP ファイアウォールのプロパティを設定して、HIOP の偽ホスト/ポートを指定することが重要です。

付録 A

GateKeeper プロパティ

この付録で説明するプロパティは、サーバー上のプロパティ設定である [78 ページ](#) の「サーバーのファイアウォール仕様に関するプロパティ」で説明されているものを除いて、GateKeeper で設定するプロパティです。

メモ 表の「デフォルト/オプション」欄では、次の表記規則を使用しています。

- オプションは太字で表します。例：**gatekeeper.ior**
- < 空 > は空白または空の文字列です。
- アングルブラケット (<>) で囲まれたオプションは、ユーザーが指定する値です。
例：< ポート番号 >, < 整数値 >

一般プロパティ

次の表は、GateKeeper でよく使用されるプロパティの一覧です。

プロパティ	デフォルト/ オプション	説明
<code>vbroker.gatekeeper.name</code>	null - 名前の定義なし。 <ユーザー定義名>	ほかの GateKeeper インスタンスと区別するために、GateKeeper インスタンスの名前を指定します。
<code>vbroker.gatekeeper.referenceStore</code>	gatekeeper.ior - GateKeeper の現在のディレクトリ内。< 相対パス名 > < フルパス名 >	Gatekeeper IOR ファイルの名前を指定します。このファイルが Gatekeeper の現在のディレクトリに格納されていない場合は、そのファイルが存在する場所のフルパスを定義します。
<code>vbroker.gatekeeper.locationService</code>	true - 有効 false - 無効	GateKeeper を使用するロケーションサービスを有効または無効にします。このサービスは、スマートエージェント (OSAgent) と通信してバインドを行うことができないクライアント (アプレットなど) に提供されます。このプロパティが false の場合、クライアントは GateKeeper を介したバインド操作時に NO_PERMISSION 例外を受け取ります。
<code>vbroker.gatekeeper.cache.size</code>	64 (デフォルト) 1 - キャッシュは無効。 0 - キャッシュサイズが無制限。	GateKeeper のキャッシュサイズを定義します。

プロパティ	デフォルト/ オプション	説明
<code>vbroker.gatekeeper.cache.timeout</code>	900。 < 整数値 >	キャッシュに情報を保存しておく時間を秒単位で指定します。この時間が経過しても使用されない情報は、回収されます。
<code>vbroker.gatekeeper.asynchronizedIO</code>	false (デフォルト) - 有効 true - 無効	GateKeeper の非同期化 IO 機能を有効または無効にします。非同期化 IO 機能は、サーバー上のメソッドの呼び出しに時間がかかり、新しい着信クライアントが多数ある場合にだけ便利です。通常は、この機能を有効にしても何も利点はありません。この機能は、主に過去に使用されていたという理由で存在するだけです。使用はお勧めできません。

外部サーバーエンジン

次の表は、**GateKeeper** のクライアント側またはインターネット側にある外部サーバーエンジンで使用するプロパティの一覧です。ただし、重要なプロパティのほとんどは、各サーバー接続マネージャ (SCM) で定義します。SCM のプロパティについては、後で説明します。

プロパティ	デフォルト値	説明
<code>vbroker.se.exterior.scms</code>	ex-iiop,ex-hiop - 使用中の ex-iiop および ex-hiop サーバー接続マネージャ。 ex-iiop, ex-hiop, ex-ssl, ex-hiops をカンマで区切ったリストも有効。	外部サーバーエンジンのサーバー接続マネージャを定義します。
<code>vbroker.se.exterior.host</code>	null - プライマリホストを使用。これは、プライマリネットワークインターフェースカード (NIC) の IP アドレスです。 < ホストアドレス >	外部ホストのホストアドレス。プライマリ NIC は外部 NIC です。このプロパティは、 Gatekeeper の <Basic Properties> パネルで設定できます。
<code>vbroker.se.exterior.proxyHost</code>	< 空 > - プロキシホストなし。 < 偽ホストアドレス >	ネットワークアドレス変換 (Network Address Translation, NAT) デバイスは、IP パケット内の IP アドレスやポート番号を変更することで、ネットワーク内の実際の IP アドレスやポート番号を隠します。この値は、NAT によって定義された値に設定します。コールバックを有効にし、 GateKeeper が NAT の後ろにある場合は、コールバックプロキシホスト (<code>vbroker.gatekeeper.backcompat.callback.proxyHost</code>) でもこのプロパティを同じく設定してください。このプロパティは、 Gatekeeper が NAT の後ろにある場合に使用します。このプロパティは、 VisiBroker コンソールの <Basic Properties> パネルでも設定できます。
<code>vbroker.se.exterior.type</code>	gatekeeper	この設定は、外部サーバーエンジンが「プロキシ」の役割を果たしていることを表します。つまり、このサーバーエンジン上では、パケット/メッセージ転送機能が有効です。この設定は変更しないでください。

ex-hiop サーバー接続マネージャ (SCM) のプロパティ

Java **ex-hiop** サーバー接続マネージャは、外部サーバーエンジンにおける HTTP 要求への応答を管理します。リスナーおよびディスパッチャのプロパティは、どちらも `vbroker.scm.exterior.ex-hiop` で始まるプロパティで設定します。

次の `vbroker.se.exterior.scm.ex-hiop` プロパティは、**ex-hiop** リスナーの動作を指定します。**ex-hiop** リスナーは **HIOP** リスナーです。デフォルトポートは 8088 です。スレッドポリシーは `ThreadSession` に設定します。

メモ **SCM** に関係のあるプロパティは、いずれも接頭辞 `vbroker.se.<サーバーエンジン名>.scm.<サーバー接続マネージャ名>` で定義します。

一部の SCM には追加のプロパティが定義されていますが、特にスレッドや接続に関連するプロパティは、すべての SCM で同じ名前です。

プロパティ	デフォルト値	説明
vbroker.se.exterior.scm.ex-hiop.root	. <ファイルディレクトリのフルパス>	デフォルトのルートディレクトリを設定します。 デフォルトディレクトリは、Gatekeeper が起動するディレクトリです。
vbroker.se.exterior.scm.ex-hiop.dispatcher.type	ThreadSession	ex-hiop scm 要求のディスパッチャの種類を指定します。 この種類は、必ず「ThreadSession」に設定してください。
vbroker.se.exterior.scm.ex-hiop.listener.port	8088 <ポート番号>	GateKeeper のクライアント側 (外部) HIOP リスナーのデフォルトリスナーポートを設定します。クライアントのアプリケーションやアプレットの HTTP トンネリングのサポートなどに、このポートを使用します。このポートは、Gatekeeper IOR ファイルの取得など、標準の HTTP 要求のために限定的に使用することもできます。
vbroker.se.exterior.scm.ex-hiop.listener.proxyPort	<empty> <偽ポート番号>	proxyPort プロパティは、一般にはサーバーエンジンの proxyHost プロパティと組み合わせて使用し、このリスナーの監視対象ポートを隠します。このプロパティを設定すると、Gatekeeper の IOR ファイルによって、proxyPort の値がこのリスナーのエンドポイント情報に追加されます。 その後で、外部 NAT デバイスが、proxyPort をリスナーの真のポートに対応付けます。デフォルトは <empty> で、その場合、機能は無効です (リスナーポートのマスクなし)。
vbroker.se.exterior.scm.ex-hiop.listener.type	HIOP	ex-hiops SCM のリスナーの種類を指定します。 HIOP は、現在のリスナーが、HIOP プロトコルだけでなく、HTTP トンネリングに使用される Borland 独自の HIOP プロトコルもサポートすることを表すことを指定します。ex-hiop など、あらかじめ設定されているサーバー接続マネージャのリスナーの種類は変更しないでください。
vbroker.se.exterior.scm.ex-hiop.manager.connectionMax	0 - 着信接続は無制限 <整数値>	Gatekeeper の外部 HIOP リスナーが受け取ることができる着信接続の最大数を定義します。
vbroker.se.exterior.scm.ex-hiop.manager.connectionMaxIdle	0 <整数値>	非アクティブな接続を閉じるまでの時間を秒単位で指定します。
vbroker.se.exterior.scm.ex-hiop.manager.type	Socket	サーバー接続マネージャのタイプを指定します。
vbroker.se.exterior.scm.ex-hiop.servletList	orb	使用するサーブレットクラス型です。
vbroker.se.exterior.scm.ex-hiop.servlet.orb.GET	true - 有効 false - 無効	サーブレットの GET オペレーションを有効または無効にします。 ORB は定義済みのプロパティであることに注意してください。
vbroker.se.exterior.scm.ex-hiop.servlet.orb.PUT	true - 有効 false - 無効	サーブレットの PUT オペレーションを有効または無効にします。 ORB は定義済みのプロパティであることに注意してください。

プロパティ	デフォルト値	説明
vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.servlet.orb.class	com.inprise.vbroker.HIOP.servlets.ORBServlet	Gatekeeper をサーブレットとして使用する場合に HIOP 用にロードされる Java クラスを指定します。このプロパティは別の値に変更しないでください。
vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.servlet.orb.load	false - 無効 true - 有効	サーブレットの Load オペレーションを有効または無効にします。ORB は定義済みのプロパティであることに注意してください。

ex-iiop サーバー接続マネージャ (SCM) のプロパティ

ex-iiop サーバー接続マネージャは、外部サーバーエンジンにおける IIOP 要求への応答を管理します。リスナーおよびディスパッチャのプロパティは、vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop で始まるプロパティを使って設定できます。次の vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop プロパティは、ex-iiop リスナーの動作を指定します。ex-iiop リスナーは IIOP リスナーです。

プロパティ	デフォルト値	説明
vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.dispatcher.threadMax	100 < 整数値 >	サーバー接続マネージャが作成できるスレッドの最大数を指定します。
vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.dispatcher.threadMaxIdle	300 < 整数値 >	アイドル状態のスレッドが破棄されるまでの時間を指定します。デフォルトは 300 です。
vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.dispatcher.threadMin	0 < 整数値 >	サーバー接続マネージャが作成できるスレッドの最小数を指定します。
vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.dispatcher.type	ThreadPool	ex-iiop scm のディスパッチャタイプを指定します。
vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.listener.giopVersion	1.2	GIOP メッセージによって使用される GIOP バージョンを設定します。このプロパティでは、GIOP の未知のマイナーバージョンを正しく処理できない古いバージョンの ORB で発生する相互運用性の問題を解決します。
vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.listener.port	683 < ポート番号 >	Gatekeeper のクライアント側 IIOP リスナーのデフォルトリスナーポートを設定します。ポート 683 は、IIOP の OMG 標準であり、IANA に登録されているため、配布されたアプリケーションの推奨設定です。 UNIX: UNIX プラットフォームでのデフォルトのリスナーポート番号は、特権ユーザー用に予約されている 0 から 1024 の範囲です。非特権ユーザーとして使用する場合は、必要に応じて、リスナーポートを 1024 より大きな値に設定できます。
vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.listener.proxyPort	< 空 > - プロキシポート機能が無効。 これは、機能が無効であることを示します (リスナーポートは隠されない)。 < 偽ポート番号 >	プロキシホスト名のプロパティとともに使用されるプロキシポート番号を定義します。
vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.listener.type	IIOP	ex-iiop scm のリスナーの種類を指定します。
vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.manager.connectionMax	0 - 着信接続は無制限 < 整数値 >	Gatekeeper の外部 IIOP リスナーが受け取ることができる着信接続の最大数を定義します。

プロパティ	デフォルト値	説明
vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.manager.connectionMaxIdle	0 < 整数値 >	非アクティブな接続を閉じるまでの時間を秒単位で指定します。
vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.manager.type	Socket	サーバー接続マネージャのタイプを指定します。 現在は、「Socket」だけを指定できません。

ex-hiops サーバー接続マネージャ (SCM) のプロパティ

Java ex-hiops サーバー接続マネージャは、外部サーバーエンジンにおける HTTPS 要求への応答を管理します。リスナーおよびディスパッチャのプロパティは、どちらも `vbroker.scm.exterior.ex-hiops` で始まるプロパティで設定します。

次の `vbroker.se.exterior.scm.ex-hiops` プロパティは、`ex-hiops` リスナーの動作を指定します。`ex-hiops` リスナーは `HIOPS` リスナーです。デフォルトポートは 8089 です。スレッドポリシーは、常に `ThreadSession` です。

プロパティ	デフォルト値	説明
vbroker.se.exterior.scm.ex-hiops.root	. < ファイルディレクトリのフルパス >	デフォルトのルートディレクトリを設定します。 デフォルトディレクトリは、 <code>Gatekeeper</code> が起動するディレクトリです。
vbroker.se.exterior.scm.ex-hiops.dispatcher.type	ThreadSession	<code>ex-hiops scm</code> 要求のディスパッチャの種類を指定します。 この種類は必ず「 <code>ThreadSession</code> 」に設定してください。
vbroker.se.exterior.scm.ex-hiops.listener.port	8089 < ポート番号 >	<code>Gatekeeper</code> のクライアント側(外部) <code>HIOPS</code> リスナーのデフォルトリスナーポートを設定します。クライアントのアプリケーションやアプレットは、 <code>HTTPS</code> トンネリングのサポートなどにこのポートを使用します。 このポートは、 <code>Gatekeeper IOR</code> ファイルの取得など、標準の <code>HTTPS</code> 要求のために限定的に使用することもできます。
vbroker.se.exterior.scm.ex-hiops.listener.proxyPort	<empty> < 偽ポート番号 >	<code>proxyPort</code> プロパティは、一般にはサーバーエンジンの <code>proxyHost</code> プロパティと組み合わせて使用し、このリスナーの監視対象ポートを隠します。 このプロパティを設定した場合、 <code>Gatekeeper IOR</code> ファイルのこのリスナーのエンドポイント情報に、 <code>proxyPort</code> の値が追加されます。その後で、外部 NAT デバイスが、 <code>proxyPort</code> をリスナーの真のポートに対応付けます。デフォルトは <empty> で、その場合、機能は無効です (リスナーポートのマスクなし)。
vbroker.se.exterior.scm.ex-hiops.listener.type	HIOPS	<code>ex-hiops SCM</code> のリスナーの種類を指定します。 <code>HIOPS</code> は、現在のリスナーが、 <code>HIOPS</code> プロトコルだけでなく、 <code>HTTP</code> トンネリングに使用される <code>Borland</code> 独自の <code>HIOPS</code> プロトコルもサポートすることを表すことを指定します。 <code>ex-hiops</code> など、あらかじめ設定されているサーバー接続マネージャのタイプは変更しないでください。

プロパティ	デフォルト値	説明
<code>vbroker.se.exterior.scm.ex-hiops.manager.connectionMax</code>	0 - キャッシュ接続が無制限。 < 整数値 >	Gatekeeper の外部 HIOPS リスナーが使用できるキャッシュ接続の最大数を定義します。
<code>vbroker.se.exterior.scm.ex-hiops.manager.connectionMaxIdle</code>	0 < 整数値 >	非アクティブな接続を閉じるまでの時間を秒単位で指定します。
<code>vbroker.se.exterior.scm.ex-hiops.manager.type</code>	Socket	サーバー接続マネージャのタイプを指定します。
<code>vbroker.se.exterior.scm.ex-hiops.servletList</code>	orb	使用するサーブレットクラス型です。
<code>vbroker.se.exterior.scm.ex-hiops.servlet.orb.GET</code>	true - 有効 false - 無効	サーブレットの GET オペレーションを有効または無効にします。ORB は定義済みのプロパティであることに注意してください。
<code>vbroker.se.exterior.scm.ex-hiops.servlet.orb.PUT</code>	true - 有効 false - 無効	サーブレットの PUT オペレーションを有効または無効にします。ORB は定義済みのプロパティであることに注意してください。
<code>vbroker.se.exterior.scm.ex-hiops.servlet.orb.class</code>	<code>com.inprise.vbroker.HIOP.servlets.ORBServlet</code>	Gatekeeper をサーブレットとして使用する場合に HIOPS 用にロードされる Java クラスを指定します。このプロパティは別の値に変更しないでください。
<code>vbroker.se.exterior.scm.ex-hiops.servlet.orb.load</code>	false - 無効 true - 有効	サーブレットの Load オペレーションを有効または無効にします。ORB は定義済みのプロパティであることに注意してください。

ex-ssl サーバー接続マネージャ (SCM) のプロパティ

ex-ssl サーバー接続マネージャは、外部サーバーエンジンにおける SSL 要求への応答を管理します。リスナーおよびディスパッチャのプロパティは、`vbroker.se-exterior.scm.ex-ssl` で始まるプロパティで設定できます。

次の `vbroker.se.exterior.scm.ex-ssl` プロパティは、ex-ssl リスナーの動作を指定します。ex-ssl リスナーは SSL リスナーです。

プロパティ	デフォルト値	説明
<code>vbroker.se.exterior.scm.ex-ssl.dispatcher.threadMax</code>	100 < 整数値 >	サーバー接続マネージャが作成できるスレッドの最大数を指定します。
<code>vbroker.se.exterior.scm.ex-ssl.dispatcher.threadMaxIdle</code>	300 < 整数値 >	アイドル状態のスレッドが破棄されるまでの時間を指定します。デフォルトは 300 です。
<code>vbroker.se.exterior.scm.ex-ssl.dispatcher.threadMin</code>	0 < 整数値 >	サーバー接続マネージャが作成できるスレッドの最小数を指定します。
<code>vbroker.se.exterior.scm.ex-ssl.dispatcher.type</code>	ThreadPool	ex-iiop scm のディスパッチャタイプを指定します。
<code>vbroker.se.exterior.scm.ex-ssl.listener.port</code>	684 < ポート番号 >	Gatekeeper のクライアント側 SSL リスナーのデフォルトリスナーポートを設定します。ポート 684 は、IIOP の OMG 標準であり、IANA に登録されているため、配布されたアプリケーションの推奨設定です。 UNIX : UNIX プラットフォームでのデフォルトのリスナーポート番号は、特権ユーザー用に予約されている 0 から 1024 の範囲です。非特権ユーザーとして使用する場合は、必要に応じて、リスナーポートを 1024 より大きな値に設定できます。

プロパティ	デフォルト値	説明
vbroker.se.exterior.scm.ex-ssl.listener.proxyPort	<空>-プロキシポート機能が無効。これは、機能が無効であることを示します (リスナーポートは隠されない)。 <偽ポート番号>	プロキシホスト名のプロパティとともに使用されるプロキシポート番号を定義します。
vbroker.se.exterior.scm.ex-ssl.listener.type	SSL	ex-ssl scm のリスナーのタイプを指定します。
vbroker.se.exterior.scm.ex-ssl.manager.connectionMax	0 - キャッシュ接続が無制限。 <整数値>	Gatekeeper の外部 SSL リスナーが使用できるキャッシュ接続の最大数を定義します。
vbroker.se.exterior.scm.ex-ssl.manager.connectionMaxIdle	0 <整数値>	非アクティブな接続を閉じるまでの時間を秒単位で指定します。
vbroker.se.exterior.scm.ex-ssl.manager.type	Socket	サーバー接続マネージャのタイプを指定します。現在は、「Socket」だけを指定できます。

内部サーバーエンジン

次の表は、Gatekeeper のサーバー側またはイントラネット側にある内部サーバーエンジンが使用するプロパティの一覧です。

Gatekeeper がデュアルホームマシンで稼動する場合や Gatekeeper とサーバーの間にネットワークアドレス変換 (NAT) が存在する場合などの特殊な場合には、内部サーバーエンジンのプロパティの一部を設定する必要があります。

プロパティ	デフォルト値	説明
vbroker.se.interior.scms	in-iiop in-hiop in-ssl in-hiops <カンマで区切った上記の組み合わせ>	このプロパティは、サーバーエンジンのサーバー接続マネージャを定義します。デフォルト値は IIOP scm です。ただし、それぞれの scm を指定することで、SSL など、別のタイプのプロトコルを使用することもできます。
vbroker.se.interior.host	Null - プライマリホストを使用。これは、プライマリネットワークインターフェースカード (NIC) の IP アドレスです。 <ホストアドレス>	内部サーバーエンジンのホストアドレス。このプロパティは、VisiBroker コンソールの <Basic Properties> パネルでも設定できます。
vbroker.se.interior.proxyHost	<空>-プロキシポート機能が無効。 <偽ホストアドレス>	GateKeeper とサーバーの間で NAT を実行しており、サーバーホストのアドレスを不可視にする場合に、このプロパティを使用します。このプロパティは、VisiBroker コンソールの <Basic Properties> パネルでも設定できます。

in-iiop サーバー接続マネージャ (SCM) のプロパティ

in-iiop サーバーマネージャは、内部サーバーエンジンにおける IIOP 要求への応答を管理します。リスナーおよびディスパッチャは、vbroker.se.interior.in-iiop で始まるプロパティを使って設定できます。

次の `vbroker.se.interior.scm.in-iiop` プロパティは、`in-iiop` サーバー接続マネージャの動作を指定します。

プロパティ	デフォルト値	説明
<code>vbroker.se.interior.scm.in-iiop.dispatcher.threadMax</code>	100 < 整数値 >	サーバー接続マネージャが作成できるスレッドの最大数を指定します。
<code>vbroker.se.interior.scm.in-iiop.dispatcher.threadMaxIdle</code>	300 < 整数値 >	アイドル状態のスレッドが破棄されるまでの時間を指定します。デフォルトは 300 です。
<code>vbroker.se.interior.scm.in-iiop.dispatcher.threadMin</code>	0 < 整数値 >	サーバー接続マネージャが作成できるスレッドの最小数を指定します。
<code>vbroker.se.interior.scm.in-iiop.dispatcher.type</code>	ThreadPool	<code>in-iiop scm</code> のディスパッチャの種類を指定します。 この種類は必ず「ThreadPool」に設定してください。
<code>vbroker.se.interior.scm.in-iiop.listener.giopVersion</code>	1.2	GIOP メッセージに使用するプロトコルバージョン番号
<code>vbroker.se.interior.scm.in-iiop.listener.port</code>	0 - ランダム番号を選択 < ポート番号 >	ホスト名のプロパティで使用するポート番号を定義します。
<code>vbroker.se.interior.scm.in-iiop.listener.proxyPort</code>	< 空 > - プロキシポート機能が無効。 < 偽ポート番号 >	プロキシホスト名のプロパティとともに使用されるプロキシポート番号を定義します。
<code>vbroker.se.interior.scm.in-iiop.listener.type</code>	IIOP	<code>in-iiop scm</code> のリスナーのタイプを指定します。
<code>vbroker.se.interior.scm.in-iiop.manager.connectionMax</code>	0 - キャッシュ接続が無制限。 < 整数値 >	Gatekeeper IIOP リスナーに使用できるキャッシュ接続の最大数を定義します。
<code>vbroker.se.interior.scm.in-iiop.manager.connectionMaxIdle</code>	0 < 整数値 >	非アクティブな接続を閉じるまでの時間を秒単位で指定します。
<code>vbroker.se.interior.scm.ex-iiop.manager.type</code>	Socket	サーバー接続マネージャのタイプを指定します。 現在は、「Socket」だけを指定できません。

in-ssl サーバー接続マネージャ (SCM) のプロパティ

`in-ssl` サーバーマネージャは、内部サーバーエンジンにおける SSL 要求への応答を管理します。リスナーおよびディスパッチャは、`vbroker.se.interior.in-ssl` で始まるプロパティで設定できます。

次の `vbroker.se.interior.scm.in-ssl` プロパティは、`in-ssl` サーバー接続マネージャの動作を指定します。

プロパティ	デフォルト値	説明
<code>vbroker.se.interior.scm.in-ssl.dispatcher.threadMax</code>	100 < 整数値 >	サーバー接続マネージャが作成できるスレッドの最大数を指定します。
<code>vbroker.se.interior.scm.in-ssl.dispatcher.threadMaxIdle</code>	300 < 整数値 >	アイドル状態のスレッドが破棄されるまでの時間を指定します。デフォルトは 300 です。
<code>vbroker.se.interior.scm.in-ssl.dispatcher.threadMin</code>	0 < 整数値 >	サーバー接続マネージャが作成できるスレッドの最小数を指定します。
<code>vbroker.se.interior.scm.in-ssl.dispatcher.type</code>	ThreadPool	<code>in-iiop scm</code> のディスパッチャの種類を指定します。 この種類は必ず「ThreadPool」に設定してください。
<code>vbroker.se.interior.scm.in-ssl.listener.port</code>	0 - ランダム番号を選択 < ポート番号 >	ホスト名のプロパティで使用するポート番号を定義します。

プロパティ	デフォルト値	説明
vbroker.se.interior.scm.in-ssl.listener.proxyPort	< 空 > - プロキシポート機能が無効。 < 偽ポート番号 >	プロキシホスト名のプロパティとともに使用されるプロキシポート番号を定義します。
vbroker.se.interior.scm.in-ssl.listener.type	SSL	in-ssl scm のリスナーの種類を指定します。
vbroker.se.interior.scm.in-ssl.manager.connectionMax	0 - 着信接続は無制限。 < 整数値 >	Gatekeeper の内部 SSL リスナーが受け取ることができる着信接続の最大数を定義します。
vbroker.se.interior.scm.in-ssl.manager.connectionMaxIdle	0 < 整数値 >	非アクティブな接続を閉じるまでの時間を秒単位で指定します。
vbroker.se.interior.scm.ex-ssl.manager.type	Socket	サーバー接続マネージャのタイプを指定します。 現在は、「Socket」だけを指定できます。

管理のプロパティ

Java 次の表に、管理のプロパティをまとめます。デフォルトリスナーポート番号は 9091 です。

プロパティ	デフォルト/ オプション	説明
vbroker.se.iioptp.host	null - システムのホストアドレスを使用。 < ホストアドレス >	このサーバーエンジンが使用できるホストアドレスを指定します。
vbroker.se.iioptp.ProxyHost	<empty> - システムのホストアドレスを使用。 < プロキシホストアドレス >	このサーバーエンジンが使用できるプロキシホストアドレスを指定します。
vbroker.se.iioptp.scms	iiop_tp, hiop_ts	サーバー接続マネージャの名前の一覧を指定します。
vbroker.se.iioptp.scm.iioptp.listener-port	<empty> < ポート番号 >	IIOP の管理リスナーポートを指定します。
vbroker.se.iioptp.scm.iioptp.listener.proxyPort	<empty> < ポート番号 >	IIOP 管理リスナーポートのプロキシポートを指定します。
vbroker.se.iioptp.scm.hiop_ts.listener.port	9091 < ポート番号 >	Gatekeeper の管理リスナーポートを指定します。
vbroker.se.iioptp.scm.hiop_ts.listener.proxyPort	< 空 > - プロキシポート機能が無効。 < 偽ポート番号 >	HIOP 管理リスナーポートのプロキシポート番号を指定します。
vbroker.se.iioptp.type	normal	管理サーバーエンジンに指定できません。
vbroker.se.iioptp.scm.hiop_ts.servletList	orb	サーブレットのクラスに与えられる仮想名。PUT, GET, LOAD などのほかのプロパティの指定時に使用します。
vbroker.se.iioptp.scm.hiop_ts.servlet.orb.GET	true - 有効 false - 無効	サーブレットの GET オペレーションを有効または無効にします。
vbroker.se.iioptp.scm.hiop_ts.servlet.orb.PUT	true - 有効 false - 無効	サーブレットの PUT オペレーションを有効または無効にします。
vbroker.se.iioptp.scm.hiop_ts.servlet.orb.class	com.inprise.vbroker.HIOP.servlets. ORBServlet	サーブレットクラスの名前。
vbroker.se.iioptp.scm.hiop_ts.servlet.orb.load	true - 有効 false - 無効	サーブレットの Load オペレーションを有効または無効にします。

アクセスコントロール

次の表は、Gatekeeper でセキュリティ制御を設定する場合に使用するプロパティの一覧です。

プロパティ	デフォルト値	説明
vbroker.gatekeeper.security.accessControllers	デフォルト	アクセスコントローラの名前の一覧を指定します。
vbroker.gatekeeper.security.acl.<controllerName>.default	null - デフォルトアクションなし deny - エントリを拒絶 grant - 許可を付与	制御一覧に対するデフォルトの処理を指定します。 <controllerName> を上に指定します。
vbroker.gatekeeper.security.acl.<controllerName>.rules	null - ルールの指定なし。説明を参照	規則のセットの名前を指定します。例を次に示します。 vbroker.gatekeeper.security.accessControllers=default vbroker.gatekeeper.security.acl.default.rules=rule1,rule2,rule3 ここで、 rule1 , rule2 , rule3 はユーザー定義の名前です。
vbroker.gatekeeper.security.acl.<controllerName>.<xx> (<xx> は所定のルール名)	null - アクションの指定なし。その他のオプションについては、説明を参照してください。	指定された規則の特定のプロパティに対するアクションを定義します。定義は次のとおりです。 <deny grant> [operation="<operation name>" [signer by="<signer's company name>" [server host="<hostname>" [client host="<hostname>" [server ip=aa.bb.cc.dd <sub-mask>] [client ip=aa.bb.cc.dd <sub-mask>] [object type="<object type>"]] <deny grant> は、各規則に対するアクションを定義します。 operation="<operation name>" は、IDL に基づくオペレーション名を定義します。 signer by="<signer's company name>" は、署名者の会社名を定義します。 server host="<hostname>" は、サーバーのホスト名を指定します。 client host="<hostname>" は、クライアントのホスト名を指定します。 server ip="<aa.bb.cc.dd>" は、サーバーが存在するマシンの IP アドレスを指定します。 client ip="<aa.bb.cc.dd>" は、クライアントが存在するマシンの IP アドレスを定義します。 object type="<object type>" は、オブジェクトの種類を定義します。 例 vbroker.gatekeeper.security.accessControllers=default vbroker.gatekeeper.security.acl.default.rules=rule1,rule2,rule3 vbroker.gatekeeper.security.acl.default.rule1=grant [operation=¥"*¥" [server host=¥"borland"¥]] vbroker.gatekeeper.security.acl.default.rule2=deny [operation=¥"*¥" [client ip=192.168.100.40 255.255.255.0]] vbroker.gatekeeper.security.acl.default.rule3=deny [operation=¥"*¥" [server host=¥"inprise"¥] [client ip=192.168.100.88 255.255.255.0]] メモ : 太字で示した変数は、ユーザーが定義できます。
vbroker.gatekeeper.security.acl.<controllerName>.type	com.inprise.vbroker.gatekeeper.security.ACImpl	アクセスコントロールのために Gatekeeper によってロードされるインプリメンテーションクラスを指定します。 メモ : この値は変更しないでください。

VisiBroker 3.x スタイルのコールバック

次の表は, VisiBroker 3.x スタイルのコールバックを利用するために VisiBroker 5.x で設定可能なプロパティの一覧です。

プロパティ	デフォルト/ オプション	説明
<code>vbroker.gatekeeper.callback.Enabled</code>	false - 無効 true - 有効	Gatekeeper を介したコールバック機構を有効または無効にします。デフォルトは disabled です。
<code>vbroker.gatekeeper.backcompat.callback</code>	false - 無効 true - 有効	VisiBroker 3.x スタイルのコールバックを有効または無効にします。古いスタイルのコールバックを使用する場合は, 上記のプロパティとこのプロパティの両方を true に設定してください。
<code>vbroker.gatekeeper.backcompat.callback.listeners</code>	iiop ssl	リスナーポートの一覧を指定します。
<code>vbroker.gatekeeper.backcompat.callback.listener.iiop.type</code>	IIOPCallback	IIOP のコールバックリスナーのタイプを指定します。
<code>vbroker.gatekeeper.backcompat.callback.host</code>	< 空 > - 値をプライマリホストの IP アドレスに設定。これは, プライマリ NIC の IP アドレスです。 < ホストアドレス >	コールバックリスナーにバインドするホスト IP アドレスを定義します。
<code>vbroker.gatekeeper.backcompat.callback.proxyHost</code>	< 空 > - プロキシホストを使用しない。 < 偽ホストアドレス >	このプロパティは, 一般にはサーバーエンジンの <code>proxyPort</code> プロパティと組み合わせて使用し, このリスナーの監視対象ポートを隠します。このプロパティを設定した場合, コールバック IOR は, <code>proxyHost</code> の値をこのリスナーのエンドポイント情報に追加します。その後で, ネットワークアドレス変換 (NAT) デバイスが, <code>proxyHost</code> をリスナーの真のポートにマッピングします。デフォルトは < 空 > であり, その場合機能は無効です (コールバック IOR でリスナーポートのマスクなし)。
<code>vbroker.gatekeeper.backcompat.callback.listener.ssl.type</code>	SSLCallback	SSL リスナーのタイプを指定します。
<code>vbroker.gatekeeper.backcompat.callback.listener.ssl.port</code>	0 - ポートをランダムに選択 < ポート番号 >	コールバックリスナーが SSL の監視に使用するポートを定義します。
<code>vbroker.gatekeeper.backcompat.callback.listener.ssl.proxyPort</code>	< 空 > - プロキシポートを使用しない。 < 偽ポート番号 >	このプロパティは, クライアントと Gatekeeper の間に NAT が存在し, NAT が実際の Gatekeeper ホストアドレスを隠す場合に使用します。
<code>vbroker.gatekeeper.backcompat.callback.listener.iiop.port</code>	0 - ポート番号をランダムに選択します。 < ポート番号 >	コールバックリスナーが IIOP を監視するポートを指定します。
<code>vbroker.gatekeeper.backcompat.callback.listener.iiop.proxyPort</code>	< 空 > - プロキシポートを使用しない。 < 偽ポート番号 >	<code>proxyPort</code> プロパティは, 一般にはサーバーエンジンの <code>proxyHost</code> プロパティと組み合わせて使用し, このリスナーの監視対象ポートを隠します。このプロパティを設定した場合, コールバック IOR は, <code>proxyPort</code> の値をこのリスナーのエンドポイント情報に追加します。その後で, ネットワークアドレス変換 (NAT) デバイスが, <code>proxyPort</code> をリスナーの真のポートにマッピングします。デフォルトは < 空 > であり, その場合機能は無効です (コールバック IOR でリスナーポートのマスクなし)。

パフォーマンスと負荷分散

次の表は、クライアントとサーバー間の負荷を分散させ、負荷を監視するためのパフォーマンスプロパティと負荷分散プロパティをまとめたものです。

プロパティ	デフォルト値	説明
<code>vbroker.gatekeeper.load.distributor</code>	com.inprise.vbroker.gatekeeper.ext.RoundRobinDistributor	負荷分散マネージャが使用する分散クラスを指定します。 ディストリビュータのインターフェースの内容をよく理解したユーザーがカスタムディストリビュータを実装する場合を除き、このプロパティを変更しないでください。デフォルトのディストリビュータとして、次のインプリメンテーションクラスが使用されます。(Round Robin): <code>com.inprise.vbroker.gatekeeper.ext.RoundRobinDistributor</code>
<code>vbroker.ce.iiop.ccm.connectionMax</code>	0 - 古いアクティブ接続やキャッシュ接続を閉じない。 < 整数値 >	クライアントごとの接続総数の最大数を指定します。この値は、アクティブな接続の数とキャッシュされた接続の数の合計です。
<code>vbroker.orb.gcTimeout</code>	30 < 整数値 >	使用されていない重要なリソースが消去されるまでの時間を秒単位で指定します。
<code>vbroker.orb.fragmentSize</code>	0	GIOP のフラグメントサイズを指定します。GIOP ストリームのチャンクサイズの倍数を指定する必要があります。
<code>vbroker.orb.streamChunkSize</code>	4096 < 2 の累乗数 >	GIOP メッセージのチャンクサイズを指定します。2 の累乗数を指定してください。参照: ガイドリファレンス
<code>vbroker.orb.bufferCacheTimeout</code>	6000 < 整数値 >	メッセージチャンクをキャッシュしてから破棄するまでの時間をミリ秒単位で指定します。
<code>vbroker.gatekeeper.load.slaves</code>	< 空 > - スレーブ GateKeeper なし < スレーブのリスト > - 説明を参照	このマスター GateKeeper で、負荷分散のためにクラスタリングされるスレーブ GateKeeper の一覧を指定します。 名前の一覧はカンマで区切ります。一覧に含まれる名前ごとに、「 <code>vbroker.GateKeeper.load.slave.<slave_name></code> 」などのプロパティがプロパティファイルに追加されます。このプロパティにデフォルト値はありません。 このプロパティを使用するのは、マスター GateKeeper プロパティだけです。たとえば、 <code>vbroker.gatekeeper.load.slaves=abc,xyz</code> です。 メモ: このプロパティを設定した場合は、対応するライブラリをロードする必要があります。79 ページの「その他の ORB プロパティ」の <code>vbroker.orb.dynamicLibs</code> の説明を参照してください。

プロパティ	デフォルト値	説明
vbroker.gatekeeper.load.slave.<slave_name>	<empty> < 特定のスレーブ IOR> - 説明を参照	このマスター Gatekeeper で負荷を分散させるためにクラスタリングされる特定のスレーブ Gatekeeper を指す IOR または URL を指定します。 メモ: このプロパティを使用するのはマスター Gatekeeper プロパティだけです。例を次に示します。 vbroker.gatekeeper.load.slave.abc=http://host1:9091/Gatekeeper.ior vbroker.gatekeeper.load.slave.xyz=http://host2:9091/Gatekeeper.ior メモ: このプロパティを設定した場合は、対応するライブラリをロードする必要があります。79 ページの「その他の ORB プロパティ」の vbroker.orb.dynamicLibs の説明を参照してください。
vbroker.gatekeeper.load.balancer	<empty> < マスター >	マスター Gatekeeper は負荷分散だけを目的にし、クライアントにサービスを提供しないことを指定します。デフォルトモードでは、マスター自体もスレーブです。つまり、マスターも利用可能な Gatekeeper のリストに含まれ、ほかのスレーブと交代に動作します。 特定の Gatekeeper が利用できなくなると、クライアントはマスターに戻り、かわりに次のスレーブ Gatekeeper (スレーブの 1 つまたはマスター自体) を取得します。 メモ: このプロパティを設定した場合は、対応するライブラリをロードする必要があります。79 ページの「その他の ORB プロパティ」の vbroker.orb.dynamicLibs の説明を参照してください。

双方向通信をサポートするプロパティ

次の表は、双方向通信をサポートするプロパティの一覧です。これらのプロパティは、SCM の作成時に一度だけ評価されます。どの場合も、SCM の exportBiDir プロパティと importBiDir プロパティは、enableBiDir プロパティより優先します。両方のプロパティに相反する値を設定すると、SCM 固有のプロパティが適用されます。そのため enableBiDir プロパティをグローバルに設定したり、SCM で個別に双方向をオフにすることができます。

プロパティ	デフォルト値	説明
vbroker.orb.enableBiDir	サーバーとクライアントの両方なし。 38 ページの「Gatekeeper の双方向サポートによるコールバック」を参照してください。	双方向接続は、選択的に構築できます。クライアントが vbroker.orb.enableBiDir=client と定義し、サーバーが vbroker.orb.enableBiDir=server と定義している場合は、Gatekeeper の vbroker.orb.enableBiDir の値によって接続状態が決定されます。 メモ: SCM 単位で双方向通信を選択的に有効にできるのと同様に、Gatekeeper でも双方向通信を選択的に有効にできます。たとえば、vbroker.se.exterior. scm.ex--iiop.manager.importBiDir プロパティを true に設定すると、Gatekeeper はクライアントからの双方向接続を受け付けます。 vbroker.se.exterior.scm. ex--iiop.manager.exportBiDir プロパティを true に設定すると、Gatekeeper はサーバーとの双方向接続を要求します。

パススルー接続をサポートするプロパティ

メモ パススルー接続をサポートするプロパティは、`vbroker.gatekeeper.enablePassthru` だけです。

プロパティ	デフォルト値	説明
<code>vbroker.gatekeeper.enablePassthru</code>	false - 無効 true - 有効	Gatekeeper のパススルーモードを有効または無効にします。
<code>vbroker.gatekeeper.passthru.blockSize</code>	16384 < 整数値 >	チャンネルがそれぞれの読み取り/書き込みオペレーションで使用するバッファサイズを指定します。値を大きくすると、一度の読み取り/書き込みで大きなメッセージが処理されますが、1つのチャンネルで使用されるリソースが増加します。値を小さくすると、リソースの使用は最適化されますが、何度も読み取り/書き込みが繰り返されるので、パフォーマンスが低下します。
<code>vbroker.gatekeeper.passthru.connectionTimeout</code>	300000 ミリ秒 (5分) < 整数値 >	指定したチャンネルが接続待機を終了してチャンネルを停止するまでの待ち時間をミリ秒単位で指定します。
<code>vbroker.gatekeeper.passthru.inPortMin</code>	1024 < ポート番号 >	<code>vbroker.gatekeeper.passthru.inPortMax</code> と組み合わせて使用します。パススルー受信接続用の内部ポートの範囲の先頭を指定します。
<code>vbroker.gatekeeper.passthru.inPortMax</code>	65535 < ポート番号 >	<code>vbroker.gatekeeper.passthru.inPortMin</code> と組み合わせて使用します。パススルー受信接続用のポートの範囲の末尾を指定します。
<code>vbroker.gatekeeper.passthru.logLevel</code>	0 - ログなし < 整数値 >	パススルーコンポーネントのログのレベルを有効にします。
<code>vbroker.gatekeeper.passthru.outPortMin</code>	0 < ポート番号 >	<code>vbroker.gatekeeper.passthru.outPortMax</code> と組み合わせて使用します。パススルー送信接続用の外部ポートの範囲の先頭を指定します。
<code>vbroker.gatekeeper.passthru.outPortMax</code>	65535 < ポート番号 >	<code>vbroker.gatekeeper.passthru.outPortMin</code> と組み合わせて使用します。パススルー送信接続用の外部ポートの範囲の末尾を指定します。
<code>vbroker.gatekeeper.passthru.streamTimeout</code>	2000 < 整数値 >	確立したチャンネルが閉じられるまでの待ち時間をミリ秒単位で指定します。

セキュリティサービス (SSL) のプロパティ

次の表は、セキュリティサービスで使用されるプロパティの一覧です。

メモ このプロパティを設定した場合は、対応するライブラリをロードしてください。「その他の ORB プロパティ」の `vbroker.orb.dynamicLibs` の説明を参照してください。

プロパティ	デフォルト値	説明
<code>vbroker.orb.alwaysSecure</code>	false - 無効 true - 有効	Gatekeeper がセキュリティで保護された接続をサーバーと確立するかどうかを指定します。参照：リファレンスガイド
<code>vbroker.security.peerAuthenticationMode</code>	説明を参照	詳細については、『セキュリティガイド』の「セキュリティプロパティ (Java)」または「セキュリティ (C++)」セクションを参照してください。

プロパティ	デフォルト値	説明
vbroker.security.trustpointsRepository	説明を参照	詳細については、『セキュリティガイド』の「セキュリティプロパティ (Java)」または「セキュリティ (C++)」セクションを参照してください。
vbroker.security.wallet.identity	説明を参照	詳細については、『セキュリティガイド』の「セキュリティプロパティ (Java)」または「セキュリティ (C++)」セクションを参照してください。
vbroker.security.wallet.password	説明を参照	詳細については、『セキュリティガイド』の「セキュリティプロパティ (Java)」または「セキュリティ (C++)」セクションを参照してください。

ロケーションサービス（スマートエージェント）のプロパティ

次の表は、サーバーオブジェクトを探すためにロケーションサービスで使用されるスマートエージェント (OSAgent) のプロパティの一覧です。

プロパティ	デフォルト値	説明
vbroker.agent.addr	null- 説明を参照	スマートエージェント (OSAgent) が稼動するホストの IP アドレスまたはホスト名を指定します。デフォルト値の null は、VisiBroker アプリケーションに OSAGENT_ADDR 環境変数の値を使用するように指示します。OSAGENT_ADDR 変数が設定されていない場合は、スマートエージェントがローカルホストで稼動しているとみなされるか、ブロードキャストメッセージによって検索されます。詳細については、『VisiBroker for C++ 開発者ガイド』または『VisiBroker for Java 開発者ガイド』の「スマートエージェントの使い方」を参照してください。
vbroker.agent.port	null	使用しているネットワーク内のドメインを定義するポート番号を指定します。VisiBroker アプリケーションとスマートエージェント (OSAgent) のポート番号が同じ場合は、相互が協調して機能します。このプロパティは、OSAGENT_PORT 環境変数と同じです。詳細については、『VisiBroker for C++ 開発者ガイド』または『VisiBroker for Java 開発者ガイド』の「スマートエージェントの使い方」を参照してください。
vbroker.agent.addrFile	null	スマートエージェントの IP アドレスまたはホスト名の情報を格納するファイルを指定します。詳細については、『VisiBroker for C++ 開発者ガイド』または『VisiBroker for Java 開発者ガイド』の「スマートエージェントの使い方」を参照してください。
vbroker.agent.failOver	true false	true に設定した場合は、VisiBroker アプリケーションは、別のスマートエージェントにフェイルオーバーできます。詳細については、『VisiBroker for C++ 開発者ガイド』または『VisiBroker for Java 開発者ガイド』の「スマートエージェントの使い方」を参照してください。
vbroker.agent.enableCache	true false	true に設定した場合は、VisiBroker アプリケーションがオブジェクトリファレンスをキャッシュできます。このプロパティを true に設定すると、サーバー検索時のパフォーマンスは向上しますが、スマートエージェントのラウンドロビンアクティビティは無効になります。詳細については、『VisiBroker for C++ 開発者ガイド』または『VisiBroker for Java 開発者ガイド』の「スマートエージェントの使い方」を参照してください。

VisiBroker 4.x 以前と下位互換性があるプロパティ

Gatekeeper バージョン 5.x は、デフォルトの状態では、VisiBroker 4.x 以前のバージョンで開発されたプログラムと互換性がありません。Gatekeeper バージョン 5.x が VisiBroker 4.x 以前のバージョンで開発されたプログラムで正しく動作するには、次のプロパティを **true** に設定してください。

メモ Gatekeeper の古いバージョンは、VisiBroker 4.x 以前のバージョンで開発された古いプログラムとデフォルトの状態と互換性があります。ただし、GateKeeper 5.x では、このプロパティを明示的に設定する必要があります。

プロパティ	デフォルト値	説明
vbroker.orb.enableVB4backcompat	true false	GateKeeper が VisiBroker の古いバージョンとの互換性を持つかどうかを指定します。このプロパティを false に設定すると、GateKeeper は、VisiBroker 4.5.x 以降のバージョンで開発したプログラムと互換性を持ちます。このプロパティを true に設定すると、GateKeeper は、VisiBroker 4.5.x 以前のバージョンと互換性を持ちます。詳細については、付録 B「GateKeeper の配布例」を参照してください。 メモ : Gatekeeper では、このプロパティはデフォルトで true に設定されています。ただし、クライアントとサーバーでは、この値はデフォルトで false です。

サーバーのファイアウォール仕様に関するプロパティ

メモ これらのプロパティは、サーバーのプロパティファイルでのみ設定してください。これらのプロパティを設定した場合は、対応するライブラリをロードしてください。79 ページの「その他の ORB プロパティ」の vbroker.orb.dynamicLibs の説明を参照してください。

次のプロパティは、クライアントからサーバーへの通信経路を指定します。使用例については、32 ページの「サーバーまでの通信パスの指定」を参照してください。

プロパティ	デフォルト値	説明
vbroker.se.iiop_tp.firewallPaths	<empty> <パスの一覧>	クライアントからサーバーへの通信経路の一覧を指定します。<パス一覧> は、パスのユーザー定義名であり、カンマで区切ります。<パス一覧> の例を次に示します。 vbroker.se.iiop_tp.firewallPaths=x,y
vbroker.firewall-path.<pathname>	<empty> <コンポーネントの一覧>	ファイアウォールパス <パス名> のコンポーネント一覧を指定します。たとえば、 vbroker.firewall-path.x=a,b vbroker.firewall-path.y=c とします。
vbroker.firewall.<component>.type	<empty> PROXY TCP	コンポーネントのタイプを指定します。たとえば、 vbroker.firewall.a.type = PROXY vbroker.firewall.b.type = TCP です。
vbroker.firewall.<component>.ior	<empty> <IOR ファイルのファイル名> <IOR ファイルの URL> IOR:<GateKeeper の文字列化された IOR>	コンポーネントの ior を指定します。これは、vbroker.firewall.<component.type>=PROXY と組み合わせて指定します。次に値の例を示します。 1. file:C:/GateKeeper/GateKeeper.ior 2. http://www.inprise.com/GKGateKeeper.ior 3. IOR:2398402841729073423497234234234

プロパティ	デフォルト値	説明
vbroker.firewall.<component>.host	<empty> < 偽ホスト名 >	サーバーの偽ホストを指定します。これは、vbroker.firewall.<component>.types=TCP と組み合わせて指定し、コンポーネントは NAT 使用の TCP ファイアウォールです。
vbroker.firewall.<component>.iiop_port	<empty> < 偽 IIOP ポート >	サーバーの偽 IIOP ポートを指定します。これは、vbroker.firewall.<component>.types=TCP と組み合わせて指定し、コンポーネントは NAT 使用の TCP ファイアウォールです。
vbroker.firewall.<component>.ssl_port	<empty> < 偽 SSL ポート >	サーバーの偽 SSL ポートを指定します。これは、vbroker.firewall.<component>.type=TCP と組み合わせて指定し、コンポーネントは NAT 使用の TCP ファイアウォールです。
vbroker.firewall.<component>.hiop_port	<empty> < 偽 HIOP ポート >	サーバーの偽 HIOP ポートを指定します。これは、vbroker.firewall.<component>.type=TCP と組み合わせて指定し、コンポーネントは NAT 使用の TCP ファイアウォールです。

その他の ORB プロパティ

これらのプロパティは、ORB でよく使用され、直接および間接に Gatekeeper に関連します。Gatekeeper のプロパティファイルで設定されていない場合もあるため、説明をよくお読みください。

プロパティ	デフォルト値	説明
vbroker.orb.gatekeeper.ior	<empty> <IOR ファイル名 >	Gatekeeper IOR ファイルの URL を指定します。このプロパティによってアプレットビューアの動作が変化するため、このプロパティは、アプレットを含む HTML ファイルで設定する必要があります。
vbroker.orb.alwaysProxy	false - 無効 true - 有効	クライアントがサーバーに接続するときに、必ず別の Gatekeeper を経由するかどうかを指定します。このプロパティは、クライアントまたは Gatekeeper で設定できます。クライアントで設定すると、クライアントは必ず Gatekeeper を経由してサーバーに接続します。Gatekeeper で設定すると、クライアントは必ず別の Gatekeeper を介してサーバーに接続します。詳細については、『VisiBroker プログラマーズリファレンス』を参照してください。
vbroker.locator.ior.ior	<empty> <IOR ファイル名 >	Gatekeeper の IOR ファイルの URL を指定します。このプロパティは、通常、クライアントアプレットで設定しますが、アプリケーションでも設定できます。 メモ : Gatekeeper が提供するロケーションサービスには制限があります。ロケーションリクエストを別の Gatekeeper に転送することはできません。これとは対照的に、スマートエージェントでは、利用可能な別のスマートエージェントに要求を転送できます。

プロパティ	デフォルト値	説明
vbroker.orb.alwaysTunnel	false - 無効 true - 有効	クライアントがサーバーに接続するときに、必ず HTTP トンネル (IOP ラッパー) を使用するかどうかを指定します。このプロパティは、クライアントまたは Gatekeeper で設定できます。詳細については、『 VisiBroker プログラマーズリファレンス』を参照してください。
vbroker.orb.dynamicLibs	<empty> <ライブラリの一覧> 説明を参照	ライブラリの一覧を指定します。 ここでは、 Gatekeeper と関連のあるライブラリについてのみ説明します。 ファイアウォールコンポーネントを指定する場合は、クライアントとサーバーのプロパティで、このプロパティを次の値に設定する必要があります。 com.inprise.vbroker.firewall.Init 負荷分散コンポーネントを指定する場合は、 GateKeeper のプロパティファイルで、このプロパティを次の値に設定する必要があります。 com.inprise.vbroker.gatekeeper.ext.Init

付録 B

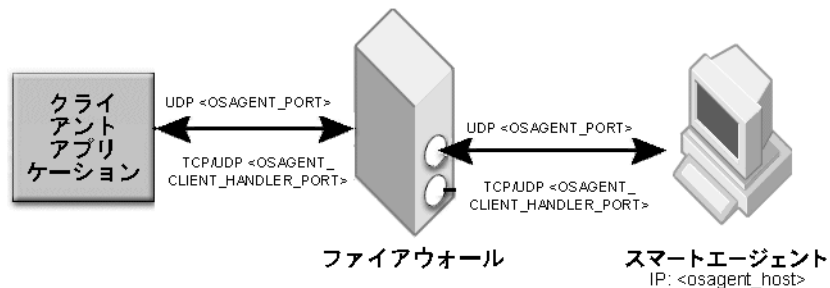
GateKeeper の配布例

この付録では、Gatekeeper を使用する場合と使用しない場合について、マルチネットワーク環境の一般的な配布構成をいくつか示します。

TCP ファイアウォール (Gatekeeper を使用しない)

構成例 1.1 : ファイアウォール背後にスマートエージェント

この構成は、クライアントオブジェクトを設定して、ファイアウォールの背後にあるスマートエージェントにアクセスする方法を示します。



クライアントの環境設定 (環境変数または Windows レジストリを使用) :

```
OSAGENT_PORT
```

クライアントのプロパティ :

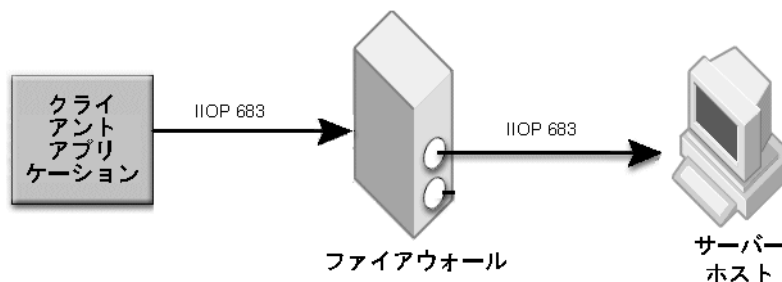
```
vbroker.agent.addr=<osagent_host>
vbroker.agent.port=<OSAGENT_PORT>
```

ファイアウォールの設定 :

ポート <OSAGENT_PORT> で、クライアントホストとスマートエージェントホスト間の双方向の UDP パケットを有効にします。

ポート <OSAGENT_CLIENT_HANDLER_PORT> で、クライアントホストとスマートエージェントホスト間の双方向の TCP パケットと UDP パケットを有効にします。

構成例 1.2 : IIOP 通信の使用



クライアントのプロパティ : 不要

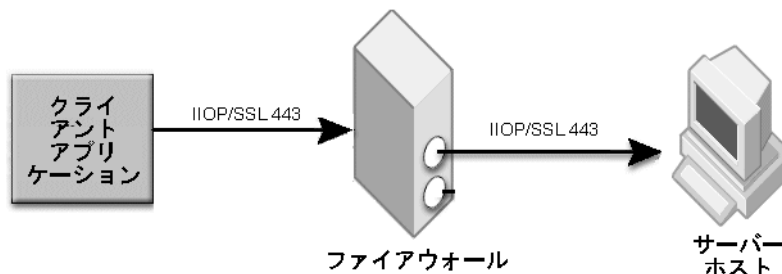
サーバーのプロパティ :

```
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port=683
```

ファイアウォールの設定 :

ポート 683 で、クライアントホストからサーバーホストへの TCP パケットを有効にします。

構成例 1.3 : IIOP/SSL 通信の使用



クライアントのプロパティ :

```
# セキュリティサービスの有効化  
vbroker.security.disable=false
```

```
# セキュリティで保護された転送をクライアント側で適用  
vbroker.security.alwaysSecure=true
```

```
# peerAuthenticationMode を設定  
vbroker.security.peerAuthenticationMode=REQUIRE_AND_TRUST  
vbroker.security.trustpointsRepository=Directory:../trustpoints
```

サーバーのプロパティ :

```
# セキュリティサービスの有効化  
vbroker.security.disable=false
```

```
# SSL 層の属性を設定  
vbroker.security.peerAuthenticationMode=REQUIRE_AND_TRUST  
vbroker.security.trustpointsRepository=Directory:../trustpoints
```

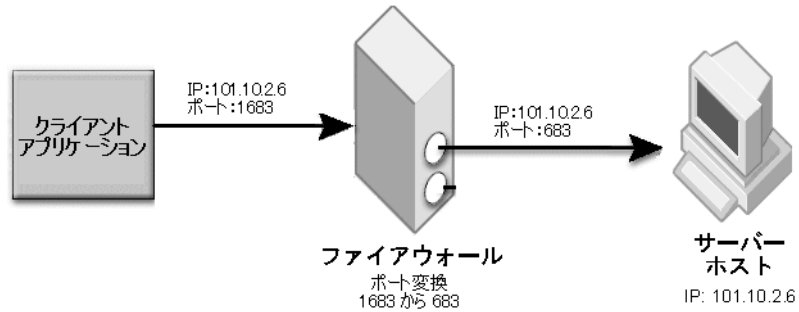
```
# 443 の SSL リスナーポートを設定  
vbroker.se.iiop_tp.scms=iiop_tp,ssl  
vbroker.se.iiop_tp.scm.ssl.listener.port=443  
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.type=Disabled-IIOP
```

メモ このサンプルプロパティでは、<install_dir>/examples/vbroker/security/bank_ssl のサンプルのようなセキュリティで保護されたクライアントとサーバーに、有効な証明書情報がすでに読み込まれていることを前提としています。

ファイアウォールの設定 :

ポート 443 で、クライアントホストからサーバーホストへの SSL パケットを有効にします。

構成例 1.4 : ファイアウォールでアドレス変換のみ実行



ファイアウォールの設定 :

アドレス変換 : 199.10.9.6 → 101.10.2.6

サーバーのプロパティ : 次の 2 つの方法のどちらかを使用します。

方法 1 : IIOP プロファイルの使用

```

vbroker.se.iiop_tp.host=101.10.2.6
vbroker.se.iiop_tp.proxyHost=199.10.9.6
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port=683
  
```

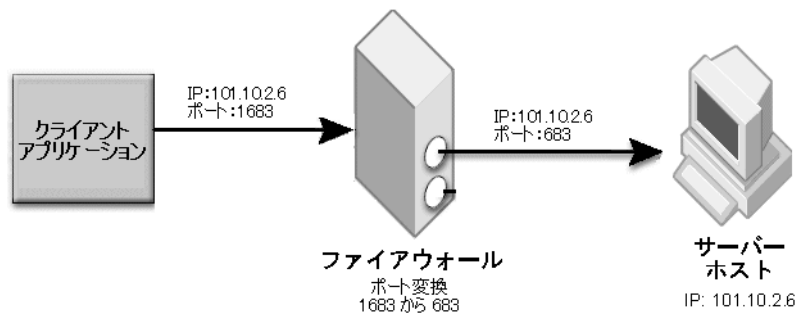
方法 2 : ファイアウォールコンポーネントの使用

```

vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init
vbroker.se.iiop_tp.host=101.10.2.6
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port=683
vbroker.se.iiop_tp.firewallPaths=p
vbroker.firewall-path.p=fw
vbroker.firewall.fw.type=TCP
vbroker.firewall.fw.host=199.10.9.6
vbroker.firewall.fw.iiop_port=683
vbroker.firewall.fw.iiop_port=0
  
```

メモ ポート変換を行わない場合は、実ポートを指定してください。リスナーポートが無効になっている場合は 0 を指定します。

構成例 1.5 : ファイアウォールでポート変換のみ実行



ファイアウォールの設定 :

ポート変換 : 1683 → 683

サーバーのプロパティ : 次の 2 つの方法のどちらかを使用します。

方法 1 : IIOP プロファイルの使用

```
vbroker.se.iiop_tp.host=101.10.2.6  
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port=683  
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.proxyPort=1683
```

方法 2 : ファイアウォールコンポーネントの使用

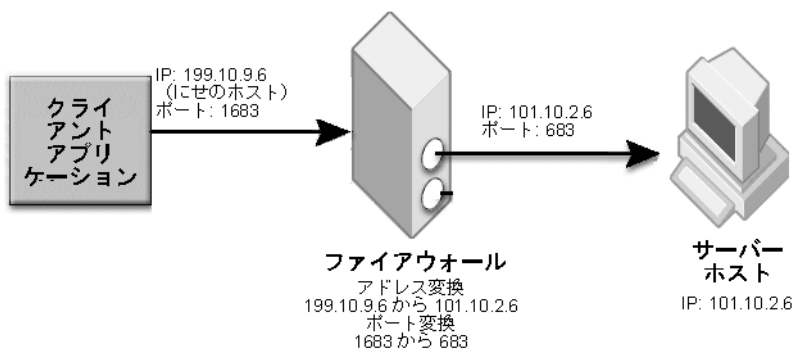
```
vbroker.se.iiop_tp.host=101.10.2.6  
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port=683  
vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init  
vbroker.se.iiop_tp.firewallPaths=p  
vbroker.firewall-path.p=fw  
vbroker.firewall.fw.type=TCP  
vbroker.firewall.fw.host=101.10.2.6  
vbroker.firewall.fw.iiop_port=1683  
vbroker.firewall.fw.hiop_port=0
```

メモ アドレス変換を行わない場合は実ホストを指定してください。

方法 2 では、次をクライアントのプロパティに追加してください。

```
vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init
```

構成例 1.6 : ファイアウォールがアドレス変換とポート変換の両方を実行



ファイアウォールがアドレス変換とポート変換の両方を実行する場合は、構成 1.4 と 1.5 の設定を組み合わせてください。

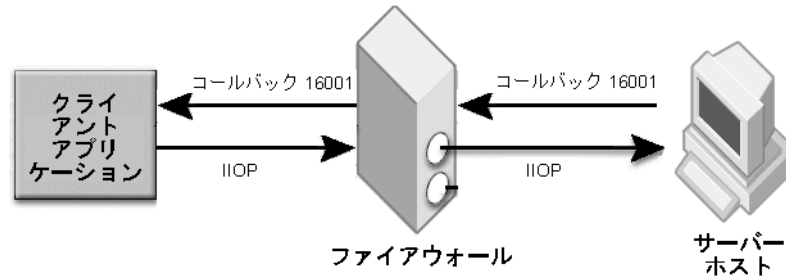
メモ ファイアウォールコンポーネントを使用する方法では、次のように偽ホストと偽ポートを同じファイアウォールエントリに組み合わせた後でファイアウォールを指定してください。

```
vbroker.se.iiop_tp.host=101.10.2.6  
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port=683  
vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init  
vbroker.se.iiop_tp.firewallPaths=p  
vbroker.firewall-path.p=fw  
vbroker.firewall.fw.type=TCP  
vbroker.firewall.fw.host=199.10.9.6  
vbroker.firewall.fw.iiop_port=1683  
vbroker.firewall.fw.hiop_port=0
```

メモ NAT (ネットワークアドレス変換) とセキュリティで保護された接続を行うには、構成 1.3 のセキュリティプロパティの設定を使用してください。

構成例 1.7 : NAT なしのコールバック

転送通信設定については、構成 1.2 を参照してください。



クライアントのプロパティ :

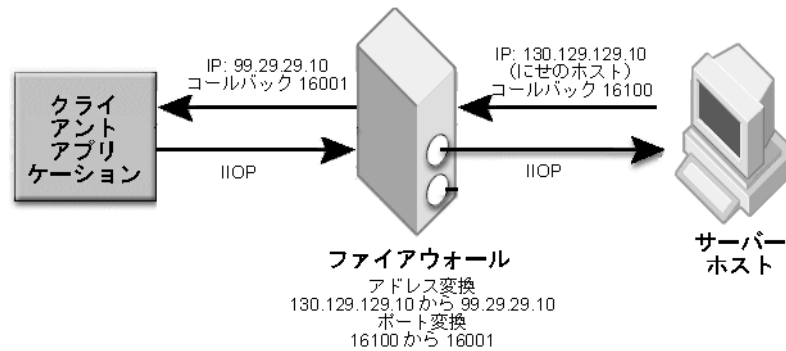
```
vbroker.se.iioptp.scm.iioptp.listener.port=16001
```

ファイアウォールの設定 :

ポート 16001 で、サーバーホストからクライアントホストへの TCP パケットを有効にします。

構成例 1.8 : NAT ありコールバック

転送通信設定については、構成 1.2 を参照してください。



ファイアウォールの設定 :

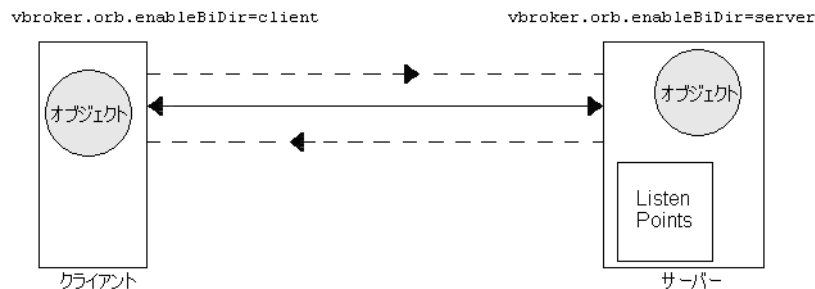
アドレス変換 : 130.129.129.10 → 99.29.29.10 (サーバーネットワークからクライアントネットワークへのパケット)。ポート変換 : 16100 → 16001 (サーバーネットワークからクライアントネットワークへのパケット)

クライアントのプロパティ :

```
vbroker.se.iioptp.host=99.29.29.10
vbroker.se.iioptp.proxyHost=130.129.129.10
vbroker.se.iioptp.scm.iioptp.listener.port=16001
vbroker.se.iioptp.scm.iioptp.listener.proxyPort=16100
```

構成例 1.9 : 双方向通信

双方向通信を有効にするには、構成 1.2, 1.3, 1.4, 1.5, または 1.6 の設定に次の設定を追加します。



上の図では、前方向と後方向の両方の通信パスで同じ接続が使用されます。

クライアントのプロパティ :

```
vbroker.orb.enableBiDir=client
```

サーバーのプロパティ :

```
vbroker.orb.enableBiDir=server
```

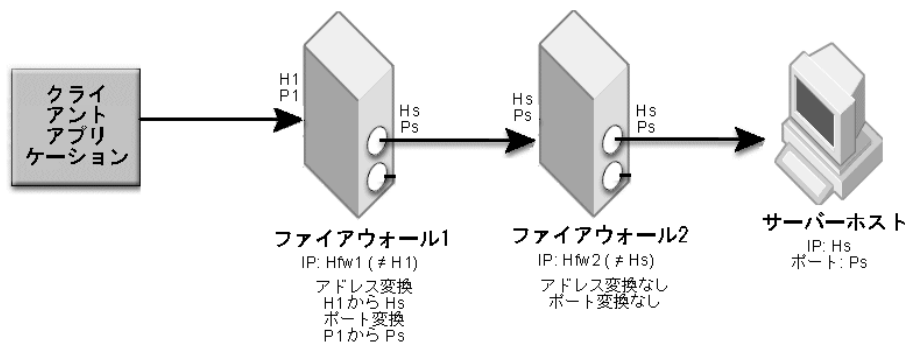
構成例 1.10 : サーバー前面の複数のファイアウォール

この構成は、サーバーホストの前に 2 つのファイアウォールが存在する状況を示します。この構成は、3 つ以上のファイアウォールが存在する状況にも当てはまります。

両方のファイアウォールが NAT を実行しない

両方のファイアウォールが NAT を実行しない場合は、IIOP 通信に関してポート Ps で TCP パケットを許可するように両方のファイアウォールを設定します。

ファイアウォール 1 だけが NAT を実行する



ファイアウォール 1 が次の NAT を実行します。

- アドレス変換 : $H1 \rightarrow Hs$ 。ポート変換 : $P1 \rightarrow Ps$
- ファイアウォール 2 は、ポート Ps で TCP パケットを有効に設定する必要があります。
- クライアントは、ポート P1 でホスト H1 に IIOP パケットを送信します。

サーバーのプロパティ : 次の 2 つの方法のどちらかを使用します。

方法 1 : IIOP プロファイルの使用

```
vbroker.se.iiop_tp.host=<Hs>
vbroker.se.iiop_tp.proxyHost=<H1>
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port=<Ps>
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.proxyPort=<P1>
```

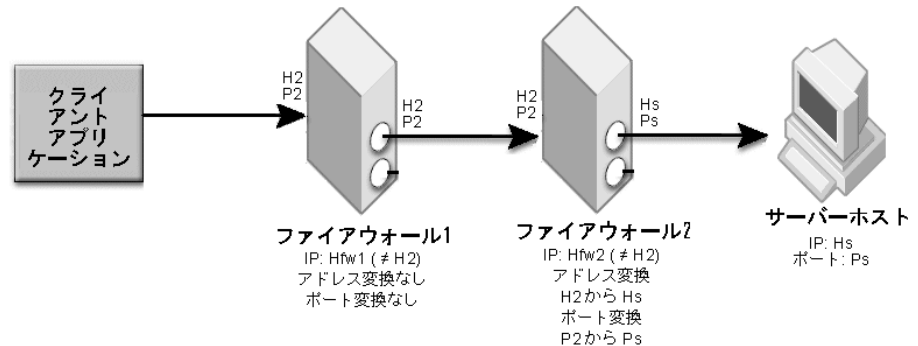
方法 2 : ファイアウォールコンポーネントの使用

```

vbroker.se.iiop_tp.host=<Hs>
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port=<Ps>
vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init
vbroker.se.iiop_tp.firewallPaths=p
vbroker.firewall-path.p=fw1
vbroker.firewall.fw1.type=TCP
vbroker.firewall.fw1.host=<H1>
vbroker.firewall.fw1.iiop_port=<P1>
vbroker.firewall.fw1.hiop_port=0

```

ファイアウォール 2 だけが NAT を実行



ファイアウォール 2 が次の NAT を実行します。

- アドレス変換 : H2 → Hs。 Port 変換 : P2 → Ps
- ファイアウォール 1 は、ポート P2 で TCP パケットを許可するように設定する必要があります。
- クライアントは、ポート P2 で、ホスト H2 に IIOP パケットを送信します。

サーバーのプロパティ : 次の 2 つの方法のどちらかを使用します。

方法 1 : IIOP プロファイルの使用

```

vbroker.se.iiop_tp.host=<Hs>
vbroker.se.iiop_tp.proxyHost=<H2>
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port=<Ps>
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.proxyPort=<P2>

```

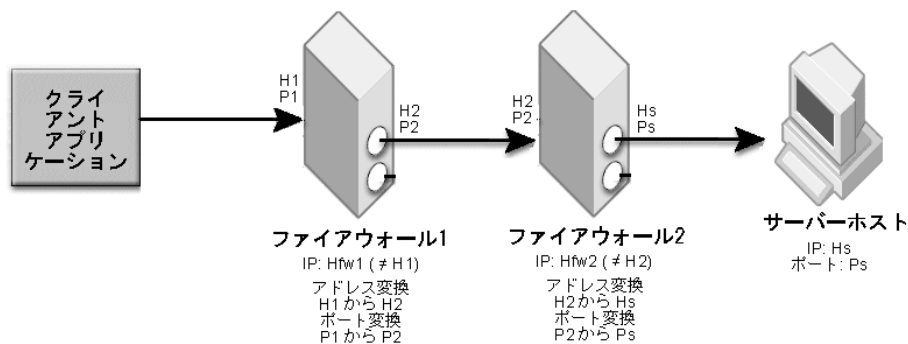
方法 2 : ファイアウォールコンポーネントの使用

```

vbroker.se.iiop_tp.host=<Hs>
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port=<Ps>
vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init
vbroker.se.iiop_tp.firewallPaths=p
vbroker.firewall-path.p=fw2
vbroker.firewall.fw2.type=TCP
vbroker.firewall.fw2.host=<H2>
vbroker.firewall.fw2.iiop_port=<P2>
vbroker.firewall.fw2.hiop_port=0

```

両方のファイアウォールが NAT を実行



ファイアウォール 1 が次の NAT を実行します。

- アドレス変換 : H1 → H2。ポート変換 : P1 → P2
- ファイアウォール 2 が次の NAT を実行します。
- アドレス変換 : H2 → Hs。Port 変換 : P2 → Ps
- クライアントは、ポート P1 でホスト H1 に IIOP パケットを送信します。

サーバーのプロパティ : 次の 2 つの方法のどちらかを使用します。

方法 1 : IIOP プロファイルの使用

```
vbroker.se.iiop_tp.host=<Hs>
vbroker.se.iiop_tp.proxyHost=<H1>
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port=<Ps>
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.proxyPort=<P1>
```

方法 2 : ファイアウォールコンポーネントの使用

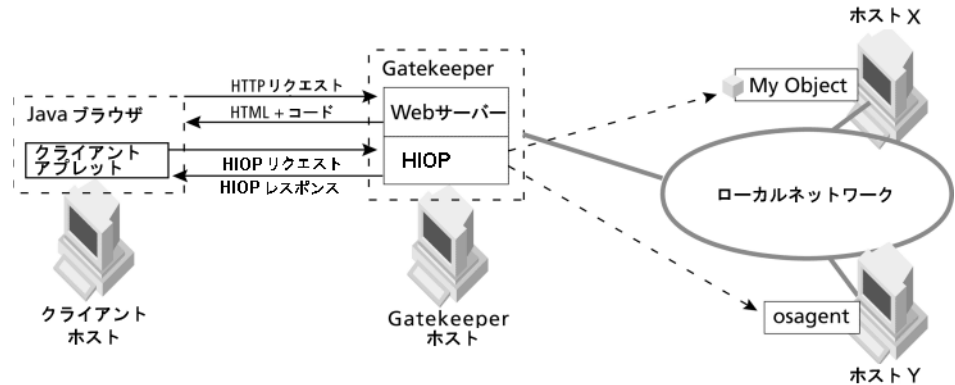
```
vbroker.se.iiop_tp.host=<Hs>
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port=<Ps>
vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init
vbroker.se.iiop_tp.firewallPaths=p
vbroker.firewall-path.p=fw1
vbroker.firewall.fw1.type=TCP
vbroker.firewall.fw1.host=<H1>
vbroker.firewall.fw1.iiop_port=<P1>
vbroker.firewall.fw1.hiop_port=0
```

メモ ファイアウォール 2 の NAT 情報を設定する必要はありません。proxyHost と proxyPort は、最初の NAT 偽ホストと偽ポートのみ指定します。ファイアウォールコンポーネントとファイアウォール経路については、最初の NAT デバイスだけを指定します。

Gatekeeper の配布

構成例 2.1 : Web サーバーとしての GateKeeper

GateKeeper は、HTML ページ、クライアントアプレット、および IOR ファイルを処理する Web サーバーとして機能できます。



次の GateKeeper のプロパティを使用して、GateKeeper の HTTP リスナーを設定します。

```
vbroker.se.exterior.scms=ex-iiop,ex-hiop
vbroker.se.exterior.scm.ex-hiop.listener.port=8088
```

クライアントホストの Web ブラウザから、次の作業を行ってください。

- 次の URL を使って HTML ファイルまたはクライアントアプレットをロードする。

```
http://gatekeeper:8088/ClientApplet.html
```

- 次の URL を使って Gatekeeper の IOR をロードする。

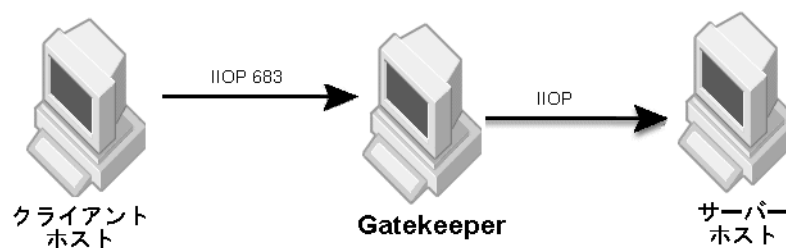
```
http://gatekeeper:8088/gatekeeper.ior
```

次の例を使用して、クライアントアプレット (ClientApplet.html) を設定します。

```
<applet archive=vbjorb.jar code="ClientApplet.class" width="200" height="80">
<param name="org.omg.CORBA.ORBClass" value="com.inprise.vbroker.orb.ORB">
<param name="vbroker.orb.alwaysTunnel" value="true">
<param name="vbroker.orb.gatekeeper.ior" value="http://gatekeeper:8088/
gatekeeper.ior">
</applet>
```

その他必要なクライアントプロパティは、パラメータ名と値と同様に設定できます。

構成例 2.2 : IIOP プロキシとしての GateKeeper



クライアントのプロパティ :

```
vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init
vbroker.orb.alwaysProxy=true
```

Gatekeeper のプロパティ :

```
vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.listener.port=683
vbroker.se.exterior.scm.ex-hiop.listener.port=8088
```

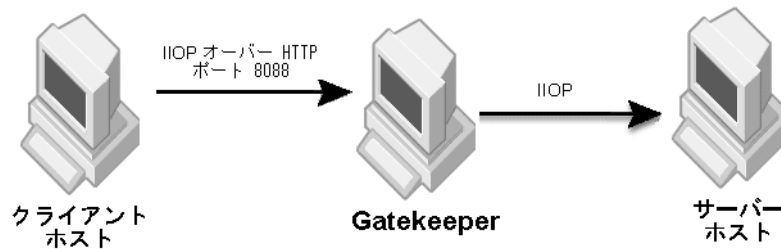
サーバーのプロパティ :

```
vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init
vbroker.orb.exportFirewallPath=true
vbroker.se.iiop_tp.firewallPaths=p
vbroker.firewall-path.p=gk
vbroker.firewall.gk.type=PROXY
vbroker.firewall.gk.ior=http://gatekeeper:8088/gatekeeper.ior
```

クライアントが、HTTP トンネリングではなく IIOP の使用を求めるアプレットの場合、プロパティを設定せず次の設定を使用してください。

```
<param name="vbroker.orb.alwaysTunnel" value="true">:
<applet archive=vbjorb.jar code="ClientApplet.class" width="200" height="80">
<param name="org.omg.CORBA.ORBClass" value="com.inprise.vbroker.orb.ORB">
<param name="vbroker.orb.alwaysProxy" value="true">
<param name="vbroker.orb.gatekeeper.ior" value="http://gatekeeper:8088/
gatekeeper.ior">
</applet>
```

構成例 2.3 : HTTP トンネリング接続



クライアントのプロパティ :

```
vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init,com.inprise.vbroker.H
IOP.Init
vbroker.orb.alwaysTunnel=true
vbroker.orb.alwaysProxy=true
vbroker.orb.gatekeeper.ior=http://gatekeeper:8088/gatekeeper.ior
```

Gatekeeper のプロパティ :

```
vbroker.se.exterior.scm.ex-hiop.listener.port=8088
vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.listener.port=683
```

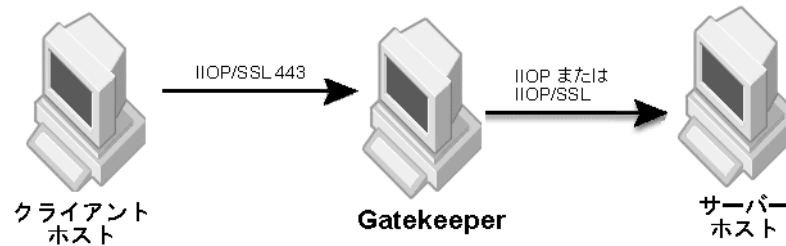
サーバーのプロパティ :

```
vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init
vbroker.se.iiop_tp.firewallPaths=p
vbroker.firewall-path.p=gk
vbroker.firewall.gk.type=PROXY
vbroker.firewall.gk.ior=http://gatekeeper:8088/gatekeeper.ior
vbroker.orb.exportFirewallPath=true
```

クライアントが HTTP トンネリングの使用を求めるアプレットの場合は、次の設定を使用してください。

```
<applet archive=vbjorb.jar code="ClientApplet.class" width="200" height="80">
<param name="org.omg.CORBA.ORBClass" value="com.inprise.vbroker.orb.ORB">
<param name="vbroker.orb.alwaysTunnel" value="true">
<param name="vbroker.orb.gatekeeper.ior" value="http://gatekeeper:8088/
gatekeeper.ior">
</applet>
```

構成例 2.4 : セキュリティで保護された接続 (SSL)



クライアントのプロパティ :

```

# ファイアウォール関連のプロパティ
vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init
vbroker.orb.alwaysProxy=true

# SSL 関連のプロパティを設定
vbroker.security.disable=false
vbroker.security.wallet.type=Directory:./identities
vbroker.security.wallet.identity= paul
vbroker.security.wallet.password= Paul$$$$
vbroker.security.trustpointsRepository=Directory:./trustpoints

```

Gatekeeper のプロパティ :

```

vbroker.se.exterior.scms=ex-iiop,ex-ssl
vbroker.se.exterior.scms.ex-iiop.listener.type=Disabled-IIOP
vbroker.se.exterior.scms.ex-iiop.listener.port=8088
vbroker.se.exterior.scms.ex-ssl.listener.port=443

# SSL 関連のプロパティを設定
vbroker.security.disable=false
vbroker.security.wallet.type=Directory:./identities
vbroker.security.wallet.identity= kevin
vbroker.security.wallet.password= Kevin$$$$
vbroker.security.trustpointsRepository=Directory:./trustpoints
vbroker.se.iiop_tp.scm.ssl.listener.port=<server SSL: listener port>

```

サーバーのプロパティ :

```

# ファイアウォール関連のプロパティ
vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init
vbroker.orb.exportFirewallPath=true
vbroker.se.iiop_tp.firewallPaths=p
vbroker.firewall-path.p=gk
vbroker.firewall.gk.type=PROXY
vbroker.firewall.gk.ior=http://gatekeeper:8088/gatekeeper.ior

# SSL 関連のプロパティを設定
vbroker.security.disable=false
vbroker.security.wallet.type=Directory:./identities
vbroker.security.wallet.identity= kevin
vbroker.security.wallet.password= Kevin$$$$
vbroker.security.trustpointsRepository=Directory:./trustpoints

vbroker.se.iiop_tp.scms=iiop_tp,ssl
vbroker.se.iiop_tp.scm.ssl.listener.port=<server SSL listener port>
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.type=Disabled-IIOP

```

メモ クライアント、サーバー、および Gatekeeper で、SSL セキュリティ保護サービスをロードしてください。

構成例 2.5 : セキュリティで保護された HTTP トンネリング

構成 2.4 のクライアントおよびサーバー設定で、次をクライアントのプロパティに追加してください。

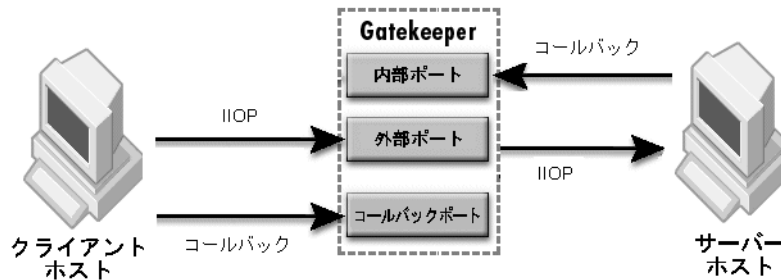
```
vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init,
    com.inprise.vbroker.HIOP.Init
    com.inprise.security.Init,
    com.inprise.security.hiops.Init
vbroker.orb.alwaysTunnel=true
```

Gatekeeper のプロパティ :

```
vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.security.Init,
    com.inprise.vbroker.gatekeeper.ssl.Init,
    com.inprise.security.hiops.Init
vbroker.se.exterior.scms=ex-IIOP,ex-hiop,ex-hiops
vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.listener.type=Disabled-IIOP
vbroker.se.exterior.scm.ex-hiops.listener.port=443
vbroker.se.exterior.scm.ex-hiop.listener.port=8088
vbroker.security.wallet.type=Directory:./identities
vbroker.security.wallet.identity=Kevin
vbroker.security.wallet.password=Kevin$$$
vbroker.security.secureTransport=true
vbroker.security.trustpointsRepository=Directory:./trustpoints
vbroker.security.peerAuthenticationMode=none
```

構成例 2.6 : コールバック接続 (VisiBroker 3.x スタイル用)

転送通信設定については、構成 2.2 を参照してください。



次のクライアントのプロパティを設定します。

```
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.type=Callback-IIOP
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.gatekeeper=http://gk_host:8088/
gatekeeper.ior
```

次の Gatekeeper プロパティで Gatekeeper のコールバック (VisiBroker 3.x スタイル) を有効にしてください。

```
vbroker.gatekeeper.callbackEnabled=true
vbroker.gatekeeper.backcompat.callback=true
vbroker.gatekeeper.backcompat.callback.listeners=iiop
vbroker.gatekeeper.backcompat.callback.listener.iiop.port=<exterior callback
port>
vbroker.gatekeeper.backcompat.callback.listener.iiop.type=IIOPCallback
```

内部ポート in-iiop は、コールバックを有効にすると自動的に有効になります。セキュリティで保護されたコールバックの場合にだけ、必要に応じて in-ssl, ex-ssl, および ex-hiops に対する SCM を追加する必要があります。

構成例 2.7 : 双方向通信

双方向通信を有効にするには、構成 2.2, 2.3, 2.4, または 2.5 の設定に次の設定を追加します。

クライアントのプロパティ :

```
vbroker.orb.enableBiDir=client
```


サーバーのプロパティ :

```
vbroker.orb.enableBiDir=server
```

Gatekeeper のプロパティ :

```
vbroker.orb.enableBiDir=both
```

構成例 2.8 : パススルー接続

パススルー通信を有効にするには、構成 2.2 または 2.4 の設定に次の設定を追加します。

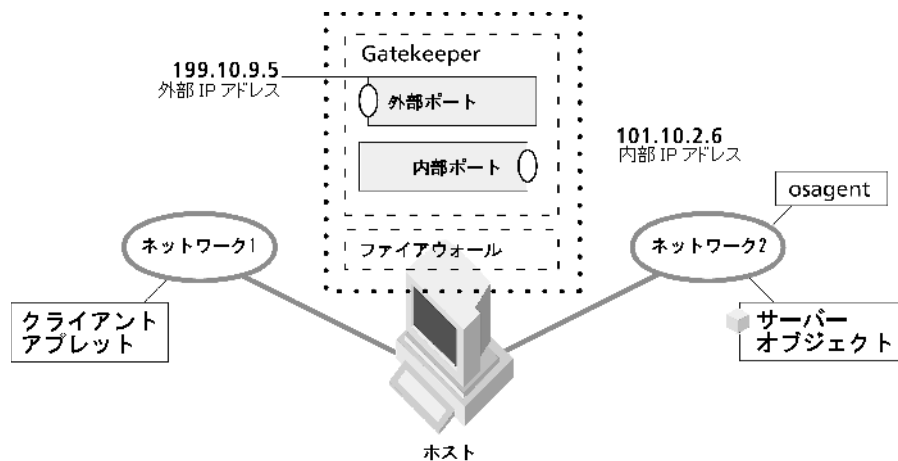
クライアントのプロパティ :

```
vbroker.orb.proxyPassthru=true
```

Gatekeeper のプロパティ :

```
vbroker.gatekeeper.enablePassthru=true
```

構成例 2.9 : デュアルホームホスト設定の GateKeeper



Gatekeeper のプロパティを次のように設定します。

- 外部ホストおよび内部ホストアドレス

```
vbroker.se.exterior.host=199.10.9.5
vbroker.se.interior.host=101.10.2.6
```

- 外部リスナーポート

```
vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.listener.port=<exterior IIOP port>
vbroker.se.exterior.scm.ex-hiop.listener.port=<exterior HIOP port>
```

- 内部リスナーポート (VisiBroker 3.x スタイルのコールバックに使用)

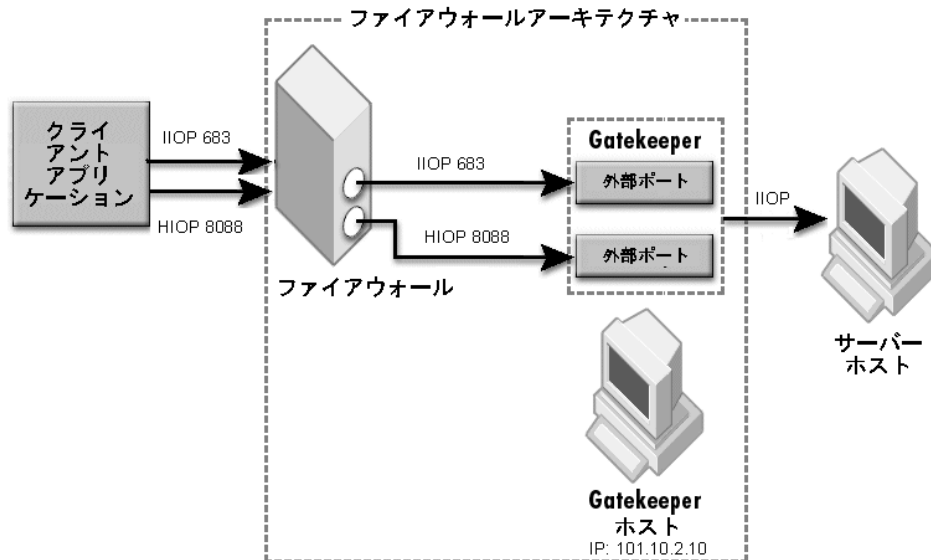
```
vbroker.se.interior.scm.in-iiop.listener.port=<interior IIOP port>
```

サーバー側にファイアウォールがある Gatekeeper

メモ ルーターも、ファイアウォールの機能を実行できます。

Gatekeeper 前面のファイアウォール

構成例 3.1 : ファイアウォールが NAT なしでパケットフィルタリングを実行



Gatekeeper のプロパティ :

```
vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.listener.port=683
vbroker.se.exterior.scm.ex-hiop.listener.port=8088
```

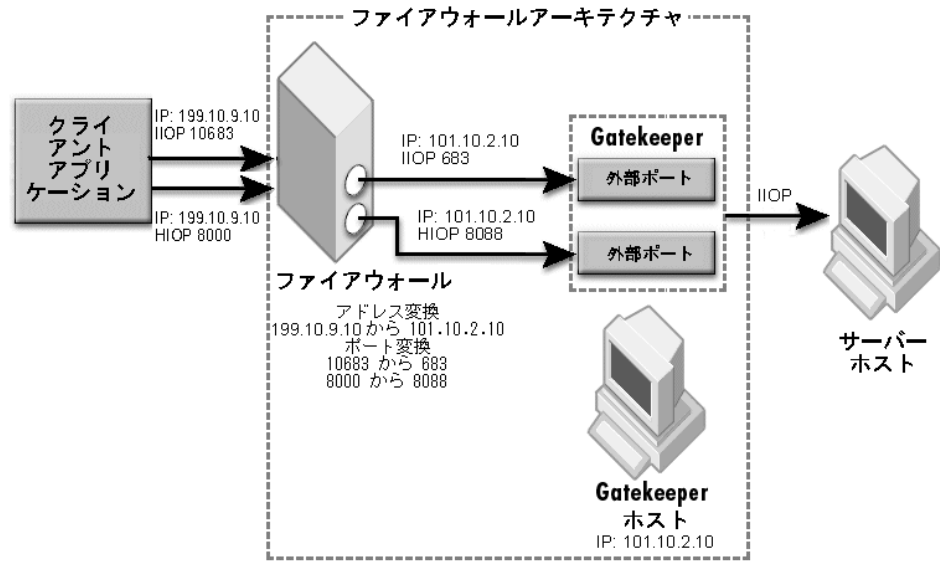
ファイアウォールの設定 :

ポート 683 で TCP パケットの転送を有効にし、ポート 8088 で外部ネットワークから内部ネットワークへの HTTP パケットを有効にしてください。

サーバーのプロパティ :

```
vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init
vbroker.se.iioptp.firewallPaths=p
vbroker.firewall-path.p=gk
vbroker.firewall.gk.type=PROXY
vbroker.firewall.gk.iior=http://101.10.2.10:8088/gatekeeper.iior
```

構成例 3.2 : ファイアウォールで NAT を実行



ファイアウォールの NAT 設定

アドレス変換: 199.10.9.10 → 101.10.2.10。ポート変換: 10683 → 683 および 8000 → 8088

Gatekeeper 前面のファイアウォールで NAT を指定する方法は 2 つあります。次のどちらかを使用します。

- GateKeeper の proxyHost と proxyPort の設定を使用する

Gatekeeper のプロパティ :

```
vbroker.se.exterior.host=101.10.2.10
vbroker.se.exterior.proxyHost=199.10.9.10
vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.listener.port=683
vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.listener.proxyPort=10683
vbroker.se.exterior.scm.ex-hiop.listener.port=8088
vbroker.se.exterior.scm.ex-hiop.listener.proxyPort=8000
```

サーバーのプロパティ :

```
vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init
vbroker.se.iiop_tp.firewallPaths=p
vbroker.firewall-path.p=gk
vbroker.firewall.gk.type=PROXY
vbroker.firewall.gk.iior=http://101.10.2.10:8088/gatekeeper.iior
```

- サーバーのファイアウォールコンポーネントを使用する

Gatekeeper のプロパティ :

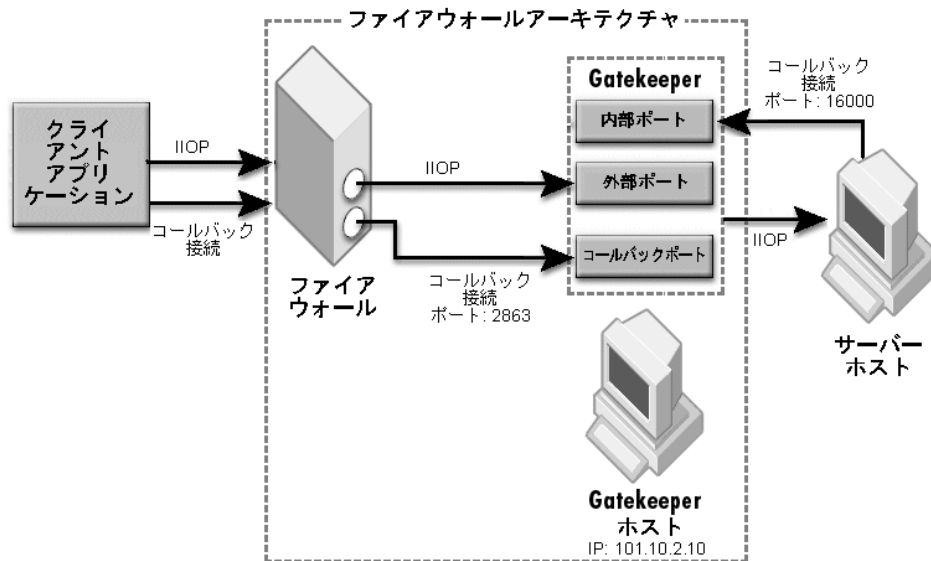
```
vbroker.se.exterior.host=101.10.2.10
vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.listener.port=683
vbroker.se.exterior.scm.ex-hiop.listener.port=8088
```

サーバーのプロパティ :

```
vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init
vbroker.se.iioptp.firewallPaths=p
vbroker.firewall-path.p=fw,gk
vbroker.firewall.fw.type=TCP
vbroker.firewall.fw.host=199.10.9.10
vbroker.firewall.fw.iioport=10683
vbroker.firewall.fw.hioport=8000
vbroker.firewall.gk.type=PROXY
vbroker.firewall.gk.iior=http://101.10.2.10:8088/gatekeeper.iior
```

構成例 3.3 : コールバック接続 (VisiBroker 3.x スタイル用)

転送通信設定については、構成 3.1 または 3.2 を参照してください。



次のクライアントのプロパティを設定します。

```
vbroker.se.iioptp.scm.iioptp.type=Callback-IIOP
vbroker.se.iioptp.scm.iioptp.listener.gatekeeper=http://gk_host:8088/
gatekeeper.iior
```

次のプロパティで、Gatekeeper のコールバック (VisiBroker 3.x スタイル) を有効にし、コールバックポートを指定します。

```
vbroker.gatekeeper.callbackEnabled=true
vbroker.gatekeeper.backcompat.callback=true
vbroker.gatekeeper.backcompat.callback.host=101.10.2.10
vbroker.gatekeeper.backcompat.callback.listeners=iioptp
vbroker.gatekeeper.backcompat.callback.listener.iioptp.port=2683
vbroker.gatekeeper.backcompat.callback.listener.iioptp.type=IIOPCallback
```

ファイアウォールの設定では、クライアントがポート 2683 経由で Gatekeeper へのコールバック接続 (TCP プロトコル) を確立できるようにしておきます。

次の Gatekeeper のプロパティで、内部ポートを設定します。

```
vbroker.se.interior.scm.in-iioptp.listener.port=16000
```

ファイアウォールが Gatekeeper のホストおよびコールバックポート（アドレス変換は 199.10.9.10 から 101.10.2.10, ポート変換は 12683 から 2863）で NAT を実行する場合は、次を Gatekeeper のプロパティに追加してください。

```
vbroker.gatekeeper.backcompat.callback.proxyHost=199.10.9.10
vbroker.gatekeeper.backcompat.callback.listener.iioport.proxyPort=12683
```

構成例 3.4 : 双方向通信

双方向通信を有効にするには、構成 3.1 または 3.2 の設定に次の設定を追加します。

クライアントのプロパティ :

```
vbroker.orb.enableBiDir=client
```

サーバーのプロパティ :

```
vbroker.orb.enableBiDir=server
```

Gatekeeper のプロパティ :

```
vbroker.orb.enableBiDir=both
```

構成例 3.5 : パススルー接続

パススルー通信を有効にするには、構成 3.1 または 3.2 の設定に次の設定を追加します。

クライアントのプロパティ :

```
vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init
vbroker.orb.proxyPassthru=true
```

Gatekeeper のプロパティ :

```
vbroker.gatekeeper.enablePassthru=true
vbroker.gatekeeper.passthru.inPortMin=<in_min_port>
vbroker.gatekeeper.passthru.inPortMax=<in_max_port>
```

ファイアウォールの設定 :

注意 <in_min_port> から <in_max_port> の範囲のポートで、クライアントホストから GateKeeper までの TCP パケットのルーティングを有効にします。ファイアウォールは、このポート範囲でポート変換を実行することはできません。

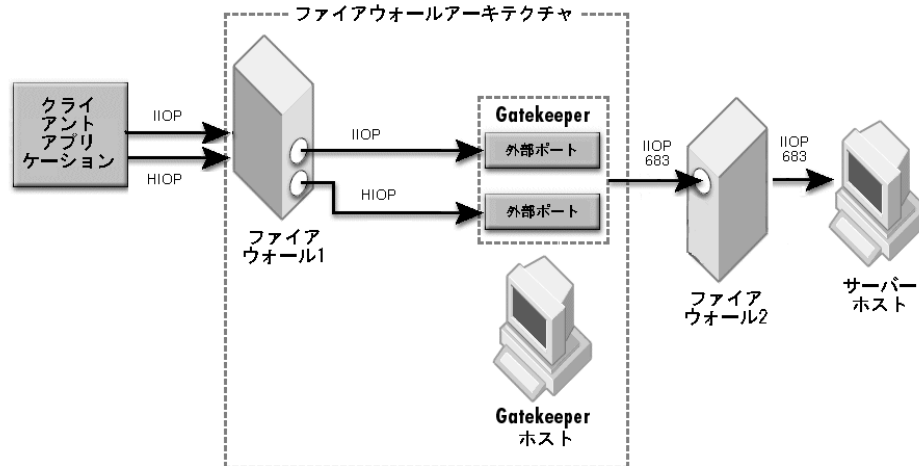
Gatekeeper の前後にファイアウォールが存在

サーバーは内部ネットワークに配置される一方で、Gatekeeper は DMZ（非武装地帯）に配置されます。

メモ GateKeeper の前に位置するファイアウォールに関する設定については、前の節を参照してください。ここでは、GateKeeper とサーバー間に位置するファイアウォールに関する設定について説明します。

構成例 4.1 : GateKeeper 背後のファイアウォールを設定

構成 3.1 または 3.2 の設定を使用して、クライアントと GateKeeper 間の通信を設定します。ここで説明した設定は、構成 3.1 または 3.2 と組み合わせて使用してください。



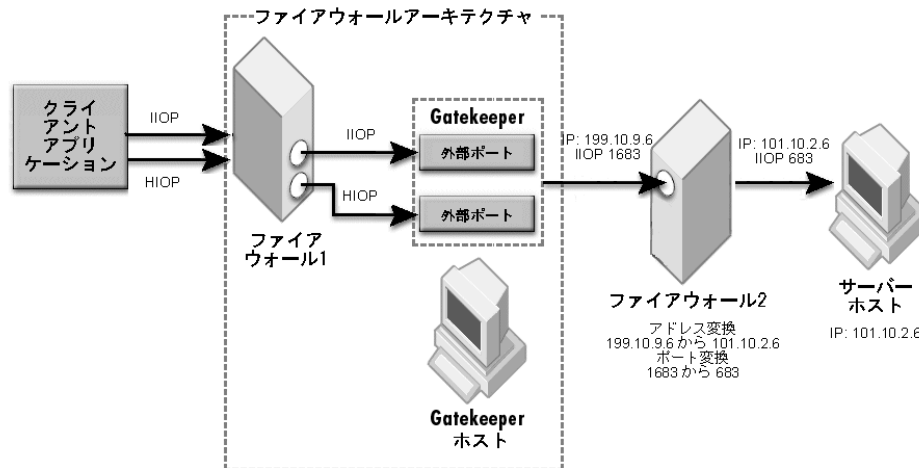
次のサーバーのプロパティを使用して、サーバーの IIOIP のリスナーポートを指定します。

```
vbroker.se.iioip_tp.scm.iioip_tp.listener.port=683
```

ポート 683 で GateKeeper からサーバーホストへの IIOIP パケット (TCP プロトコル) が有効になるようにファイアウォール 2 を設定します。

構成例 4.2 : GateKeeper 背後のファイアウォールが NAT を実行

構成 3.1 または 3.2 の設定を使用して、クライアントと GateKeeper 間の通信を設定します。ここで説明した設定は、構成 3.1 または 3.2 と組み合わせて使用してください。



ファイアウォール 2 の NAT 設定

アドレス変換 : 199.10.9.10 → 101.10.2.10

ポート変換 : 1683 → 683

ファイアウォール 2 で NAT を指定する方法は 2 つあります。次のどちらかを使用します。

サーバーのプロパティ :

方法 1 : IIOP プロファイルの使用

```

vbroker.se.iiop_tp.host=101.10.2.6
vbroker.se.iiop_tp.proxyHost=199.10.9.6
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port=683
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.proxyPort=1683
    
```

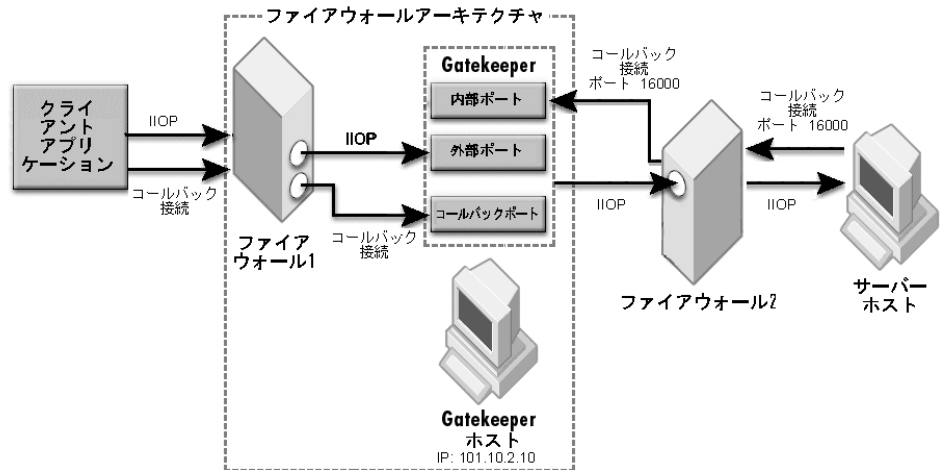
方法 2 : ファイアウォールコンポーネントの使用

```

vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init
vbroker.se.iiop_tp.firewallPaths=p
vbroker.firewall-path.p=gk, fw2
vbroker.firewall.gk.type=PROXY
vbroker.firewall.gk.ior=http://gatekeeper:8088/gatekeeper.ior
vbroker.firewall.fw2.type=TCP
vbroker.firewall.fw2.host=199.10.9.6
vbroker.firewall.fw2.iiop_port=1683
vbroker.firewall.fw2.hiop_port=0
    
```

構成例 4.3 : コールバック接続 (VisiBroker 3.x スタイル用)

構成 3.3 の設定を使用して、クライアントと Gatekeeper 間のコールバック接続を設定します。



次の Gatekeeper のプロパティで、内部ポートを設定します。

```

vbroker.se.interior.scm.in-iiop.listener.port=16000
    
```

ファイアウォール 2 では、ポート 16000 における TCP プロトコルによるサーバーと GateKeeper との通信を有効にしておく必要があります。

サーバーから GateKeeper に転送されるパケットに対して、ファイアウォール 2 が次の NAT を実行する場合があります。

アドレス変換 : 121.100.2.19 → 101.10.2.10。ポート変換 : 161000 → 16000

この場合は、Gatekeeper のプロパティに次のプロパティを追加してください。

```

vbroker.se.interior.host=101.10.2.10
vbroker.se.interior.proxyHost=121.100.2.19
vbroker.se.interior.scm.in-iiop.listener.port=16000
vbroker.se.interior.scm.in-iiop.listener.proxyPort=16100
    
```

構成例 4.4 : 双方向通信

双方向通信を有効にするには、構成 4.1 または 4.2 の設定に次の設定を追加します。

クライアントのプロパティ :

```
vbroker.orb.enableBiDir=client
```

サーバーのプロパティ :

```
vbroker.orb.enableBiDir=server
```

Gatekeeper のプロパティ :

```
vbroker.orb.enableBiDir=both
```

構成例 4.5 : パススルー接続

パススルー通信を有効にするには、構成 4.1 または 4.2 の設定に次の設定を追加します。

クライアントのプロパティ :

```
vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init  
vbroker.orb.proxyPassthru=true
```

Gatekeeper のプロパティ :

```
vbroker.gatekeeper.enablePassthru=true  
vbroker.gatekeeper.passthru.inPortMin=<in_min_port>  
vbroker.gatekeeper.passthru.inPortMax=<in_max_port>  
vbroker.gatekeeper.passthru.outPortMin=<out_min_port>  
vbroker.gatekeeper.passthru.outPortMax=<out_max_port>
```

サーバーのプロパティ :

```
vbroker.se.iiop_tp.scm.iioptp.listener.port=<server IIOP port>
```

注意 <server IIOP port> の値は、<out_min_port> から <out_max_port> の範囲とします。

ファイアウォール 1 では、<in_min_port> から <in_max_port> の範囲のポートで、クライアントホストから GateKeeper までの TCP パケットのルーティングを有効にします。ファイアウォール 2 では、<out_min_port> から <out_max_port> の範囲のポートで、GateKeeper からサーバーホストまでの TCP パケットのルーティングを有効にします。ファイアウォールは、これらのポートでポート変換を実行しない設定とします。

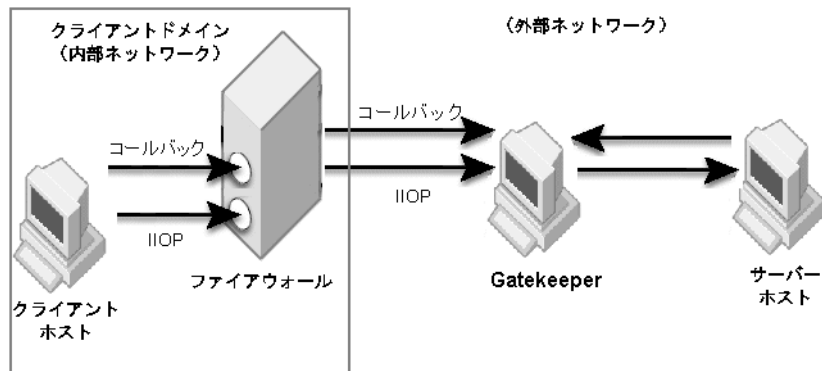
構成例 4.6 : 内部ネットワークスマートエージェント

Gatekeeper がクライアントであると想定し、構成 1.1 の設定を使用してください。

Gatekeeper とクライアント側のファイアウォール

構成例 5.1 : ファイアウォールで IIOP が有効

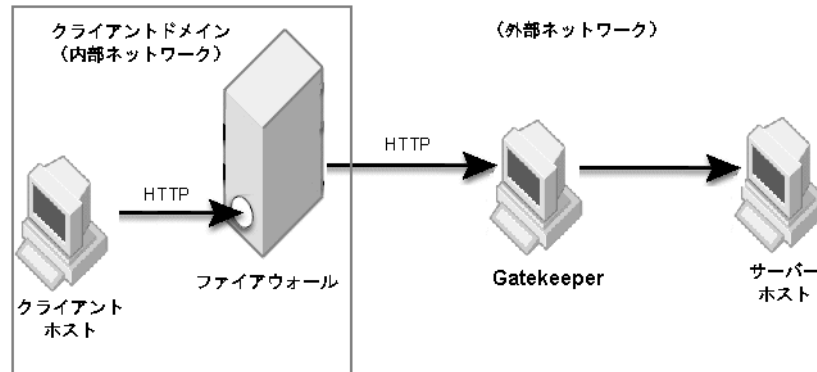
クライアント側のファイアウォールで、内部ネットワークのクライアントから外部ネットワークへの IIOP メッセージ (TCP プロトコル) 送信を有効にします。



構成 3.x を参照して、Gatekeeper の前に位置するサーバー側ファイアウォールをクライアント側ファイアウォールと交換してください。Gatekeeper はクライアントのドメイン外にあるので、通常、ファイアウォールを管理するクライアント側の管理者には、Gatekeeper の設定を変更する権限がありません。管理者は、Gatekeeper のリスナーポート情報を収集し、それに応じてクライアント側のファイアウォールを設定する必要があります。

構成例 5.2 : ファイアウォールで HTTP のみ有効

クライアント側のファイアウォールでは、内部ネットワークのクライアントから外部ネットワーク向けに HTTP メッセージの送信だけを有効にします。IIOP メッセージは、ファイアウォールによってブロックされます。そのため、クライアントがクライアント側ファイアウォール外の Gatekeeper と通信するには、HTTP トンネリングを使用する必要があります。



クライアントに常に HTTP トンネリングを使用させるには、次のクライアントのプロパティを設定します。

```

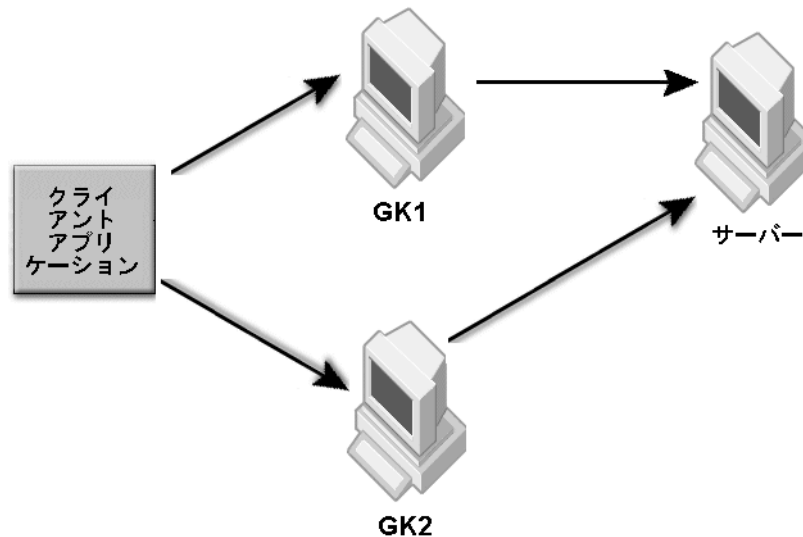
vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init
vbroker.orb.alwaysTunnel=true
  
```

メモ HTTP トンネリングは、VisiBroker 3.x スタイルのコールバックをサポートしていません。コールバックが必要な場合は、双方向接続を使用してください。また、HTTP トンネリングを使用する場合は、パススルー接続は使用できません。

Gatekeeper の負荷分散とフォールトトレランス

構成例 6.1 : フォールトトレランスのためのマルチ GateKeeper 使用

1 つの GateKeeper だけに依存するかわりに、複数の GateKeeper をフォールトトレランスに配置することができます。冗長性を持たせるには、複数の Gatekeeper をサーバーに割り当ててください。



この例におけるサーバーのプロパティは次のとおりです。

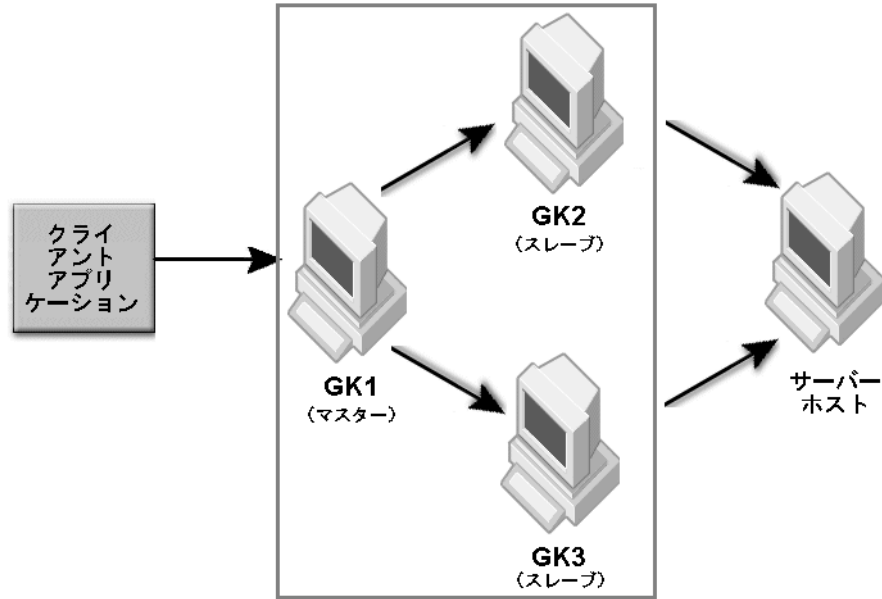
```
vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init
vbroker.se.iiop_tp.firewallPaths=p1,p2
vbroker.firewall-path.p1=gk1
vbroker.firewall.gk1.type=PROXY
vbroker.firewall.gk1.ior=http://gk1_host:8088/gatekeeper.ior
vbroker.firewall-path.p2=gk2
vbroker.firewall.gk2.type=PROXY
vbroker.firewall.gk2.ior=http://gk2_host:8088/gatekeeper.ior
```

GK1 と GK2 の両方で次のプロパティが必要です。

```
vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.gatekeeper.ext.Init
```

クライアントは、GK1 と GK2 のどちらかを使ってサーバーと通信できます。一方の Gatekeeper が停止しても、クライアントはもう一方の Gatekeeper を使ってサーバーと通信できます。

構成例 6.2 : 負荷分散のためのマスター/スレーブ設定



上の図は, GK1 をマスター GateKeeper とし, GK2 および GK3 をスレーブ GateKeeper とする際のマスター/スレーブ GateKeeper 設定を示します。

GateKeeper GK1 のプロパティ (マスター) :

```

vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.gatekeeper.ext.Init
vbroker.gatekeeper.load.slaves=gk2,gk3
vbroker.gatekeeper.load.slave.gk2=http://gk2_host:8088/gatekeeper.ior
vbroker.gatekeeper.load.slave.gk3=http://gk3_host:8088/gatekeeper.ior
  
```

このほかにプロパティをスレーブ GateKeeper GK1 と GK2 に追加する必要はありません。

サーバーのプロパティ (マスター GateKeeper だけを指定) :

```

vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init
vbroker.se.iiopt.firewallPaths=p
vbroker.firewall-path.p=gk1
vbroker.firewall.gk1.type=PROXY
vbroker.firewall.gk1.ior=http://gk1_host:8088/gatekeeper.ior
  
```

クライアントがサーバーの IOR を直接取得できない場合は, クライアントは次のプロパティを使って通信する GateKeeper を指定できます。

```

vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init
vbroker.orb.gatekeeper.ior=http://gk1_host:8088/gatekeeper.ior
  
```

この設定は, フォールトトレランスも提供できます。各接続クライアントに対して, マスター GateKeeper は次のスレーブ GateKeeper を順にクライアントの処理に割り当てますが, そのスレーブ GateKeeper がダウンした場合, クライアントはマスター GateKeeper に戻り, 次の利用可能なスレーブ GateKeeper の割り当てを受けます。これは, クライアントが使用できる GateKeeper を取得するまで続けられます。

マスター GateKeeper は, 接続クライアントに割り当てることができる利用可能な GateKeeper のリストを実際に保持しています。このリストには, すべてのスレーブ GateKeepers とマスター GateKeeper 自体が含まれています。したがって, 順番が来れば, マスター GateKeeper は自分自身をクライアントに割り当てます。

マスター GateKeeper で次のプロパティが設定されている場合は, マスター GateKeeper がリストに含まれません。

```

vbroker.gatekeeper.load.balancer=master
  
```

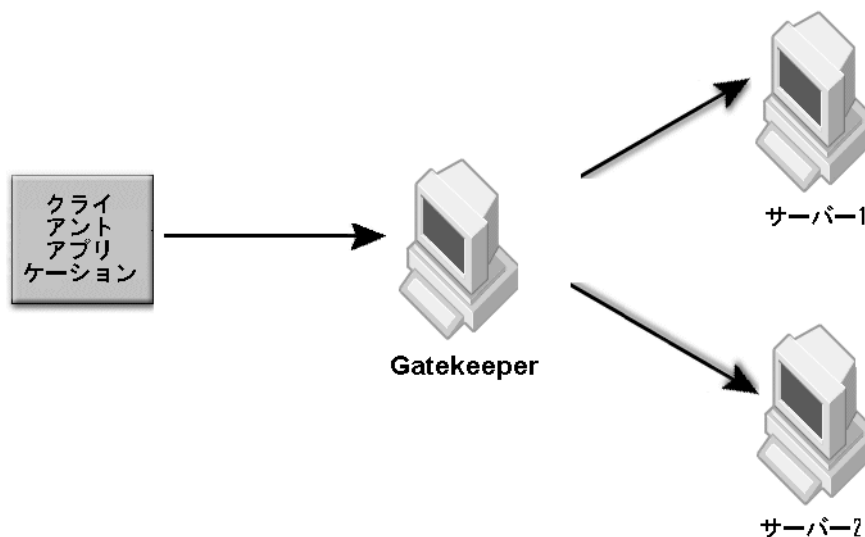
すべてのスレーブ GateKeeper がダウンしている場合に、使用可能な GateKeeper を取得しようとクライアントが無限にマスター GateKeeper に戻り続けないように、クライアント側で次のプロパティを設定する必要があります。

```
vbroker.orb.rebindForward=N
```

この N は、スレーブ GateKeeper の数より小さくする必要があります。

マスター GateKeeper 自体がダウンしている場合は、クライアント ORB のリバインドメカニズムが、利用可能な最初のスレーブ GateKeeper を介してすべてのクライアント接続を作成します。この状態では負荷分散は行われません。負荷分散機能はマスター GateKeeper で行われ、そのマスターがダウンしているからです。ただし、クライアントは引き続き動作しており、サーバーに接続されているため、フォールトトレランスは維持されています。

構成例 6.3 : 負荷分散のために同じサーバー上にマルチインスタンス



サーバーの負荷分散およびフォールトトレランスを行うために、同一のサーバーのインスタンスを複数配置することができます。負荷分散に関しては、Gatekeeper がラウンドロビン方式を使って複数のサーバーに要求を送信します。フォールトトレランスに関しては、1つのサーバーが停止しても、別のサーバーが同じサービスを引き続き提供できます。

Gatekeeper に次のプロパティを追加してください。

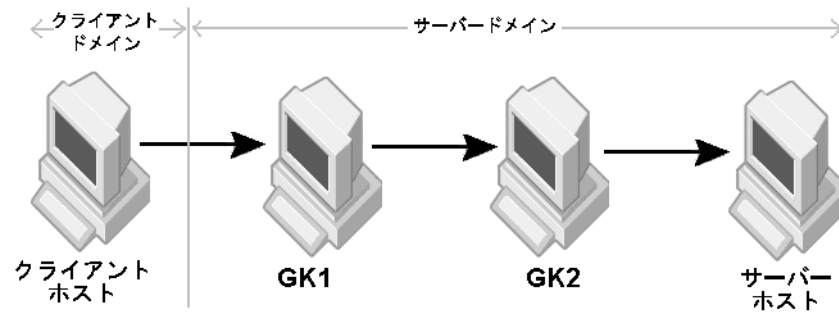
```
vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.gatekeeper.ext.Init
```

サーバー 1 およびサーバー 2 のプロパティ :

```
vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init
vbroker.se.iiop_tp.firewallPaths=p
vbroker.firewall-path.p=gk
vbroker.firewall.gk.type=PROXY
vbroker.firewall.gk.iior=http://gk_host:8088/gatekeeper.iior
```

Gatekeeper のチェーン化

構成例 7.1 : サーバー側のチェーン化

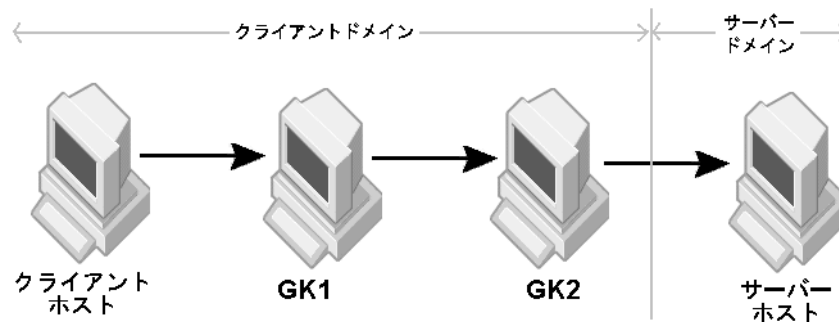


サーバー側 Gatekeeper のチェーン化を指定するには、次のサーバーのプロパティを使用してください。

```
vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init
vbroker.se.iiop_tp.firewallPaths=p
vbroker.firewall-path.p=gk1,gk2
vbroker.firewall.gk1.type=PROXY
vbroker.firewall.gk1.iior=http://gk1_host:8088/gatekeeper.iior
vbroker.firewall.gk2.type=PROXY
vbroker.firewall.gk2.iior=http://gk2_host:8088/gatekeeper.iior
```

クライアントがサーバーの IOR を取得すると、Gatekeeper のチェーン化を実行してサーバーと通信できるようになります。

構成例 7.2 : クライアント側のチェーン化



クライアントのプロパティ :

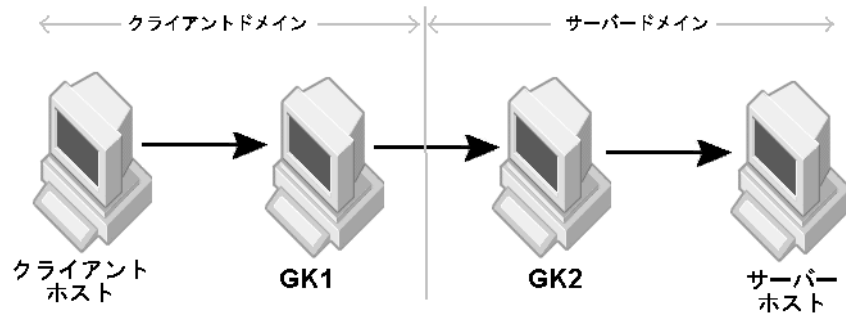
```
vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init
vbroker.orb.gatekeeper.iior=http://GK1:8088/gatekeeper.iior
```

GK1 のプロパティ :

```
vbroker.orb.gatekeeper.iior=http://GK2:8088/gatekeeper.iior
```

メモ チェイン化された Gatekeeper でクライアントがサーバーと通信するには、チェーンの最後尾にある Gatekeeper (GK2) でサーバーの IOR を取得する必要があります。

構成例 7.3 : サーバー側とクライアント側両方のチェーン化



クライアントのプロパティ :

```
vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init
vbroker.orb.gatekeeper.iior=http://gk_host:8088/gatekeeper.iior
```

サーバーのプロパティ :

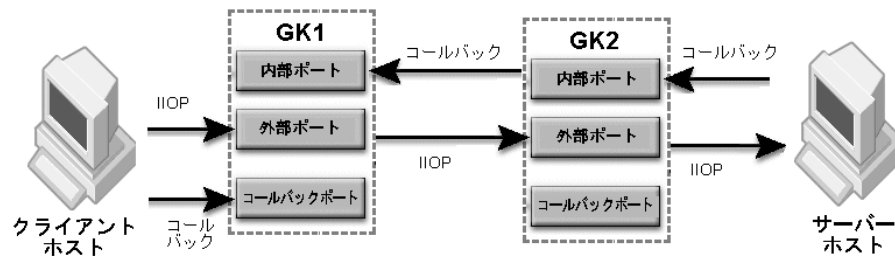
```
vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init
vbroker.se.iioptp.firewallPaths=p
vbroker.firewall-path.p=gk2
vbroker.firewall.gk2.type=PROXY
vbroker.firewall.gk2.iior=http://gk2_host:8088/gatekeeper.iior
```

GK1 が常時 GK2 と接続している場合は、次の GK1 のプロパティを使用して、GK1 を GK2 と静的にチェーン化できます。

```
vbroker.orb.gatekeeper.iior=http://gk2_host:8088/gatekeeper.iior
```

それ以外の場合は、GK1 が、スマートエージェントまたはネーミングサービスで、サーバーまたは GK2 の IOR を取得する必要があります。

構成例 7.4 : コールバック通信 (VisiBroker 3.x スタイル)



VisiBroker 3.x スタイルのコールバック通信を有効にするには、次のプロパティを設定します。

クライアントのプロパティ :

```
vbroker.orb.alwaysProxy=true
vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init
vbroker.se.iioptp.scm.iioptp.listener.type=Callback-IIOP
vbroker.se.iioptp.scm.iioptp.listener.gatekeeper=http://gk1_host:8088/gatekeeper.iior
```

GK1 および GK2 のプロパティ :

```

vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.gatekeeper.ext.Init
vbroker.gatekeeper.callbackEnabled=true
vbroker.gatekeeper.backcompat.callback=true
vbroker.gatekeeper.backcompat.callback.listeners=iiop
vbroker.gatekeeper.backcompat.callback.listener.iiop.type=IIOPCallback
vbroker.gatekeeper.backcompat.callback.listener.iiop.port=
<exterior callback port>
vbroker.gatekeeper.backcompat.callback.host=<GK exterior IP address>
vbroker.se.interior.scm.in-iiop.listener.port=<interior port>

```

サーバーのプロパティ :

```

vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port=<IIOP listener port>
vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init
vbroker.orb.exportFirewallPath=true
vbroker.se.iiop_tp.firewallPaths=p
vbroker.firewall-path.intranet=gk1,gk2
vbroker.firewall.gk1.type=PROXY
vbroker.firewall.gk1.iior=http://gk1_host:8088/gatekeeper.iior
vbroker.firewall.gk2.type=PROXY
vbroker.firewall.gk2.iior=http://gk2_host:8088/gatekeeper.iior

```

構成例 7.5 : 双方向接続

構成 7.1, 7.2, または 7.3 を参照してください。

双方向通信を有効にするには、次の設定を追加します。

クライアントのプロパティ :

```

vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init
vbroker.orb.enableBiDir=client

```

サーバーのプロパティ :

```

vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init
vbroker.orb.enableBiDir=server

```

GK1 および GK2 のプロパティ :

```

vbroker.orb.enableBiDir=both

```

構成例 7.6 : パススルー接続

構成 7.1, 7.2 または 7.3 の図を参照してください。

クライアントのプロパティ :

```

vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init
vbroker.orb.proxyPassthru=true

```

GK1 および GK2 のプロパティ :

```

vbroker.gatekeeper.enablePassthru=true
vbroker.gatekeeper.passthru.inPortMin=<in_min_port>
vbroker.gatekeeper.passthru.inPortMax=<in_max_port>
vbroker.gatekeeper.passthru.outPortMin=<out_min_port>
vbroker.gatekeeper.passthru.outPortMax=<out_max_port>

```

サーバーのプロパティ :

```

vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port=<server IIOP port>

```

メモ <server IIOP port> の値は、GK2 の <out_min_port> から <out_max_port> の範囲とします。GK2 の <in_min_port> から <in_max_port> の範囲は、<out_min_port> から <out_max_port> of GK1 の範囲にします。

いずれかのホスト間にファイアウォールが存在する場合は、次の表を参照して、開く必要があるポートを確認してください。

表 6.7 ファイアウォールのポート

ファイアウォールの場所	開いているポートの範囲
クライアントと GK1 の間	GK1 外部 IIOP および HIOP リスナーポート, GK1 <in_min_port> と <in_max_port>
GK1 と GK2 の間	GK2 外部 IIOP および HIOP リスナーポート, GK2 <in_min_port> と <in_max_port>
GK2 とサーバーの間	GK2 <out_min_port> と <out_max_port>

注意 ファイアウォールは、これらのパススルーポートでポート変換を実行することはできません。

複数のファイアウォール/サブネット環境での VisiBroker の使用

VisiBroker は、複数のファイアウォールが存在する構成で使用できます。一般に VisiBroker では、ファイアウォールを通過する方法が 2 つ提供されています。

第一に、次のプロパティを使用して、ネットワークアドレス変換 (TCP ファイアウォール) を設定できます。

```
vbroker.se.iiop_tp.host=www.realdomain.com
vbroker.se.iiop_tp.proxyHost=www.fakedomain.com
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port=25000
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.proxyPort=32000
```

この設定では、実ホスト/ポート情報は IOR で失われます。つまり、IOR で利用できるのは偽ホスト/ポートだけです。また、別の TCP ファイアウォール設定も、サーバー側の設定として一般によく配布されています。この設定は ORB の組み込みメカニズムなので、すべての種類のサービス (GateKeeper, ネーミングサービスなど) に適用されます。

```
vbroker.orb.exportFirewallPath=true
vbroker.se.iiop_tp.firewallPaths =Queen
vbroker.firewall-path.Queen=Atlantic
vbroker.firewall-path.Atlantic.type=TCP
vbroker.firewall-path.Atlantic.host=www.fakedomain.com
vbroker.firewall-path.Atlantic.iiop_port=32000
vbroker.firewall-path.Atlantic.hiop_port=32003
vbroker.firewall-path.Atlantic.ssl_port=32004
```

この設定の利点は、設定情報が失われないことです。内部クライアントは、実 IP ホスト/ポート情報を使ってサーバーに直接接続できます。ただし、この設定には、生成される IOR ファイルで IP ホスト/ポート (実と偽の両方) が公開されるというリスクがあります。

第二に、GateKeeper は、ファイアウォールサーバー上で GIOP プロキシサーバーとして機能できます。GateKeeper では、さまざまな目的で設計されたさまざまなメカニズムを利用できます。次に例を示します。

- **通常モード。**ファイアウォールが GIOP プロキシサーバー (GateKeeper など) に対して少なくとも 1 つのポートを許可する場合に使用されます。必要に応じて HTTP トンネリングに切り替えることができる自動モードです。
- **パススルーモード。**ファイアウォールが一定範囲のポートと、クライアントとサーバーの間で交換される GateKeeper によって解釈されないパケットを許可する場合に使用されます。この場合、GateKeeper は、リソースマネージャとしてのみ機能します。GateKeeper がリソースマネージャとして機能するのは、クライアントが使用する IP ポートを割り当てるためです。
- **HTTP トンネリング。**ファイアウォールが HTTP トラフィックだけを許可する場合に使用されます。この場合、GIOP プロキシサーバーは、ファイアウォール内で実行できません。かわりに、GateKeeper の前面に HTTP プロキシサーバーが存在します。クライアント側 ORB には、GIOP メッセージを HTTP メッセージに変換するためのメカニズムが組み込まれており、変換後の HTTP メッセージが HTTP プロキシサーバーま

たはファイアウォールに送信されます。HTTP プロキシサーバー（または適用可能なファイアウォール）は、HTTP メッセージを GateKeeper に転送します。さらに、GateKeeper は、HTTP メッセージを GIOP メッセージに変換し、それを要求された送信先（サーバーや別の GateKeeper など）に転送します。この設定は、ファイアウォールが発信 HTTP トラフィックは許可するが、ほかの種類の TCP 接続は許可しない場合のクライアント側設定でも使用できます。

- メモ** 複数のファイアウォールでは、上記の設定方法を組み合わせる必要があります。基本的に、複数のファイアウォールの使用方法は配布によって異なるため、考えられるすべての組み合わせについてここで説明することはできません。一般的なガイドラインを次に示します。
- スマートエージェントは単一ドメインで動作することを目的に設計されているため、使用しないでください。
 - CORBA オブジェクト IOR の格納とルックアップには、CORBA ネーミングサービスを使用してください。
 - ドメインネームサービス (DNS) のルックアップは使用しないでください。
 - ネットワークアドレス変換 (NAT) または TCP ファイアウォール設定は、一連のファイアウォールの最も外側にあるファイアウォールでのみ使用してください。その場合は、内部クライアントであっても、ファイアウォールの外にあるかのように動作することが必要です。
 - GateKeeper は、ファイアウォール環境内の実行可能な場所であれば、どこでも使用できます。HTTP トンネリング機能は、TCP 接続がファイアウォールによって許可されない場合に使用できます。
 - GateKeeper のチェイン化は、複数のファイアウォールが必要な場合に使用できます。GateKeeper のチェイン化では、複数のホップを設定できます。
 - 負荷分散のために複数の GateKeeper を使用してください。

ファイアウォールとスマートエージェント構成

ファイアウォールアーキテクチャ内のスマートエージェントは、ファイアウォールホスト上で動作しません。かわりに、内部ネットワーク内でスマートエージェントを実行できます。通常、スマートエージェントは、セキュリティ上の理由から、外部ネットワークに公開されません。スマートエージェントは、IPv4 UDP ブロードキャストメッセージを使って自分自身を通知します。ファイアウォール/ルーターは、ブロードキャストメッセージがネットワーク内の次のホップに転送されることをブロックできるため、スマートエージェントは、通常、ローカルネットワーク内でのみ可視になります。外部ネットワークからスマートエージェントにアクセスする必要がある場合は、ファイアウォール上の特定のポートを開く必要があります。

スマートエージェントは、次の環境変数を使用します。

- OSAGENT_PORT
- OSAGENT_CLIENT_HANDLER_PORT

VisiBroker ORB がスマートエージェントを使って CORBA オブジェクトを登録および照会するには、OSAGENT_PORT 環境変数が設定されている必要があります。OSAGENT_PORT プロパティのデフォルト値は 14000 です。OSAGENT_PORT を適切な TCP/IP ポートに設定することで、仮想ドメインを定義できます。指定されたサブネット内でスマートエージェントをいくつでも実行できます。複数の OSAGENT_PORT 値を設定すると、複数のドメインが作成されます。つまり、あるスマートエージェントドメインに登録された CORBA オブジェクトは、別のドメインから照会を行う CORBA クライアントには不可視になります。

このスマートエージェントに到達するには、CORBA アプリケーションで次の TCP/IP アドレスまたはポートが使用されるように設定します。

- vbroker.agent.addr=143.186.142.21
- vbroker.agent.port=25873

クライアント、サーバー、または **GateKeeper** がスマートエージェントを使用する必要がない場合は、それぞれのプロパティファイルで次のプロパティを設定してスマートエージェントを無効にします。

```
vbroker.agent.enableLocator=false
```

GateKeeper はマルチホーム（またはファイアウォール）ホスト上で実行します。スマートエージェントは、マルチホームホストまたは内部ネットワークのいずれかで実行できます。**GateKeeper** が特定のスマートエージェントを使用するように設定するには、たとえば、次のプロパティを使用します。

```
vbroker.agent.addr=143.186.142.21
vbroker.agent.port=25873
```

クライアントプログラムが **GateKeeper** に（たとえば、次のプロパティを使って）サーバーオブジェクトを照会して **IOR** を取得するように要求する場合、内部ネットワーク内のサーバーは、自分自身を **GateKeeper** と同じスマートエージェントに登録する必要があります。

```
vbroker.agent.addr=143.186.142.21
vbroker.agent.port=25873
```

GateKeeper が一度に使用できるスマートエージェントドメインは 1 つだけです。スマートエージェントドメインは、**OSAGENT_PORT** 値または `vbroker.agent.port` プロパティを設定することによって決定されます。**GateKeeper** を介してアクセスできるすべてのサーバーは、同じスマートエージェントドメインまたはネーミングサービスに登録する必要があります。内部ネットワーク内の **GateKeeper** と同じサブネットでスマートエージェントを実行することをお勧めします。

スマートエージェントでは、次のポートが必要です。

- 1 **OSAGENT_PORT** (UDP 型)
- 2 **OSAGENT_CLIENT_HANDLER_PORT** (UDP 型)
- 3 **OSAGENT_CLIENT_HANDLER_PORT** (TCP 型)

ORB アプリケーションが使用する **OSAGENT_PORT** は **UDP** ポートです。ロケーションサービスに割り当てられるのは、スマートエージェントが使用する **TCP** 型ポート (**OSAGENT_CLIENT_HANDLER_PORT**) だけです。**UDP** 型の **OSAGENT_CLIENT_HANDLER_PORT** は、スマートエージェント自身が使用します。**OSAGENT_CLIENT_HANDLER_PORT** は、スマートエージェントが実行されているホストに対してのみ設定してください。

ファイアウォール構成でのスマートエージェントの使用

スマートエージェントには、いくつかのフェイルオーバー機能と負荷分散機能が組み込まれています。スマートエージェントのドメインは、使用されている **OSAGENT_PORT** によって定義されます。ある **ORB** アプリケーション（サーバーなど）が特定のドメイン（スマートエージェントドメイン）内のいずれかのスマートエージェントに登録されている場合、ほかの **ORB** アプリケーション（クライアントプログラムなど）は、同じドメイン内にある任意のスマートエージェントからそのドメイン内のサーバーオブジェクトを照会できます。スマートエージェントは、ドメイン内でサーバーオブジェクトを検索しますが、クライアントアプリケーションはこの処理を認識しません。1 つのスマートエージェントでエラーが発生した場合、**ORB** アプリケーションは、同じドメイン内の別のスマートエージェントを見つけ、自分自身を再登録して処理を続行できます。

各ファイアウォールには固有の動作があるため、スマートエージェントの負荷分散機能は、ファイアウォールにまで及ぶようには設計されていません。たとえば、**NAT**（ネットワークアドレス変換）デバイスは、**IP** アドレス/ポートを変更する一種のファイアウォールです。スマートエージェントは、**NAT** に対応するようには設計されていません。また、ファイアウォールには、特定の種類のパケットだけを許可するもの、セキュリティと暗号化を要求するもの、**DNS** ルックアップを許可しないものなどがあります。したがって、どのような種類のファイアウォールまたは **NAT** 設定でも、スマートエージェントは使用しないでください。

スマートエージェントはファイアウォール構成内で使用するようには設計されていませんが、アプリケーションがファイアウォールの背後にあるスマートエージェントにアクセスする必要がある場合は、次の手順にしたがいます。ただし、この手順は、部署間のファイアウォールにだけ適用してください。

- 1 ファイアウォールで OSAGENT_PORT と OSAGENT_CLIENT_HANDLER_PORT を開きます。一部のファイアウォールでは、パケットがスマートエージェントに到達するように、静的転送経路を設定する必要があります。アプリケーション間にあるすべてのファイアウォールで、これらのポートを開く必要があります。ファイアウォールがマルチホームホスト上にある場合のために、localaddr (たとえば、<instal_dir>var/defaults/adm/properties/services/osagentfile フォルダにある) を編集し、OSAGENT_LOCAL_ADDR_FILE を設定して、スマートエージェントが要求パケットを監視するためにバインドする必要があるすべてのインターフェースを指定します。
- 2 agentaddr ファイルでスマートエージェント IP アドレスを設定して、1つのネットワーク上のスマートエージェントが別のネットワーク上のスマートエージェントと通信できるようにします。
- 3 ORB アプリケーションが起動されるすべてのホストで、OSAGENT_PORT と OSAGENT_CLIENT_HANDLER_PORT を設定します。これらのポートは、ファイアウォールで開いているポートと同じにする必要があります。

メモ 上記の設定でスマートエージェントを使用することは可能ですが、スマートエージェントをこのように使用することは、お勧めしません。このような設定は、一部のファイアウォールでは機能しますが、すべてのファイアウォールで機能するとは限りません。

ファイアウォール構成でのスマートエージェントのエラー時の動作

スマートエージェントでエラーが発生すると、ORB アプリケーションは、同じサブネット内の別のスマートエージェントに切り替える必要があります。スマートエージェントの OSAGENT_PORT はすでに固定されているため、ORB アプリケーションは、UDP ブロードキャストを送信して別のスマートエージェントを検索します。ファイアウォールがある場合、ORB アプリケーションは、スマートエージェントが実行されている別のホストに到達できる必要があります。ORB アプリケーションは、かわりのスマートエージェントの場所を知らない場合があるため、実行できる処理は限られます。スマートエージェントが同じホストで再起動した場合、クライアントはそのスマートエージェントに接続できます。基本的に、スマートエージェントが UDP ブロードキャストベースの技術を使用することの理解が重要です。ファイアウォールやルーターが UDP ブロードキャストを転送しないことがあるため、これがファイアウォールにまたがってスマートエージェントを使用できない原因の1つになります。ただし、スマートエージェントでエラーが発生しても、同じサブネット内のスマートエージェントは使用できます。

スマートエージェントを使用するクライアントの動作

次のプロパティを設定すると、特定の範囲のポートを使ってスマートエージェントにバインドするようにクライアント ORB アプリケーションを設定できます。

```
vbroker.agent.clientPort
vbroker.agent.clientPortRange
```

ポート範囲を指定すると、クライアント ORB は、指定された範囲のローカルポートだけを使用します。Windows/NT では実際にポートを閉じる動作が遅延し、ポート範囲の使用が制限されるため、クライアントのポート範囲の指定が必要です。

GateKeeper とほかの CORBA サービスの使用

クライアントから見ると、GateKeeper は、ほかのすべての CORBA サービスに対して透過的です。通常のサーバーオブジェクトとほかの CORBA サービス（ネーミングサービス、トランザクションサービス、通知サービス、イベントサービスなど）の間に違いはありません。

サーバー側の設定では、クライアント ORB によって識別され、必要な場合にだけ使用される IOR 内のファイアウォールコンポーネントを指定するようにサーバーを設定できます。この場合、クライアントは、直接の接続を確立できなかった場合にだけフェイルオーバーして、GateKeeper によってサーバーにバインドします。サーバーによって使用されるデフォルトのサーバーエンジンが `iiop_tp` だとすると、ファイアウォール設定の典型的なプロパティは次のようになります。

```
vbroker.orb.exportFirewallPath=true
vbroker.se.iiop_tp.firewallPaths =Queen,King
vbroker.firewall-path.Queen=Atlantic,Pacific
vbroker.firewall-path.King=Indian
vbroker.firewall-path.Atlantic.type=TCP
vbroker.firewall-path.Atlantic.host=www.borland.com
vbroker.firewall-path.Atlantic.iiop_port=25000
vbroker.firewall-path.Atlantic.iiop_port=25003
vbroker.firewall-path.Atlantic.ssl_port=25004
vbroker.firewall-path.Pacific.type=PROXY
vbroker.firewall-path.Pacific.ior=http://www.mygk1domain.com/gatekeeper.ior
vbroker.firewall-path.Indian.type=PROXY
vbroker.firewall-path.Indian.ior=http://www.mygk1domain.com/gatekeeper.ior
```

クライアント側の設定では、GateKeeper IOR をクライアント ORB に提供できます。この場合、クライアントは、すべてのオペレーションを GateKeeper を使って実装します。この場合は、次のプロパティを使用できます。

```
vbroker.orb.alwaysProxy=true
vbroker.orb.gatekeeper.ior=http://www.mydomain.com/gatekeeper.ior
```

クライアントがスマートエージェントにアクセスできない場合に、GateKeeper を使ってサーバーオブジェクトを検索することもできます。その場合は、GateKeeper を介してロケーションサービスを使用することをお勧めします。それには、GateKeeper で次のプロパティを使用します。

```
vbroker.gatekeeper.locationService=true
```

また、オブジェクトを検索するために、クライアント側で次のプロパティを使用します。

```
vbroker.locator.ior=http://www.mydomain.com/gatekeeper.ior
```

HTTP プロキシサーバーを使用した GateKeeper の設定

クライアントと GateKeeper の間で HTTP プロキシサーバーが実行されている場合、GateKeeper は、HTTP プロキシサーバーの IP ホスト/ポートアドレスを IOR で公開する必要があります。それには、次に説明する方法にしたがいます。次の GateKeeper プロパティを設定します。この設定は、ネットワークアドレス変換の設定に似ています。この場合、HTTP プロキシサーバーは NAT として機能します。

```
vbroker.se.exterior.proxyHost=142.186.142.21
vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.listener.proxyPort=32001
```

- メモ** 上の 2 つのプロパティの設定は、必須ではありません。この設定では、GateKeeper が NAT デバイスの背後にあります。したがって、HTTP トンネリングを使って GateKeeper と通信しようとするすべてのクライアントは、常に HTTP プロキシサーバーを介して要求を渡します。

GateKeeper へのサーバーエンジンの追加

GateKeeper では、次の 3 つの組み込みサーバーエンジンを利用できます。

- iiop_tp
- 外部
- 内部

iiop_tp サーバーエンジンは、管理目的でのみ使用されます。外部サーバーエンジンと内部サーバーエンジンは、それぞれ外部ネットワークと内部ネットワークのために使用されます。TCP/IP ネットワークを使用する場合、各サーバーエンジンは、ネットワーク IP ホストアドレスに関連付けられます。次に例を示します。

```
vbroker.se.exterior.host=142.186.142.21
vbroker.se.interior.host=142.186.182.30
vbroker.se.iiop_tp.host=192.73.8.25
```

このバージョンの GateKeeper では、プロパティファイルを使って新しいサーバーエンジンを追加することはできません。

GateKeeper へのリスナーまたはサーバー接続マネージャの追加

GateKeeper には、特定の種類のサービスに対して複数のサーバー接続マネージャ (SCM) またはリスナーを設定できます。通常、SCM は、IIOP、SSL、HIOP、HIOPS などの特定の種類のサービスを提供します。各 SCM は、外部サーバーエンジンや内部サーバーエンジンなどのサーバーエンジンにバインドされます。SCM を設定するには、論理名 (たとえば、myscm) を割り当て、この名前を次のプロパティに追加する必要があります。

```
vbroker.se.exterior.scms=ex-iiop,ex-hiop,myscm
```

さらに、各 SCM に対して次のプロパティを追加する必要があります。詳細については、付録 A を参照してください。

```
vbroker.se.exterior.scm.myscm.manager.type=Socket
vbroker.se.exterior.scm.myscm.manager.connectionMax=0
vbroker.se.exterior.scm.myscm.manager.connectionMaxIdle=0
vbroker.se.exterior.scm.myscm.listener.type=IIOP
vbroker.se.exterior.scm.myscm.listener.port=683
vbroker.se.exterior.scm.myscm.listener.proxyPort=0
vbroker.se.exterior.scm.myscm.listener.giopVersion=1.2
vbroker.se.exterior.scm.myscm.dispatcher.type=ThreadPool
vbroker.se.exterior.scm.myscm.dispatcher.threadMax=100
vbroker.se.exterior.scm.myscm.dispatcher.threadMin=0
vbroker.se.exterior.scm.myscm.dispatcher.threadMaxIdle=300
```

GateKeeper のストレス/負荷メトリック

GateKeeper は Java ベースの ORB サービスインプリメンテーションなので、さまざまな Java ツールを使ってパフォーマンス特性を取得できます。

VisiBroker コンソールは、任意の ORB サービス (GateKeeper を含む) に関するリアルタイムのパフォーマンス特性を提供します。割り当てメモリ、スレッド数、接続、フラグメンテーションなどに関する情報を表示できます。

サーブレットとしての GateKeeper の配布

ここでは、GateKeeper をサーブレットとして Tomcat 5.0 Web サーバーに配布する例について説明します。これ以外のバージョンの Tomcat を使用している場合は、多少の変更が必要です。

この例では、用意されている Client.properties とともに bank_agent サンプルを使用します。Client.properties の主な目的は、Web サーバーに埋め込まれた GateKeeper サーブレットを介してのみサーバーに接続するようにクライアントに指示することです。bank_agent サンプルは、次のディレクトリにあります。

```
<install_dir>/examples/vbroker/basic/bank_agent
```

このシナリオでサンプルを実行するために、ほかに次のファイルが必要です。

- **web.xml** - サーブレットとして配布される GateKeeper の配布デスクリプタ。
- **Client.properties** - Web サーバー内にサーブレットとして埋め込まれた GateKeeper を介して bank_agent クライアントが Bank サーバーに接続するように設定するためのプロパティ。

最後に、web.xml と Client.properties のダンプ画面があります（「web.xml」と「Client.properties」を参照）。これを指定されたディレクトリの指定されたファイルにコピー、貼り付け、および保存できます。

サンプルのビルド

- 1 <http://jakarta.apache.org/tomcat/index.html> から無料の Tomcat Web サーバーをダウンロードし、次の手順にしたがってインストールします。Web ブラウザを起動して <http://localhost:8080> を参照すると、正常にインストールされたかどうかを確認できます。
- 2 web.xml（「web.xml」を参照）を <Tomcat root install>/webapps/gatekeeper_servlet/WEB-INF/web.xml にコピーして貼り付け、保存します。必要に応じてサブディレクトリを作成します。
- 3 次のファイルを開き、編集します。

```
<Tomcat root install>/webapps/gatekeeper_servlet/WEB-INF/web.xml
```

osagent Tomcat ポートを正しく参照するように、次の部分を変更します。

```
<init-param>
  <param-name>vbroker.agent.port</param-name>
  <param-value>YOUR OSAGENT PORT</param-value>
</init-param>
...
<init-param>
  <param-name>
    vbroker.se.exterior.scm.ex-hiop.listener.port
  </param-name>
  <param-value>
    TOMCAT HTTP PORT. OUT OF TOMCAT BOX, THIS MUST BE 8080
  </param-value>
</init-param>
```

- 4 次の場所にある jar を

```
<install_dir>/lib/
```

次の場所にコピーします。

```
<Tomcat install root dir>/shared/lib
```

Tomcat の `shared/lib/` ディレクトリに `jar` を配置すると、コンテナ内に配置されたすべての Web アプリケーションからこれらの `jar` を利用できるようになります。これでは不都合がある場合は、Tomcat のマニュアルを参照して、ほかの `lib` ディレクトリに配置してください。

- `lm.jar`
- `sanctuary.jar`
- `vbjorb.jar`
- `sanct4.jar`
- `vbjclientorb.jar`
- `vbsec.jar`

- 5 `Client.properties`（「`Client.properties`」を参照）を次のディレクトリにコピーして貼り付け、保存します。

```
<install_dir>/examples/vbroker/basic/bank_agent
```

そのファイルを開き、次の設定を編集します。

```
vbroker.orb.gatekeeper.iior=http://<host>:<port>/gatekeeper_servlet/
gatekeeper.iior
```

この `<host>` は Tomcat が実行されているコンピュータの IP、`<port>` は Tomcat が監視している HTTP ポートです。これは、上の `web.xml` 内のポートと同じ番号です。デフォルトで Tomcat をインストールした場合は、8080 になります。

サンプルの実行

- 1 既存の VisiBroker に適切な環境を設定します。UNIX プラットフォームでは、`${VBROKERDIR}/vbroker.sh` を実行します。
- 2 必要に応じて、`basic/bank_agent` サンプルをビルドします。
- 3 `osagent` が実行されていることを確認します。
- 4 `${JAVA_HOME}` と `${PATH}` が同じ適切な JDK を参照していることを確認します。
- 5 次のコマンドを実行して、Tomcat を起動します。

Windows :

```
<Tomcat root install>/bin/startup.bat
```

UNIX :

```
<Tomcat root install>/bin/startup.sh
```

- 6 サンプルの `basic/bank_agent` ディレクトリに移動します。

```
<install_dir>/examples/vbroker/basic/bank_agent
```

- 7 次のコマンドを実行して、Bank サーバーを起動します。

```
vbj Server
```

- 8 次のコマンドを実行して、クライアントを起動します。

```
vbj -DORBpropStorage=Client.properties Client
```

web.xml

```
<?xml version="1.0" encoding="ISO-8859-1"?>
<!DOCTYPE web-app PUBLIC "-//Sun Microsystems, Inc.//DTD Web Application 2.3//
EN" "http://java.sun.com/dtd/web-app_2_3.dtd">
<web-app>
```

```

<display-name>GateKeeper Servlet</display-name>

<description>サーブレットとしての GateKeeper のサンプル</description>

<servlet>

  <servlet-name>GateKeeperServlet</servlet-name>

  <servlet-class>
    com.inprise.vbroker.gatekeeper.servlet.Servlet
  </servlet-class>

  <load-on-startup />

  <init-param>
    <param-name>
      vbroker.se.exterior.scm.ex-hiop.listener.path
    </param-name>
    <param-value>
      /gatekeeper_servlet/servlet
    </param-value>
  </init-param>

  <init-param>
    <param-name>vbroker.agent.port</param-name>
    <param-value>PUT YOUR OSAGENT PORT</param-value>
  </init-param>

  <!-- Some setups may not allow UDP broadcast to locate osagent
  In that case, uncomment and set the following correctly
  <init-param>
    <param-name>vbroker.agent.address</param-name>
    <param-value>
      PUT IP OF THE MACHINE, ON WHICH OSAGENT IS RUNNING
    </param-value>
  </init-param>
  -->

  <init-param>
    <param-name>vbroker.gatekeeper.referenceStore</param-name>
    <param-value>
      webapps/gatekeeper_servlet/gatekeeper.ior
    </param-value>
  </init-param>

  <init-param>
    <param-name>vbroker.se.exterior.scms</param-name>
    <param-value>ex-iiop,ex-hiop</param-value>
  </init-param>

  <!-- If you want Visibroker log messages, uncomment this.
  Log messages will go to the specified file below, relative
  to Tomcat root install dir

  <init-param>
    <param-name>vbroker.orb.debug</param-name>
    <param-value>true</param-value>
  </init-param>

  <init-param>
    <param-name>vbroker.orb.logLevel</param-name>
    <param-value>7</param-value>
  </init-param>

  <init-param>

```



```

        <param-name>vbroker.orb.warn</param-name>
        <param-value>2</param-value>
    </init-param>

    <init-param>
        <param-name>vbroker.orb.logger.output</param-name>
        <param-value>webapps/gatekeeper_servlet/log.txt</param-value>
    </init-param>
-->

    <init-param>
        <param-name>
            vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.listener.type
        </param-name>
        <param-value>Disabled-IIOP</param-value>
    </init-param>

    <init-param>
        <param-name>
            vbroker.se.exterior.scm.ex-hiop.listener.port
        </param-name>
        <param-value>8080</param-value>
    </init-param>

    <init-param>
        <param-name>
            vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.listener.port
        </param-name>
        <param-value>0</param-value>
    </init-param>

</servlet>

<servlet-mapping>
    <servlet-name>GateKeeperServlet</servlet-name>
    <url-pattern>/servlet</url-pattern>
</servlet-mapping>

</web-app>

```

Client.properties

```

# 次は 1 行です。
vbroker.orb.dynamicLibs=com.inprise.vbroker.firewall.Init,com.inprise.vbroker.H
IOP.Init

vbroker.orb.alwaysTunnel=true
vbroker.orb.alwaysProxy=true

# 次は 1 行です。
vbroker.orb.gatekeeper.iior=http://host:8080/gatekeeper_servlet/gatekeeper.iior

# デバッグメッセージを使用する場合は、以下の行のコメントを解除します。
# vbroker.orb.debug=true
# vbroker.orb.warn=2
# vbroker.orb.logLevel=7

```


索引

記号

... 省略符 4
[] ブラケット 4
| 縦線 4

A

alwaysProxy 29
alwaysSecure 30
alwaysTunnel 29

B

Borland Web サイト 4, 5
Borland 開発者サポート, 連絡 4
Borland テクニカルサポート, 連絡 4

C

CORBA 7
CORBA サービス
 GateKeeper での使用 112

D

DMZ
 GateKeeper 97
dynamicLibs
 GateKeeper のプロパティ 74, 79
dynamicsLibs
 GateKeeper 76

E

ex-iiop 23
ex-iiop のプロパティ
 GateKeeper 64
ex-iiops のプロパティ
 GateKeeper 67
ex-iiop 23
ex-iiop のプロパティ
 GateKeeper 66
ex-ssl のプロパティ
 GateKeeper 68

F

fault_tolerance
 GateKeeper での使用 43

G

GateKeeper
 CORBA サービス 112
 ex-iiop のプロパティ 64
 ex-iiops のプロパティ 67
 ex-iiop のプロパティ 66
 ex-ssl のプロパティ 68
 fault_tolerance 43
 HTTP トンネリング 112
 HTTP プロキシサーバー 112
 IIOP プロキシとして 89
 in-iiop のプロパティ 69
 in-ssl のプロパティ 70
 NT サービスとして起動 10

NT サービスの削除 10
ORB のプロパティ 79
SSL 89
SSL 接続 48
SSL 双方向通信 48
ThreadPool 46
ThreadSession 46
vbroker のプロパティ 79
VisiBroker 3.x コールバックのプロパティ 73
VisiBroker コンソール 10
Web サーバーとして 89
アクセスコントロール 40
アクセスコントロールのプロパティ 72
一般プロパティ 63
インストール 8
エラーと FAQ 60
および SSL 47
下位互換性があるプロパティ 78
外部サーバーエンジンプロパティ 64
カスタマイズされた負荷分散 43
管理 10
管理のプロパティ 71
キャッシュ管理 44
クライアント側サーバーエンジンプロパティ 64
クラスタ 42, 43
コールバック 36
互換性
 VisiBroker 4.x 以前のバージョン 78
コマンドラインからの起動 9
サーバーエンジン 113
サーバー側内部エンジンプロパティ 69
サーバー接続マネージャ 113
サブレットとして起動 10
サブレットとしての配布 114
サブネット環境 108
ストレスメトリック 113
スマートエージェントプロパティ 77
スレーブ 42
スレッド管理 45
静的チェーン化 35
セキュリティ 48
セキュリティに関する注意 39
セキュリティプロパティ 72
接続 45, 46
双方向コールバック 38
双方向通信 38
双方向通信プロパティ 75
チェーン化 35, 105
定義 7
デバッグモードでの起動 55
デバッグ→「トラブルシューティング」 53
デュアルホームホスト 89
動的チェーン化 36
トラブルシューティング 53
内部サーバーエンジンプロパティ 69
ネーミングサービス 51
パススルー接続プロパティ 76
パススルーモード 46
パフォーマンスに関するガイドライン 44
パフォーマンスプロパティ 46
ビッドメカニズム 44
非同期呼び出し 45
ファイアウォールプロパティ 78
負荷分散 42

- 負荷メトリック 113
- 複数のファイアウォール 108
- プロキシサーバー 61
 - マスター 42
- メッセージマーシャリング 45
- 呼び出しの種類 47
- ライセンス 48
- リスナー 113
- ロケーションサービスのプロパティ 77
- OAD 23
- VisiSecure (Java) 24
- オブジェクトアクティベーションデーモン 23
- 管理サービス 22
 - コールバック 22
 - サービスの設定 21
 - スマートエージェントの使い方 23
 - セキュリティサービス (Java) 24
 - 設定 21
 - デュアルホームホスト 12
 - ネットワーク間デバイス 15
 - 配布場所 11
 - パススルー接続 22
 - ファイアウォール構成 20
 - 複数のネットワーク 15
 - ポート設定 21
 - マルチホームホスト 18
 - リスナーポート 21
 - 隣接したネットワーク 12
 - ロケーションサービス 23
- Gatekeeper の管理 10
- Gatekeeper の起動
 - NT サービスとして 10
 - コマンドラインオプション 9
 - コマンドラインから 9
- GateKeeper の削除
 - NT サービスとして 10
- Gatekeeper のチェーン化
 - クライアント側 105
 - サーバー側とクライアント側 105
 - サーバー側の配布可能な 105
- GateKeeper のパフォーマンス 10
- Gatekeeper の Java サンドボックスセキュリティ 11
- GateKeeper のパススルー接続 22
- GIOP
 - GateKeeper のプロパティ 74
- GIOP プロキシサーバー 7

H

- HIOP
 - GateKeeper 10
- HIOP のプロパティ
 - GateKeeper 64
- hiop_ts 23
- HIOPS のプロパティ
 - GateKeeper 67
- HTTP トンネリング 89
 - GateKeeper 29, 112
- HTTP トンネリング構成例
 - GateKeeper 89
- HTTP プロキシサーバー
 - GateKeeper 112
- HTTP トンネリング 11

I

- IIOP
 - GateKeeper 81, 100

- IIOP のプロパティ
 - GateKeeper 66, 69
- IIOP プロキシ構成例
 - GateKeeper 89
- IIOP リスナーポート 32
 - 無効化 32
- IIOP/SSL
 - GateKeeper 81
- iiop_tp 23
- iiop_tp サーバーエンジン
 - GateKeeper 113
- IIOP プロキシ
 - GateKeeper 11
- in-hiop
 - GateKeeper 23
- in-iiop のプロパティ
 - GateKeeper 69
- in-SSL
 - GateKeeper 23
- in-ssl のプロパティ
 - GateKeeper 70
- IOR ファイル
 - GateKeeper のトラブルシューティング 60
- IP 転送
 - GateKeeper 19

J

- Java ポリシー
 - GateKeeper のトラブルシューティング 59

N

- NAT
 - 構成例 81
 - GateKeeper 21
 - 構成例
 - GateKeeper 94
 - NAT (ネットワークアドレス変換) 32
 - netstat
 - GateKeeper での使用 56
- NIC
 - GateKeeper での使用 18
- nslookup
 - GateKeeper での使用 56

O

- OAD
 - GateKeeper 23
- ORB
 - GateKeeper のプロパティ 79
- OSAGENT_CLIENT_HANDLER_PORT 109
- OSAGENT_PORT 109
- osfind
 - GateKeeper での使用 56

P

- PDF マニュアル 3
- ping
 - GateKeeper での使用 56
- POA
 - GateKeeper でグローバルに設定 28
 - GateKeeper で個別にプログラミング 27
- printior
 - GateKeeper での使用 56
- proxyPassthru 30

R

route

GateKeeper での使用 56

S

SCM

ex-hiop のプロパティ 64
ex-hiops のプロパティ 67
ex-iiop のプロパティ 66
ex-ssl のプロパティ 68
GateKeeper のプロパティ 64, 71
in-iiop のプロパティ 69
in-ssl のプロパティ 70
ex-hiop 23
ex-iiop 23
GateKeeper 23
hiop_ts 23
iiop_tp 23
in-hiop 23
in-SSL 23

SSL

GateKeeper 47
GateKeeper での双方向通信 48
GateKeeper のトラブルシューティング 60
GateKeeper のプロパティ 76

SSL 構成例

GateKeeper 89

SSL 接続

GateKeeper 30
Gatekeeper 48

SSL のプロパティ

GateKeeper 68, 70

T

TCP ファイアウォール 33

ThreadPool

GateKeeper 46

ThreadSession

GateKeeper 46

traceroute

GateKeeper での使用 56

tracert

GateKeeper での使用 56

V

vbroker

GateKeeper のプロパティ 79

vbroker.orb.dynamicLibs プロパティ 24

vbroker.se.exterior.scm.ex-hiop.listener.type プロパティ 24

vbroker.se.exterior.scm.ex-iiop.listener.type プロパティ 24

vbroker.se.exterior.scms プロパティ 24

vbroker.security.disable プロパティ 24

VisiBroker 3.x コールバック 31

VisiBroker コンソール

GateKeeper 10

VisiBroker の概要 1

VisiSecure (Java)

GateKeeper 24

W

Web サーバー

GateKeeper での使用 10

Web サーバーシナリオ

GateKeeper 89

Web サイト

Borland ニュースグループ 5

ボーランド社の更新されたソフトウェア 5

ボーランド社のマニュアル 5

あ

アクセス規則

GateKeeper 40

アクセスコントロール

GateKeeper 40

アクセスコントロールのプロパティ

GateKeeper 72

い

一般プロパティ

GateKeeper 63

インストール

GateKeeper 8

え

エラーと FAQ

GateKeeper 60

お

応答時間

GateKeeper 44

オブジェクトアクティベーションデモン

GateKeeper 23

オンラインヘルプトピック, アクセス 3

か

下位互換性

GateKeeper のプロパティ 78

開発者サポート, 連絡 4

外部サーバーエンジン 23

GateKeeper 113

外部サーバーエンジンのプロパティ

GateKeeper 64

概要 1

環境変数

GateKeeper 55

管理サービス 22

管理のプロパティ

GateKeeper 71

き

記号

省略符 ... 4

縦線 | 4

ブラケット [] 4

起動オプション

-h 9

-J-D 9

-props 9

-quiet 9

偽ポート

GateKeeper 32

キャッシュ

管理, GateKeeper 44

く

- クライアント側サーバーエンジンのプロパティ
GateKeeper 64
- クライアント側ファイアウォール 7
GateKeeper 100
- クライアントプロパティ
GateKeeper で設定 29
- クラスタ
GateKeeper 42, 43, 74

こ

- 構成例
 - GateKeeper の背後のファイアウォール 97
 - HTTP トンネリング 89
 - IIOP 81
 - IIOP プロキシ 89
 - IIOP/SSL 81
 - NAT を使用した GateKeeper の背後のファイアウォール 97
 - NAT を使用したサーバー側のファイアウォール 94
 - SSL 89
 - Web サーバー 89
 - アドレスとポートの変換 81
 - アドレス変換 81
 - クライアント側のチェイン化 105
 - クライアント側ファイアウォール 100
 - コールバック 81, 89, 94, 97, 105
 - サーバー側とクライアント側のチェイン化 105
 - サーバー側のチェイン化 105
 - サーバー側ファイアウォール 94
 - スマートエージェント 81, 97
 - セキュリティで保護された HTTP トンネリング 89
 - 双方向通信 81, 89, 94, 97, 105
 - デュアルホームホスト設定 89
 - パススルー 89, 94, 97, 105
 - ファイアウォールとスマートエージェント 109, 110, 111
 - フォールトトレランス 102
 - 負荷分散 102
 - 複数のファイアウォール 81
 - ポート変換 81
 - マスター/スレーブ設定 102
- コールバック
 - GateKeeper 22
 - GateKeeper での使用 36
 - VisiBroker 3.x スタイル 31
 - VisiBroker 3.x のプロパティ 73
 - VisiBroker 3.x スタイル 22
 - 構成例 89, 94
 - 双方向通信, GateKeeper 38
 - リスナーポート 31
- コールバック構成例
GateKeeper 81, 89, 97, 105
- コールバックの種類
GateKeeper 47
- 互換性
VisiBroker 4.x 以前のバージョン 78
- コマンドラインオプション
GateKeeper 9
- コマンド, 規約 4

さ

- サーバーエンジン
GateKeeper 113, 23
- GateKeeper のプロパティ 64, 69, 71
- サーバー側内部エンジンのプロパティ

- GateKeeper 69
- サーバー側ファイアウォール 7
GateKeeper 94
- サーバー接続マネージャ
 - ex-hiop のプロパティ 64
 - ex-iiops のプロパティ 67
 - ex-iiop のプロパティ 66
 - ex-ssl のプロパティ 68
 - GateKeeper 113
 - GateKeeper のプロパティ 64, 71
 - in-iiop のプロパティ 69
 - in-ssl のプロパティ 70
- サーバー接続マネージャ → 「SCM」 23
- サービス, GateKeeper で設定 21
- サブレット
GateKeeper の実行 10
- サブネット環境
GateKeeper での使用 108
- サポート, 連絡 4
- サンドボックスセキュリティ
GateKeeper 11

す

- スケラビリティ
GateKeeper 44
- ストレステトリック
GateKeeper 113
- スマートエージェント 81
GateKeeper 97, 23
- GateKeeper でのファイアウォール 109, 110, 111
- GateKeeper のトラブルシューティング 58
- GateKeeper のプロパティ 77
- クライアントの動作 111
- ポート設定 111
- スレーブ GateKeeper 42
- スレッド
管理, GateKeeper 45

せ

- 静的チェイン化
GateKeeper 35
- セキュリティ
GateKeeper 39
- GateKeeper での有効化 48
- アクセスコントロールのプロパティ 72
- セキュリティサービス
GateKeeper 48
- GateKeeper のプロパティ 76
- セキュリティサービス (Java)
GateKeeper 24
- セキュリティで保護された HTTP トンネリング 89
- セキュリティで保護された HTTP トンネリング構成例
GateKeeper 89
- セキュリティで保護された接続
GateKeeper 30
- 接続
GateKeeper 46
- セキュリティ保護, GateKeeper 30
- パススルー, GateKeeper 30
- 接続, 管理, GateKeeper 45
- 接続マネージャ
GateKeeper 113

そ

- 双方向通信 38

GateKeeper のプロパティ 75
構成例 89, 94
双方向通信, GateKeeper 38
双方向通信構成例
GateKeeper 81, 97, 105
双方向通信構成例 :: GateKeeper 89
ソフトウェアの更新 5

ち

チェイン化
GateKeeper 35
GateKeeper の静的チェイン化 35
GateKeeper の動的チェイン化 36

つ

通信パス
GateKeeper 31, 32

て

ディストリビュータ
GateKeeper のプロパティ 74
テクニカルサポート, 連絡 4
デバッグ
GateKeeper → 「トラブルシューティング」 53
デバッグモード
GateKeeper の起動 55
デュアルホームホスト, GateKeeper の使用 12
デュアルホームホスト構成例
GateKeeper 89

と

動的チェイン化
GateKeeper 36
トラブルシューティング
GateKeeper 53
GateKeeper での SSL 60
GateKeeper でのスマートエージェント 58
GateKeeper でのファイアウォール 60
GateKeeper の IOR ファイル 60
GateKeeper の Java ポリシー 59
GateKeeper の一般的なエラーと FAQ 60
GateKeeper のパススルー接続 59
GateKeeper のプロパティファイル 59
GateKeeper のルーティングテーブル 59
環境変数 55
ネットワークの設定 57
ログの有効化 GateKeeper 53
ログレベル GateKeeper 53
トラブルシューティングツール
GateKeeper 56
トラブルシューティングのコマンドオプション
GateKeeper 55
クライアント 55
サーバー 55
トンネリング
HTTP, GateKeeper 29

な

内部サーバーエンジン
GateKeeper 113, 23
内部サーバーエンジンのプロパティ
GateKeeper 69

に

ニュースグループ 5

ね

ネーミングサービス
GateKeeper 51
ネットワークアドレス変換
GateKeeper 21
ネットワークアドレス変換 (NAT) 32
ネットワークインターフェースカード
GateKeeper での使用 18
ネットワーク間デバイス
GateKeeper での使用 15
ネットワークの設定
GateKeeper での使用 57

は

パススルー
構成例 89
パススルー構成例
GateKeeper 89, 94, 97, 105
パススルー接続
GateKeeper 30
GateKeeper のトラブルシューティング 59
GateKeeper のプロパティ 76
パススルーモード
GateKeeper 46
パフォーマンス
GateKeeper 44
GateKeeper のプロパティ 46, 74

ひ

ビッド順
GateKeeper のクライアント 31
ビッドメカニズム
GateKeeper 44
非同期呼び出し
GateKeeper 45
非武装地帯
GateKeeper 97

ふ

ファイアウォール
GateKeeper 20
GateKeeper でのスマートエージェント 109, 110, 111
GateKeeper でのトラブルシューティング 60
GateKeeper と複数の ... 108
GateKeeper のプロパティ 78
クライアント側 7, 100
サーバー側の配布可能な 7, 94
ファイアウォール構成 32
ファイアウォールパッケージ
GateKeeper でのロード 28
フォールトトレランス
GateKeeper 102
負荷分散
GateKeeper 102
GateKeeper でのカスタマイズ 43
GateKeeper での使用 42
GateKeeper のプロパティ 74
負荷メトリック
GateKeeper 113
複数のネットワーク

GateKeeper での使用 15
複数のファイアウォール
GateKeeper 81
プロキシ 7
プロキシサーバー
GateKeeper での使用 61
プロパティファイル
GateKeeper のトラブルシューティング 59

へ

ヘルプトピック, アクセス 3

ほ

ポート
GateKeeper で設定 21
ポート変換
GateKeeper 32

ま

マーシャリング
メッセージ, GateKeeper 45
マスター GateKeeper 42
マスター/スレーブ
GateKeeper 102
マニュアル 2
.pdf 形式 3
Borland セキュリティガイド 2
VisiBroker for .NET 開発者ガイド 2
VisiBroker for C++ API リファレンス 2
VisiBroker for C++ 開発者ガイド 2
VisiBroker for Java 開発者ガイド 2
VisiBroker GateKeeper ガイド 3
VisiBroker VisiNotify ガイド 2
VisiBroker VisiTelcoLog ガイド 3
VisiBroker VisiTime ガイド 2
VisiBroker VisiTransact ガイド 2
VisiBroker インストールガイド 2
Web 5
Web での更新 3
使用されている表記規則のタイプ 4
使用されているプラットフォームの表記規則 4
ヘルプトピックの表示 3
マルチホームホスト

GateKeeper 18

め

メッセージマーシャリング
GateKeeper 45

よ

呼び出しの種類
GateKeeper 47

ら

ラウンドロビン
GateKeeper のプロパティ 74
ラウンドロビンアルゴリズム
GateKeeper 負荷分散 43

り

リスナー
GateKeeper 113
リスナーポート
GateKeeper 21
IIOP 32
VisiBroker 3.x コールバック 31
ランダム 31
隣接したネットワーク 12

る

ルーティングテーブル
GateKeeper 19
GateKeeper のトラブルシューティング 59

ろ

ログの有効化
GateKeeper 53
ログレベル
GateKeeper 53
ロケーションサービス
GateKeeper 23
GateKeeper のプロパティ 77